

又

① 日用の工夫は前書に已に葛藤すること少からず、但だ只だ舊に依つて、不變不動にして物來らば、則ち之れと酬酢せよ、自然に物と我と一如ならん。古徳云く、「放曠として其の去住に任せ、靜鑑して其の源流を覺せよ、證を語るときは則ち人に示すべからず、理を説くときは則ち證に非ざれば了せず」と。自證自得の處は拈出して人に呈似すること得ず、唯だ親證親得したる者は、略目前の些子を露せば、彼此便ち黙黙として相契ふ。此れより人の謾を被らず、錯つて工夫を用ひすといふことを示論せらる。大槩已に正しく禱柄已に得たり。善く牛を牧ふ者の如き、索頭常に手中に在らば、爭か人の苗稼を犯すことを得ん。蕤地に索頭

深錐を下す。

① 第一段、來意を承知す。
 ② 境に對して轉ぜられざる也。
 ③ 法即ち人、人即ち法にして法と人と融合せるを一如といふ。彌燈三、蓋山破遺章、碧巖十の評に云々。
 ④ 第二段、自得自知を論ず、自得の境は別人に問はざる處に在り、然れども知識の證明を受けずんばあるべからず、故に之を引く。古徳とは、清涼鎮國大師澄觀なり、傳燈三十五に詳なり。放曠は、物に拘はらざるなり。
 ⑤ 靜鑑は靜寂鑑照なり、所謂止觀なり、これ自悟の境界をいふ。源流は本末又は體用なり、其の源を靜にし、其流を鑑みるのいひなり。
 ⑥ 略はすこしこの意。
 ⑦ 第三段、牧牛の法を教ふ。設は一に瞞の字に作れり。

⑧ 錯り等とは人の射を學ぶが如し、的を得ずんば虛業となす、今は既に見得するが故に錯らざるなり。
 ⑨ 大槩の上に「公」の字を加へ見よ、大槩は大抵なり、正は眞正なり。
 ⑩ 善く等は、遺教經に云々。
 ⑪ 驚地等とは、此れより前きは心の師となりて、心を師とせず、即ちいまは心の師となつて自然に自由にして觸犯せずとなり。鼻孔は、牛の鼻孔に曲木を施す故に爾かいふ。
 ⑫ 撈摸とは繩索を拈却す、故に沒可把、沒巴鼻の境界、次第に純熟す、好箇の境界なり。
 ⑬ 平田は碧巖八十一則の垂示。
 ⑭ 慈明は正法眼藏、僧寶傳二十一、慈明。牧童の歌を作つて曰く云々。
 ⑮ 従前は他の苗稼を犯さんことを恐る、今は已に純熟する故

を放卻すれば、鼻孔撈摸する處なく、平田の淺草、縱横するに一任す。

① 慈明の老人の所謂四方に放ち去つて、攔遏すること休れ、八面拘ることなく意に任せて遊ぶ、收めんと要すれば只だ索頭に在つて、撥すと。未だ是くの如くなること能はずんば、當に緊しく索頭を把りて且く與に順に摩持すべし。淹浸の工夫既に熟せば、自然に意を用ひて隄防することを著され。工夫急なるべからず、急なるときは則ち躁動す。又緩なるべからず、緩なるときは則ち昏但す。忘懷し、著意せば俱に蹉過せん。譬へば劍を擲つて空に揮ふが如し、及ぶと及ばざるとを論ずること莫れ。昔、嚴陽尊者、趙州に問ふ、「一物不將來の時如何ん。」州云く、「放下着。」嚴陽云く、「一物既に不將來、箇の甚麼をか放下せん。」州云く、「放不下ならば擔取し去れ。」嚴陽、言下に於て大悟す。又僧あり、古徳に問ふ、「學人、奈何ともすること得ざる時如何ん。」古徳云く、「老僧も亦奈何ともすること得ず。」僧云く、「學人は學地に在り、故に是れ奈何ともすること得ず、和尙は是れ大善知識なり、甚麼と爲てか亦奈何ともすること得ざる。」古徳云く、「我れ若し奈何ともすること得ば則使ち爾が這の奈何ともせざることを拈

に、放去すと雖も犯さざるなり。

② 設は索頭を投ぐるなり。
 ③ 當等は心の師となりて、放逸せしめざるなり。摩持はなでおろすなり、此は心を安住するをいふ、若し逆毛を摩持すれば心動亂するが故に。
 ④ 淹浸は打成一片の工夫を喻ふ。
 ⑤ 自然に苗稼を犯さざるなり。隄防とは心を制禁して放逸せざらしむるをいふ。
 ⑥ 第四段、直前の工夫を示す。
 ⑦ 躁動は闌亂なり、昏但は心傷き黑漫漫地の謂なり、即ち掉舉昏沈をいふ。
 ⑧ 譬等は傳燈七疊山草。意は無心にして任運に物に應じて誤らざるをいふ。
 ⑨ 及と不及とは、物に應ずると物に應ぜざるとなり、意は是非得失に管せざるなり。管せ

卻せん。僧、言下に於て大悟す。二僧の悟處即ち是れ樓樞密が迷處なり。樓樞密が疑處は即ち是れ二僧の間處なり。法は分別より生じて還つて分別より滅す、諸の分別の法を滅すれば、是の法は生滅なし。細かに來書を觀るに、病已に去り盡きぬ、別の證候も亦生ぜじ、大段相近し、亦漸く力を省けり。請ふ只だ省力の處に就いて、放つて蕩蕩地ならしめよ。忽然として、啤地に破し、曝地に斷せば便ち了せん。千萬之れを勉めよ。

曹太尉に答ふ 功顯

某、年運つて往くと雖も、敢て勉強して力めて此の事を以て禘子の輩と激揚せずんばあらず。一日、粥後に牌子を撥して、一百人を輪して入室せしむ。問、命を負ふ者鈎に上

ざれば自然に恰好なり。此は工夫の用心を示し、有心無心に隨せざらしめんが爲にいふ。

法とは一切萬法なり、即ち萬法は妄分別より生ず、生滅に別物の生滅なし。

第五段、款に依つて案を決す、傳燈十一。引く意は、一物不將來といふ、此には不變不動といふ、其見解相同じきが故に之を引く。此は大惠、樓を發して言ふ。嚴陽は趙州從諗禪師の法嗣。

諸法は元來生滅にあらず、然るに是か不是かと疑ふ便ち是れ妄分別に依る、不變不動は是にあらず不是にあらず、之に依つて修し去らば、自然に本分地に到り得ん、不變不動の處即ち是といふにあらず。

又僧とは、傳燈十六。雲蓋山子元禪師なり、聯燈二十二に云云。

證候とは徵候に同じきか、これ病に從へて云ふ、醫して不變不動の處に到る故に餘の毛病生ぜず、然るに是を認めて可となさば、却つて大病とならん。

二僧は悟り去る、樓は未だ悟らず、故に迷處といふ。

大段は大抵の様子なり、得道に近づくなむ。

疑處とは、意は他に對して不變不動の地位に至る、此れ是なりや否やと問ふ、これ光影邊の第二病の處に到り得る故に。

蕩蕩は、法度敗壞の貌。

之れは學者を激發する親切の語なり、金剛三昧經下の文、

啤地に驚たり、上に出づ。

り來るあり、亦人を咬む師子あり、此の法喜禪悅を以て樂みと爲して殊に倦むことを覺えず、亦造物に憐まるのみ。左右は福慧兩ながら全し、日に至尊の側に在りて、而して意を此の段の大事因縁に留む、眞に不可思議の事なり。釋迦老子曰く、「勢ありて臨まざる事難し、豪貴にして道を學ぶこと難し」と。百劫千生、會て善知識に承事して般若の種子を種え得ること深きに非ずんば、焉んぞ能く是くの如くに信得及せんや。只だ這の信得及する處、便ち是れ成佛作祖する底の基本なり。願くは公、只だ信得及するの處に向つて觀捕せば、久久にして自ら透脱せん。然も第一には意を著けて安排して、透脱の處を覓むことを得ざれ。若し意を著けば則ち蹉過せん。釋迦老子

曹功顯の傳は宋史列傳百三十八。太尉は南宋第二主、高宗の時に此官を設く、事物紀原四、初學記十一、下を安んずるを尉といふ、武事を掌る官なり。此章は始め居士の志を講し、中間に維摩經を引き、後に邪見を擧げて居士の爲にす。師六十九の時の作なり。

の義なり、謂く、太公望、鈎に直鈎を以てして謂く、左せんと欲せば便ち左せよ、右せんと欲せば便ち右せよ、命を負ふ者は鈎に上り來るなり」と。今の意は師家は、助辨の機に乗ぜしむるを欲せず、左せんと欲せば左せよと、然らば學者之に乗じ來るなり。

第一段、自らの老いて化度を廢せざることを發す。此時は師、育玉山に住す。

至尊とは、天子を指して言ふ、是れ福全なり。意を此の段等とは、慧全を言ふ。

一日とは或る日なり。

釋迦等とは、四十二章經の文なり。威勢ありて而も之を抑

又曰く、「佛道は不思議なり、誰か能く佛を思議せんや」と。又佛、文殊師利に問うて曰く、「汝不思議三昧に入るや。」文殊曰く、「弗也、世尊、我れ即ち不思議ならば、心の能く思議する者あることを見ず、云何んぞ而も不思議三昧に入ると言はんや。」我れ初め發心して、是の定に入らんと欲す、^①如今思惟するに實に心想の而も三昧に入るなし。人の射を學ぶが如き、久しく習ふときは則ち巧なり、^②後には無心なりと雖も久習せるを以ての故に、箭發すれば皆中る。我も亦是くの如し、初め不思議三昧を學せしとき、^③心を一縁に繫けき、久しく習ふて成就するが若きは、更に心想することなけれども常に定と俱なりきと、佛と祖師と所受用の處は、無二無別なり。^④近年叢林に一種の邪禪あり、目を閉ぢ睛を藏して、^⑤背盧都地にして妄想を作すを、之れを不思議の事と謂ひ、亦之れを威音那畔、空劫已前の事と謂ひて、纔かに口を開けば便ち喚んで今時に落つと作し、亦之れを^⑥根本の上の事と謂ひ、亦之れを^⑦淨極まりて光通達すと謂ひ、悟を以て第二頭に落在すと爲し、悟を以て枝葉邊の事なりと爲す。蓋し渠、初め歩を發する時より便ち錯り了れり、亦是れ錯なることを知らずし

へて下に臨まざる難し。豪貴の人は常に五欲の境に耽ける故に道を學び難しとなり。
 ③ 第三段、道は思議を容れざることを論ず、臨濟錄に云く、「求着すれば即ち轉た遠し等」と。
 ④ 釋迦等とは華嚴經二十三、兜率備贊品。
 ⑤ 又佛等は、大寶積經百十六の文、宗鏡錄四十五。
 ⑥ 入らんと欲せば、則ち是れ思議なり。
 ⑦ 此くの如く工夫をなして三昧に入る底、是れ無修の修、無學の學なり、然るに學人認つて死語を認めて悟なしと道ふ、無事禪に墮するなり。
 ⑧ 後に等は、心を起して的に中ることを欲せざれども箭を發せば皆中る、所謂恰恰の用心の時、恰恰として無心にして用ふる是れなり。

て、悟を以て建立なりと爲す。既に自ら悟門なければ、亦悟ある者を信せず、這般底を之れを大般若を誘り佛の慧命を斷すと謂ふ。千佛出世すれども懺悔を通せじ、左右は人を驗する眼を具ふや久し。此等の輩の似き^①師子皮を披却して野干鳴を作す、知らずんばあるべからず。^②某、左右と未だ顔を承け論を接へすと雖も、此の心は已に默默として相契ふこと多年、此れより前答字極めて禮の如くならず、^③今専ら^④法空禪人を遣して代つて往いて敬を致さしむ。故に^⑤善思惟三昧に入るに暇あらず、只だ恁麼に手に信せ意に信せて、覺えず葛藤すること如許す。聊か^⑥不敏を謝するのみ。

榮侍郎に答ふ 茂實

① 心を留めて此の一段の大事因縁を究竟せんと欲すといふことを承はる。既に此の心を^②辨せんとならば、第一に急なることを要せざれ、急なるときは則ち轉た遅し。又緩なることを得ざれ、緩なるときは則ち怠墮す。調琴の法の如く緊と緩と中を得て、方に曲調を成すことを要す。但だ日用應縁の處に向つて時時に^③觀捕せよ。我が這の能く人の爲に是非曲直を決斷する底は、^④誰か恩力をか承くる。畢竟して甚麼の處よりか流出するや

① 心を不思議なる一緣境に專注するをいふ。
 ② 第四段、邪師を斥く。
 ③ 背盧都地とは、正宗贊、風穴章の古解に云く、「坐して鼻端を守るなり」と。人天眼目章に「言はさずして言ふの貌」と。普燈錄抄に云く、「釋談なり、口を開けて言はざるなり」と。
 ④ 根本の上とは、下の枝葉邊に應ず。
 ⑤ 淨極等は楞嚴經六。
 ⑥ 悟を以て等は、前に出づ。これ仰山の語を誤解するなり、謂く「悟といふは無事にして事を生ずるなり」と。
 ⑦ 師子皮等とは、身に佛衣を着し、心に外道の見解を作すをいふ。臨濟錄に云云。
 ⑧ 第五段、專使を遣はす意を叙す。
 ⑨ 專は專使にて、餘事を離へざ

と、戲捕し來り戲捕し去らば、平昔の生處の路頭は自ら熟せん。生處既に熟すれば、即ち熟處却つて生るべきなり。那箇か是れ熟處なるや、五陰六入、十二處、十八界、二十五有、無明業識にて思量し計較する心識、晝夜 熾熾として野馬の暫くも停息すること無きが如き底是なり。這の絡索、人を使ひ得て生死に流浪せしめ、人を使ひ得て、不好の事を做さしむ。這の絡索既に生るときは、則ち菩提も涅槃も真如も佛性も使ち現前すべきなり。現前するの時に當つて亦、現前の量なし。故に古德契證し得了つて、便ち道ふことを解す。①眼に應ずる時は千日の若くにして萬象、影質を逃るること能はず、耳に應ずる時は幽谷の若くにして大小の音聲足らすといふことな

- ① 法空禪人は、宗派別、普燈、續傳燈。大惠法師の下に之を載せず。
- ② 善思惟等とは卑下の辭なり、今此書を作るに善三昧に入るすとなり。
- ③ 不敬とは愚鈍の謂なり、此には失禮のいひなり。
- ④ 榮は宋史に傳なし、萬姓統譜五十四。師六十九の時の作。
- ⑤ 第一段、工夫の法を示す。
- ⑥ 此心を辨ずの辨とは、ものきはつけてととのふるを言ふ。
- ⑦ 戲捕とは把得の義、縁に應ずる處、把得し用ふるなり。我が這已下は戲捕底の様子なり。我とは榮侍郎を指すも大惠代つて言ふの詞なり。
- ⑧ 此の如く自由自在なるは誰の恩力を受くとなり。
- ⑨ 第五段、凡夫の熟處を論ず。
- ⑩ 五陰は、色、受、想、行、識なり、六入とは眼根、耳根、鼻根、舌根、身根、意根の六根の事なり、十二處とは、六根と、色、聲、香、味、觸、法の六境とを合して十二處といふ。十八界とは、六根と六境と、眼識、耳識、鼻識、舌識、身識、意識の六識を合して十八界といふ。これ色心法の分類の異なり、即ち心に迷ふことの強き人の爲に五陰を説き、色即ち物質は常住なりと迷ふことの強き人の爲に十二處を説き、色心の二法に並び迷ふことの強き人には十八界と説くなり。
- ⑪ 二十五有とは、有は因果不亡の義とて、煩惱業の因に依つて人、天等の果を招き得、果中に復た因を造り藏す、其因に依りて復た次の果を引く等にて、要するに迷界の存在を

し」と。此くの如き等の事、他に求むることを假らず、他の力を借らずして自然に應縁の處に向つて活潑潑地なり。未だ此くの如くなることを得ずんば且く這の世間の塵勞を思量する底の心を將つて思量不及の處に回在して、試みに思量して看よ、那箇か是れ思量不及の處なるや。僧、趙州に問ふ、「狗子に還つて佛性ありや也た無き

有といふ。而して二十五とは、東、弗婆提。南、閻浮提。西、衛耶尼。北、鬱單越(以上を須彌四洲といふ)。次に地獄、餓鬼、畜生(已上を四惡趣といふ)。次に四王天、忉利天、夜摩天、兜率天、化樂天、他化自在天(已上欲界の六天なり)。次に梵天(これは實は色界初禪天中の一處にて大梵天なり)。次に初禪天、二禪天、三禪天、四禪天(已上色界の四禪天なり)。次に空無邊處、識無邊處、無所有處、非想非非想處(已上無色界の四天なり)。次に無想天、五那含天(無煩、無熱、善見、善現なり)以上の二天は實は色界第四禪天の中にあるも、外道は之を誤り執して無生死の世界と思ひ、又前の梵天は外道之を認めて世界の創造者なり等と迷ふ故に、何れも迷界に

- ① 熾熾とは、閃爍の貌、生滅の絶えざるをいふ。
- ② 這の絡索とは、凡夫の熟處を指す。
- ③ 不好等は三毒に依つて然り。
- ④ 這の一等は、第三段、悟後の境界を叙す。
- ⑤ 菩提とは梵語、覺と譯す、前如の理等を照す靈覺の智慧なり。涅槃とは、圓寂、寂靜、滅度等と譯す、これ常住不變

- ⑥ 現前等は、方處の指すべき無きが故に。
- ⑦ 古德等は、高城和尚の歌なり、諸祖偈頌上、永明註心賦二。
- ⑧ 六道の神光明了なり、この道理を會得せる人は、内に塵垢なきが故に眼に應ずる作用、物として照さざるなし。
- ⑨ 迷るとは、遺餘なきをいふ。
- ⑩ 靈妙の心性、妙用を發するも亦此くの如し。
- ⑪ 未だ等、第四段、本參を授けて

や。州云く、「無」と、只だこの一字、爾に儘す甚麼の伎倆がある。請ふ
 安排して看よ、請ふ計較して看よ、思量し計較し安排し、以て頓放すべ
 き處なうして只だ肚裏悶し、心頭煩惱することを覺得せん時、正に是れ
 好底の時節なり、第八識相次で行せざらん。此くの如きことを覺得せん
 時、放却せんことを要すること莫れ、只だこの無の字の上に着いて提撕せよ、
 提撕し來り提撕し去らば、生處は自ら熟し、熟處は自ら生るべきなり。
 近年以來叢林の中に一種の邪説を唱へて宗師と爲る者あり、學者に謂つ
 て曰く、「但だ只管靜を守れ」と。守る者は是れ何物ぞ、靜なる者は是れ何
 人なることを知らず、却つて靜底は是れ基本なりと言ふ。却つて悟ある底
 を信せずして、悟底は是れ枝葉なりと謂ふ。更に僧の仰山に問うて曰
 く、「今時の人還つて悟を假るや也た無や。」仰山曰く、「悟は則ち無きに
 はあらず、爭奈せん、第二頭に落在す」といふことを引く、癡人面前に夢
 を説くことを得ず、便ち實法の會を作して悟は是れ第二頭に落つと謂ふ。
 殊に知らず、鴻山自ら學者を覺するの言あることを。直に是れ痛切な
 り、曰く、「至理を研窮して悟を以て則とせよ」と。此の語又甚麼の處

提撕せしむ。
 ①一字とは、無の一字なり。
 ②你に儘すとば、儘は盡と同じ、
 任なり。意は安排せんと欲せ
 ば、你、安排して看よ、你に
 任す、畢竟、安排することな
 得すとたり。
 ③頓放は今は置くべき處なきな
 り。
 ④煩惱とは、今は普通にいふ所
 の煩悶のことなり。
 ⑤此の如きとは、肚裏悶を指す。
 ⑥第五段、邪解を擧げて破斥す。
 ⑦此の靜は是れ眠將なり。守る
 者とは之に使はるるなり。こ
 れ眠を認めて子となす、此れ
 は眠を認めて主となすなり。
 ⑧悟は是れ覺者、枝葉とは靜
 底にて是れ基本故に。
 ⑨僧等、此の問答は、聯燈、會
 元、傳燈には載せず、禪林類
 聚五に之を載す、萬松老人の
 從錄四。

に向つてか著かん。鴻山、後人を疑誤して第二頭に落在せしめんことを要
 すべからざるなり。曹閣使も亦心を此の事に留む、其の邪師の輩に誤
 らるゝことを被らんことを恐れて、比に亦此くの如く書して切切但但とし
 て寫して與ふ。此の公は聰明も識見も、皆大いに人に過ぐる處あれば、決
 して錯つて方便の語を認めて實法の會を作すに到らじ。但だ某、未だ之れ
 と目撃することを得ざれば、私かに憂へ過ぎて計るのみ。老居士も亦
 之れと是れ道友なることを聞きて、筆に因りて覺えず葛藤す。無事相見
 せん時に試みに渠に問うて書を取りて一看せよ。方に知らん、妙喜が相
 期するとは、眼底にあらず、彼此氣義相投じ、又勢利の交に非ざることを。
 一紙を寫し了り、紙盡くれば又一紙を添ふ。更に形迹を事とするに暇あ
 らず、此の書も亦是くの如し。前書に是れ箇の中の人なるに託す。故
 に曰く、「切に老老大大にして甚の來由をか著けんといふべからず、若し
 此くの如くならば則ち好事面前に在れども定めて放過すべきなり」と。
 寫す時卒易なるに似たりと雖も、然も亦機感相投じて、亦覺えず紙上に
 書在す。公の妙喜を信得及して、便ち把りて事と做すことを荷ふてなり。

①仰山等、悟了して之を見れば、
 元來悟といふ、早く是れ功勳
 邊に落つ、然らざる時は皆是
 れ邪解なり。大品般若十九、
 不轉品に云云。
 ②編林實訓、鴻山野策文銘。
 ③至理等は、譬喩の銘の詞なり。
 ④編門警訓に亦之を載す。
 ⑤第六段、曹閣使を誡むるの事
 を引く、これ強く榮侍郎を諫
 めんが爲に、下の文の叢本と
 なす、即ち他に對して言ひ難
 き事なれば書を以て寫與す、
 曹閣使は曹功顯なり、紹興二
 十七年閣使となる。
 ⑥私には心中の煩悶を憂とい
 ふ、過計は過失計度なり、意
 は未だ顔を受けず、恐らくは
 過つて計度せん、故に豫め之
 を告知せしむ。
 ⑦老居士とは榮侍郎なり。
 ⑧筆等とは、曹閣使に與ふ書を
 いふ。

③ 日用應縁の處、便ち此箇の法門を恢張して、以て聖主の賢を求めて天下を安せんとするの意に報せば、眞に其の知る所に負かざるなり。願くは種種堪忍して始終只だ今日の如くに做し將ち去らば、佛法と世法と打して一片と作るべきなり。且耕し且く戦ふて、久久にして純熟せば、一擧にして而も之れを兩得せん。豈に腰に十萬貫を纏ふて鶴に騎りて揚州に上るに非ずや。

又

鐘鳴り漏盡くるの譏を示諭せらる。君上の爲に誠を盡し、下百姓を安んぜよ、自ら絃を聞いて音を賞する者あらん。願くは公、凡事堅忍して逆順の境に當つて、政に好し力を著くるに、所謂此の深心を將つて塵刹に奉ず、是を

- ① 妙喜已下形迹に至るまで、曹閣使に答ふる書の意なり。
- ② 眼底等は、上の目撃に應ず、目前といふが如し、意は相見不相見を論ぜざるなり、俱に箇中の人故に氣義相投するなり。氣義とは氣志義交なり。
- ③ 形迹とは、外を飾るの謂なり、即ち貴官に呈する文書の體式をいふ、意は覆藏なく誠實を述ぶるなり。
- ④ 此の書等は彼此氣相投なり。
- ⑤ 前書、第七段、榮侍郎の深信を見て發し難きを發せしむ、前書とは榮侍郎の問書を指す、託すは榮侍郎自ら委託するなり。
- ⑥ 切に已下は諫言の詞なり。意は仕官即佛法、佛法即仕官なり。來由とは、大道を修行することなりと。考ふべし。
- ⑦ 寫す等、上は諫の詞、下は上書を寫す時の事をことわる。
- ⑧ 然も、亦とは曹閣使に亦す、意は公も亦機應相投す故に此の如く言ふなりと。
- ⑨ 把るに足らずと雖も、然も把つて事をなすは則ち公の恩を荷ふなりと、荷とは感荷なり。
- ⑩ 日用等、第八段、仕官中に佛法を成すべきを示す。日用とは世法をいふ、應縁は政事に務むるなり。
- ⑪ 其とは天子を指す、意は天子その才賢を知りて擧げて仕官せしむ、而るに置仕するときは却つて天子に負くとなり。
- ⑫ 願くは種種とは、一切の事なり、年老いての仕官、想ふに煩勞なり。
- ⑬ 且耕等は、佛法を學ぶを喻ふ、又世法なり。
- ⑭ 一擧とは、凡そ事を成すを擧といふ、戰國策三、史記七十。兩得とは、佛法、世法自在無碍なるなり。

則ち名けて國恩を報すとす。平昔、學道は只だ逆順界中に於て受用せんことを要す。

逆順現前するときに苦惱を生ぜば、大いに似たり、平昔、曾て箇中に向つて用心せざるに。祖師曰く、「境縁には好醜なし、好醜は心より起る、心若し強ひて名けずんば、妄情何れより起らん、妄情既に起らずんば、眞心、徧知に任す」と。請ふ逆順の境中に於て常に是の觀を作さば、久々にして自ら苦惱を生ぜじ、苦惱既に生ぜずんば、則ち以て魔王を驅つて護法善神と作すべし。此れより前老大大として甚の來由をか著けんといふの説、言猶ほ耳に在り豈に之れを忘れんや。佛性の義を識らんと欲せば、當に時節因縁を觀すべし。以るに居士、前十餘載、閑なりしは、自ら閑

- ① 豈云々は前に出づ。意は佛法世法も萬事萬足なり。上るとは、一本には下に作る。
- ② 榮侍郎に答ふる第二書、大意は官途に在つて逆順閑忘一如の境界を鍛錬せんとを示す。
- ③ 第一段、老大を以て退屈すべからざることを勸む。鐘鳴り漏盡くは、魏志列傳二十六、田豫答へて曰く、年七十を過ぎて以て位に居るは、譬へば鐘鳴り漏盡きて而も夜行して休めざるが如しと、遂に疾と稱して大中大夫を拜し、年八十二歳にして薨す、即ち天曉けて猶ほ夜行するが如し。譏は人の老年にして致さずと譏るなり。
- ④ 自ら等、意は譏る者あれば却つて之を賞する者あり。列子に云く、伯牙善く琴を鼓す云云。
- ⑤ 政には、世法と佛法と一處に於て、政に好し力を著くるに。
- ⑥ 第二段、逆順の境を轉すべきを勸む。
- ⑦ 逆の上に「而るに」を加へ見よ。
- ⑧ 箇中とは、佛法を指す。
- ⑨ 祖師は四祖道信禪師。
- ⑩ 境即縁縁なり、六塵の縁影なり。好醜とは、逆順なり、傳燈四、牛頭融章。
- ⑪ 心とは妄心なり、分別なり、強ひて名くとは、逆順好醜なり。
- ⑫ 一心法界の故に。
- ⑬ 眞心徧知は、前の眼に應ずる時千日の如きの類に應ず、蘇摩九。意は佛の十號中の徧知の義に合す、故に引く。
- ⑭ 魔王とは仕官して政を乘りて而して置仕せざることを譏る者あらば、但だ此くの如く工夫せよ、塵却つて善神と作さんと。

の時節あり、今日仕權手に在り、便ち忙底の時節あるなり。當に念ふべし、閑の時は是れ誰か閑なるや。忙の時は是れ誰か忙なるや。須らく信すべし、忙の時に却つて閑の時の道理あり、閑の時却つて忙の時の道理あることを。政に忙中に在りて當に、主上の公を起すの意を體して頃刻も暫忘るべからざるべし。自ら警し自ら察せよ、何を以てか之れを報いんと。若し常に是の念を作さば、則ち鑊湯鐵炭、刀山劍樹の上にも亦須らく、向前することを著べし。況んや目前些少の逆順の境界をや。公と此の道相契ふを以ての故に、情を留めずして、淨盡し吐露す。

黃門司に答ふ 節夫

書并に許多の葛藤を收む、意はざりき、便

- ③ 第三段、閑と忙と一如なるを示す。
- ④ 言等は、左傳杜預注八、文公七年の語なり。
- ⑤ 仕權は、仕官權柄なり。
- ⑥ 時時刻刻に佛性現するなり。
- ⑦ 道理とは佛性をいふなり、此の如く之を推忙の時却つて閑の道理あり、佛性は閑と忙との中に於て異なく別なし。
- ⑧ 第四段、忠を忘れざることな誠勸す。
- ⑨ 主上とは事物紀原一、冠註に之を引けり。
- ⑩ 體とは天子の心を以て、我が心となすこと。
- ⑪ 何を以て等とは、自ら省察の様子なり。
- ⑫ 向前は對向違前なり。
- ⑬ 黃門司は事物紀原五に云云、或は云く、黃姓にして門司は官名なりと。節夫は、妙德居士と號す、大惠の嗣なり。會
- ⑭ 元二十、居士分燈錄下。宋史には傳なし、冠註に引けり。此書は、師六十九歳の時の作なり。
- ⑮ 第一段、拈弄諸當なることを贊す。許多の葛藤とは、頌古拈提の類なり。
- ⑯ 但等、第二段、引證。
- ⑰ 本分とは、此にては君に來じ職を掌るをいふ、これ官人の本分なり。然るに自らの本分に依らずして拈弄學甚だ無用なり。若し既に但此の如くなれば、他の譏るに一任す。
- ⑱ 他家とは大惠自らを指すなり、通人とは理に通達せる人なり。傳燈二十九、諸公の十二時の頌中の語なり。
- ⑲ 是れ曾ては、第三段、悟は情解卜度を容れざるを論ず。
- ⑳ 響を聽くと、推量卜度をいふ。

ち此くの如く拈弄することを解せんとは。直に是れ弄し得來つて活潑潑地なり、眞に是れ自ら證し自ら得するものなり、喜ぶべし喜ぶべし。但だ只だ此くの如くならば從教人の這の官人、本分に依らずして亂說亂道すと道ふことを、他家に自ら通人の愛する有らん。是れ曾て證し曾て悟る者は方に知るを除く。若し是れ響を聽くの流は他の龜を鑽り瓦を打して、更に如來禪と祖師禪とを批判し得て、好し儘に妙喜が拄杖を喫し得るに一任す。且く道へ是れ伊を賞するか伊を罰するか、諸方の更に疑ふこと三十年するに一任す。

孫知縣に答ふ

修する所の金剛經を以て相示さるることを蒙る、幸に隨喜一徧することを得たり。近世の士大夫、肯て左右の心を内典に留むるが如くなる者は實に希有なりと爲す。意趣を得ずんば則ち是くの如く信得及すること能はじ、看經の眼を具せずんば、則ち經中深妙の義を窺ひ測ること能はず、眞に火中の蓮なり、詳かに味ふこと之れを久しうして疑無きこと能はざるのみ。左右諸の聖師の翻譯、眞を失して而も本眞を汨亂し、文句増減し

- ① 龜を鑽りとは莊子八外物篇にあり、瓦を打すとは、潛確類書八十二、取占に瓦を龜に代ふと。此等の輩は計較卜度するに一任す。
- ② 第四段、再び拈弄葛藤を勸絶す。意は葛藤を拈弄するは猶ほ可なり、若し更に批判し得て恰好なるも飽まで大惠の拄杖を喫するに任すと。好しとは恰好の謂なり、儘は任なり、喫は黃門司に乘る、恣に多く喫するをいふ。
- ③ 伊とは黃門司を指す。
- ④ 孫は宋史に傳なし。此書は、師七十歳の時の作。大意は小知小見もて譯經の諸師を批判するを戒む。
- ⑤ 第一段、讚歎して縱奪す、修とは金剛經の註を修するなり。
- ⑥ 上の希有となすの語に應ず。維摩經、佛道品。

て佛意に違背すと誣る。又云く、「始め持誦せしより、即ち其の非を悟り定本を求めて、^① 舛差を是正せんことを欲すれども、而も^② 習僞已に久しうして、^③ 雷同一律せり。京師の藏本を得るに暨びて始めて據依するところあり。復た^④ 天親、無著の論頌を考釋するに、其の義^⑤ 臆合す。遂に泮然として疑なしといふ。又^⑥ 長水、孤山の二師は皆句に依りて義に違ふといふことを以てす。^⑦ 識らず左右、敢て是くの如く批判せば、則ち定めて嘗て^⑧ 六朝に譯する所の梵本を見、諸師の翻譯の錯謬を盡し得て、方に始めて泮然として疑なけん。^⑨ 既に梵本なし、便ち臆見を以て聖意を刊削せば、則ち且^⑩ 未だ因を招き果を帯びて、聖教を毀謗して無間獄に墮せんことを論せざるなり。恐らくは識者之れを見て却つ

① 第二段、總じて破す、下に三節あり、初に孫知經の語を擧ぐ。
② 舛は差なり、錯亂なり、舛差は過失なり、錯なり。
③ 習僞とは久しく僞謬を習ふ。
④ 雷同とは、禮記曲禮上の註に云く、「雷の聲を發する、物として同時に應ぜざる者なし云云」。一律とは、音曲の亂同なるに比す。
⑤ 京師とは、公羊傳に云く、「天子の居なり、京は大なり、師は衆なり、天子の居は必ず衆大の辭を以て之を言ふ」。
⑥ 天親、無著は名義集一、西域記五を引く、會元二に出づ。無著論は隋の達磨笈多の譯する所、十八段の疑を立つ。天親論は元魏の菩提流支の譯する所、二十七の疑を立つ。
⑦ 臆合とは事相同じき者ないふ。
⑧ 長水は諱は子璿、普燈三、通載十八、佛祖統紀三十等に出づ。孤山は智圓法師なり、佛祖統紀十に出づ、人天寶鑑に出づ。
⑨ 識等、第二節、假に詞を設けて暫く許す。
⑩ 六朝とは、晉、宋、齊、梁、魏、隋を謂ふにあらず、六代の謂にして、一に後秦の羅什、二に後魏の菩提流支、三に陳朝の眞諦、四に隋の笈多、五に唐初の玄奘、六に大周の義淨なり。今傳ふる所は羅什三藏、弘始四年に長安草堂寺にて譯する所のものなり。
⑪ 既に等、第三節、正しく實を論じて大集破す。
⑫ 未だ等は、謗法の因、墮獄の果なり。
⑬ 遺等は、法華經普門品に出づ。
⑭ 古人等、第三段、斥破する所の意を叙す。

て左右の諸師の過を檢點するが如くにして、^① 還つて本人に著すること有らんことを。古人言へることあり、「交淺うして言深き者は、尤を招ぐの道なり」と。某、左右とは、素より平生に味し、左右、此の經を以て印證を求めて萬世に流布して、衆生界中に於て佛種子を種えんと欲す。此れは是れ第一等の好事なり。而も又某が^② 箇の中の人たるを以て、箇の中の消息を以てして^③ 形器の外に相期す、故に敢て上稟せずんばあらず。昔、清涼國師、華嚴の疏を造る時に、譯師の訛舛を正さんと欲すれども、而も梵本を得ざれば、但だ之れを經の尾に書するのみ。^④ 佛不思議法品の中に所謂一切の佛に無邊際むへんざいの身あり、色相清淨しきさうしやうじやうにして普く諸趣しよすいに入れども而も染着せんぢやくなしといふが如き、清涼

① 素より等とは、未だ相見せざれば其識見の程度を知らずとの意。
② 箇の中の人とは、佛法中の人の意なり。
③ 形器等とは、形骸を忘れて會見を期せんとなり、即ち僧、俗の形を忘れて印證を求む、實に道を以て交はると謂つべし。
④ 第四段、古人の撰りに改めざるを引く。清涼の傳は宋僧傳五、編年通論十八、佛祖統紀四十二等に出づ。清涼は澄觀、字は大休、唐の玄宗開元二十六年(日本聖武天皇天平十年)に生る、幼にして出家し、沙彌の時に已に九經十四論を講ず、其非凡推して知るべし、後に律、三論、涅槃、天台、禪宗等の奥義を究め、華嚴は賢首門下の異義者たる法説に就いて修習せしも、遠く賢首の正統を傳へて華嚴の行門を大成して功あり。貞元十一年般若三藏、勅を奉じて四十華嚴を譯するや、圓照等と共に潤文證義の任に當る、玄宗の開成四年に寂す、壽百二歳、身の長け九尺四寸なりき、傳法の弟子一百餘人、著書數百卷あり。
⑤ 華嚴の疏とは、八十華嚴の疏にして、之れ宗義復別の爲に撰述せしものにして、其年代は、宋高僧傳に據れば、唐第十代德宗の興元元年正月に筆を下し貞元三年十二月に其功を畢へ、二十卷を成す、今之を大疏といふ、其後弟子の爲に再び筆を執り、大疏を解釋す、演義鈔四十卷是れなり、今はその大疏と演義鈔を經文に會し、更に科文を加へて一百卷となりて盛に世に流布せり。

但だ云ふ、「佛不思議法品の上巻第三葉の第十行の一切諸佛とは舊諸の字を脱す」と、其の餘の經本の脱落も皆之れを經の尾に注す。清凉も亦聖師なり、添入し及び減削すること能はざるには非ず、止だ敢て之れを經の尾に書することは法を識る者は懼るればなり。又經中に大瑠璃寶といふあり、清凉曰く、「恐らくは是れ吠瑠璃ならん、舊本錯りて寫す」といふ亦敢て改めず、亦只だ此くの如く之を經の尾に注するのみ。六朝の翻譯の諸師は皆淺識の士に非ず、翻譯の場には譯語の者あり、譯義の者あり、潤文の者あり、梵語を證する者あり、正義の者あり、唐梵相校する者あり。而るを左右尙は以て錯つて聖意を譯すと爲す、左右既に梵本を得ず、便ち安りに刊削を加へ、却つ

佛不等は、八十華嚴經の品名。
但だ云等の文は今の本には削除す、惜むべし。
十行、古は十七字を以て一行とすと、孤山の閑居編に見ゆ。
清凉等とは、大惠の批評なり。
經中とは、華嚴經六十六、入法界品無厭足主章。
吠瑠璃は具には吠瑠璃耶、略して瑠璃といふ、此に不遠山、又は遠山寶と名く、寶珠の名なり、謂く、西域に山あり、波羅奈城を去ること遠からず、此寶は彼れより産出す、故に以て名く。其寶は青色にして瑩徹し光あり、凡ての物之れに近づけば皆同一色となる、玄應音義二十三、等に出づ。
第五段、翻譯眞を失するてふ語を斥す。以下に諸役を列ぬるは、證據の正しきことを言はんが爲なり。

譯語は梵字を轉じて漢字となす、譯義は梵語の表はす若しくは含蓄せる義理を漢語に顯はす役なり。潤文とは、文章を潤色す、即ち語を譯し義を移したる後に、字句を添削増減して文章を潤飾す、梵語を其儘に譯すれば彼岸となる故に、之を潤して到彼岸となるの類なりと。
梵語を證すとは、梵漢を對照して、文字を加減して譯語に誤なきことを證する役なり。證義は義を譯して後に再び仔細に其義を正すなり。
唐本と梵本とを相校合するなり。
此くの如きは胡亂改作なり。
第六段、長水を離するを斥す。
其とは長水を指す。長水の干涸なり、趙宋の世に出て、華嚴を興せし一人なり、仁宗の天聖八年に寂す。講人とは、

後世の人の誦信せんことを要するは、亦難からずや。長水は句に依りて義に違ふといふことを論ずるが如き、梵本の證なくんば如何しか便ち決定して、其れを以て非なりと爲んや。此の公は是れ講人なりと雖も他の講人と同じからず。嘗て瑠瑯の廣照禪師に參す、因に瑠瑯に首楞嚴の中の富樓那、佛に問ふ、「清淨本然ならば云何が忽ちに山河大地を生ずるや」といふ義を請益す、瑠瑯遂に聲を抗げて云く、「清淨本然云何が忽ちに山河大地を生ず」と、長水言下に於て大悟す。後に方に襟を披いて自ら座主と稱す。蓋し座主は多くは是れ行を尋ね墨を數ふ。左右の所謂句に依つて義に依らざるものなり。長水は見識なきに非ず、亦行を尋ね墨を數ふる者に非ず。具足相を以て

經論を講解する人の謂なり。
廣照は、廣燈十八、續燈四、會元十二等に出づ。
首楞嚴とは、大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經の略稱なり、唐の般若密帝の譯する所、十卷あり、今の文は四卷に出づ。
富樓那是略稱、具さには富樓那彌多羅尼子(ぶらゐるなまーいとらーやにーぶとら)といふ、滿慈子、滿願子等と譯す、此人は家兄に疎せられて商人となる、而も能く佛に供養し、精舍を建立し復たよく慈善行を爲す、後に釋尊に歸依して十大弟子の隨一たり、其の説法の巧妙なること衆中第一位にありしといふ。
請益とは、法を問ふを謂ふ、他に辭せり。
抗は激抗なり、これ機關なり。
襟を披くとは、披は開くにて、

經奥を遺す無きを謂ふ。文選十三、宋玉賦、圓情心要、中峰錄五に出づ。
座主とは禪家より數家を稱する語なり、釋氏要覽上に出づ。もと學識高き僧を名けしが、本朝にて一の僧官となりし。多くは等とは、隋の道生、唐の義方等の名相に帶るを謂する故に多といふ。行を等は傳燈二十九、寶誌和尙の大乗讚第九首に云く、「口内に經を誦すること千卷、體上に經を問ふに識らず、佛法の圓通を解せず、徒らに勞して行を尋れ、墨を數ふ」と、以て解すべし。
見識とは、品字箋に曰く、日に見る所あり、而るに心に分るあるをいふと。
具足相等とは、第七段、孫知縣の異解を破す、下三節あり、初に大意を破す、此は但だ文字を増減するを謂す、佛意に

せざるが故に、阿耨菩提を得たまふと、經文の大段分明なり。此の文至淺至近なり、自らは是れ左右奇を求むること太だ過ぎて、異解を立てて人の己に從はんことを求めんと要するのみ。

① 左右、無著の論を引いて云く、「法身を以て如来を見たてまつるべし、相具足を以てするに非ざるが故にと。若し爾らば如来は相具足を以て見たてまつるべからずと雖も、相具足を因と爲して阿耨菩提を得べし」と、此の著を離れしめんが爲の故に。經に言く、「須菩提よ意に於て云何ん、如来は相成就を以て阿耨菩提を得たまふべきや、須菩提よ是の念を作すこと莫れ」といふ等とは、此の義は、相具足の體は菩提に非ず、亦相具足を以て因となすにあらざることを明す。相は是れ色の自性なるを以ての故に

違するが故に破すると謂ふに
あらず。但だ大段分明といふ
て其義を責めず若し佛意を害
せば、豈にこれに止めんや。
畢竟、羅什所譯の經文、無著
の論文等各其理あり、猥りに
文字を増減すること莫れとな
り。

② 阿耨菩提は、阿耨多羅三藐三
菩提の略なり、此に無上正等
覺、或は無上正徧智と譯す。
これ佛陀の智徳を稱する一名
號にして、佛は絶待智者にし
て、其の智以上の大なるもの
無きが故に、無上といひ、萬
法の一々了悟せざるなきが
故に、正徧智といふ。具足相
とは、佛の具足したまふ三十
二相をいふ、通じては清淨な
る佛境界をも攝む。今の文意
は蓋し長水は、如来は相好な
具足する故に菩提を得たまひ
しと、相具具することゝを認

識せざるが故に得たまひしと
かの有無見を離れて、正直に
如来を見たてまつつて居ると
なり。

③ 此の文等は、大惠の批判なり。
④ 左右無等とは、第二節、錯つ
て無著論を解することゝを破
す、此論は北魏本は三卷、麗
本は二卷なり、是れ經文を挾
會せざるが故なり。

⑤ 法身等とは、佛の内證なる法
身の理を通じて如来を見よと
なり、凡夫は諸法を有なりと
認むる故に佛に對しても、但
だ佛の外相なる三十二相を見
て眞の佛を見たりと爲す、故
に今之を非とするなり。

⑥ 相具足、色相、音聲は是れ外
塵なり、之を以て佛の覺體を
見るべからざるが故なり。無
著論の偈に曰く、「法を以て佛
を見るべし、導師(佛)は法を
身となす」と、これ分別を離れ

といふ。此の論も大段分明なり。自らは是れ左
右錯りて見、錯りて解するのみ。色は是れ相
の緣起、相は是れ法界の緣起なり。梁の昭明
太子、是の念を作す莫れ、如来は具足相を以て
せざるが故に、阿耨菩提を得」と謂へることを、
三十二分の中に此の分を以て無斷無滅分とな
すは、須菩提の具足相を以てせずといはば、則
ち緣起滅せんといふことを恐れてなり。蓋し須
菩提は初め母胎に在りて即ち空寂を知り、多く
は緣起の相に住せざればなり。後に功德施菩
薩の論の末後を引けり。若し相成就是れ眞
の實有ならば、此の相滅する時即ち名けて斷と
爲さん、何を以ての故に、生を以ての故に斷あ
ればなり。又人の會せざらんことを怕れて、
又云く、「何を以ての故に一切法は是れ無生の

て唯だ自ら證知すべきを説き
しなり。

② 若し等は凡夫第二の疑なり、
爾らば眞の如来は云云と。

③ 此の著とは、相具足を因と爲
すを指す。

④ 此の義とは、前上の法身を以
て如来を見るの文を解釋す、
體とは相の體なり、此は差別
門に約するが故に相の體と菩
提の覺性と別となす、若し圓
融門より云はば無差別なり。

⑤ 此論等、理を以て推すに、論
は相は色の自性なりと明し
て、別に相を拂除して如来の
覺體を得といふにあらず、而
るに孫知縣は以て相を拂ふと
なし、誤つて論は相と覺體と
は別なりとなすと云へりとの
意なり。これ明昭太子の説を
引くの本とす。

⑥ 色は等、色とは凡夫所見の色
法をいふ。相の緣起とは事法

界なり、法界とは理法界なり、
(實は理事と事事とを含む)謂
く、法性の理が活動せるを現
象差別の事法界といふ、故に
事の外に理なく理の外に事な
く、理事本と圓融無碍なり、
故に色は是れ等といふ。緣起
とは、隨緣生起の意なり。

⑦ 梁書八、列傳二に云く、昭明
太子統字は德施、高祖の長子
なり云云と、著す所の書、文
集二十卷、文選三十卷等多し。
⑧ 金剛般若經の内容三十二分に
章段を分てり、其中此の第二
十七分をとるなり。比功德施
論に、菩薩は法の斷するを見
ること無しと云へり、昭明は
此の文に依つて無斷と云ひし
なり。

⑨ 須の上「佛」を加へて見よ。
⑩ 後に「引けり」とは、孫知縣の
書中の後方に引用せるをい
ふ。具には金剛般若波羅蜜經

性なり、所以に斷常の二邊を遠離す、二邊を遠離するは是れ法界の相なりと。性と言ふことは、謂く、法界は是れ性の緣起なるが故なり、相は是れ法界の緣起なるが故に性と説かずして相と言ふ。梁の昭明の所謂無斷無滅といふは是れなり。此の段も更に分明なれども、又是れ左右、奇を求むること太だ過ぎて強ひて節目を生ずるのみ。若し金剛經以て刊削すべくんば、則ち一大藏教凡そ看ることある者は、各々臆解に随つて都て刊削すべきなり。韓退之が論語の中の畫の字を指して畫の字と爲し、舊本差錯すと謂ふが如き、退之が見識を以てせば便ち改めたるべし。而るに只だ此くの如く論じて書中に在くとは何ぞや、亦是れ法を識る者は懼るゝのみ。圭峯の密禪師、

破執者不壞假名論といふ、唐の地婆訶羅の譯、二卷あり。相成就とは、法界の相成就なり。眞の實有とは、凡夫の實有に同じて言ふ、法界の徳相は斷不斷を離る、若し凡夫所執の實有の如きを、相成就といはば、此相滅する時は名けて斷となさん、然れども法界緣起の法は本と生滅を離る。生あるが故に、又滅あるなり。又人のより何を以ての故にまでは論文にあらず、論を發揮せんが爲に大惠之を加ふるなり。

て、一と一切と互に鑄融無碍、もと思慮の境にあらず、何の生滅と説き斷常と説かんや、是れ法界の眞相なり。性と説く等とは大惠が論の法界相の相の字を通譯するなり、性とは法性の理なり、相とは法界緣起の事相即ち宇宙萬有をいふ、法性の全體が隨緣生起して萬有となり、萬有の全體が法性にして、理事無碍なれば、性といふも相といふも俱に得たり、されど性と説かば、人の事相の外に別に理性ありと誤認せんことを恐れて相といひしなりと。既に一切法は事理無碍にして、生なく滅もなければ昭明が無斷無滅といひし所以なり。強ひて等、孫知縣の書なき故に節目を生ずるの意を知る能はざるも、理を以て之を推すに孫が功德論を解して、相

圓覺經の疏鈔を造る、密は圓覺に於て證悟の處ありて、方に敢て筆を下す。圓覺經の中の一徹衆生皆圓覺を證すといふを以て、圭峯、證を改めて具と爲し、譯者の訛なりと謂へり。而も梵本を見ざれば亦只だ此くの如くに論じて、疏中に在いて敢て便ち經を改め正さず。後來湧潭の眞淨和尚、皆證論を撰す、論の内に痛く圭峯を罵りて、之れを破凡夫臊臭の漢と謂ふ。若し一切衆生皆圓覺を具して而して證せずんば、畜生は永く畜生と作り、餓鬼は永く餓鬼と作らん。盡十方世界都盧て是れ箇の無孔の鐵鎚にして、更に一人の眞を發して元に歸する無し、凡夫も亦解脱を求むることを須ひざるべし。何を以ての故に、一切の衆生は皆已に圓覺を具して亦證を求むることを須ひざるが故

を拂ふの義となす。然るに此論は相を拂除せず、これ孫の謬なり。第八段、重ねて古人を引いて、猥りに經文を削るべからざることを論ず。臆解は臆斷の義解なり。韓退之、唐書列傳第一に云く、韓愈字は退之、荊州南陽の人なり、卒して禮部尙書を贈られ、説して文と曰ふ云云。論語等とは、公治長篇に出づ。此事は論語筆海に論ぜり。畫の字は誤、一に畫に作る。畫の字は誤、一に畫に作るを正とす。書中とは論語筆海を指す。圓覺經第四、彌勒章。疏に云く、譯經の訛なり、應に諸の衆生皆圓覺を有りと證すと云ふべしと。これ圭峯は決然として之を改むるにあら

す、文字の足らざるをいふのみ、然るに今の文に直截に證を改め等といふ、而して復た有を具とするは具有と熟して其義同じきが故のみ。湧潭の名は諸傳に出づるも未だ其所在を詳にせず、按ずるに石門山の谿の名が、傳燈に洪州湧潭といへり、然らば此は南昌府にあり、江西名勝志一、眞淨文禪師は僧寶傳二十三に出づ、又續燈十三。皆證論は今流傳せず。痛く等は、僧寶傳の眞淨傳に出づ、これ舒王、即ち王荊公の間に答へしなり。破等は、雲門錄中に云く、此れは方言なりと、何孟春、餘冬序錄四十八に雲漢志を引いて云く、醜惡、之を醜類と謂ふと、破の音は醜なり、然らば此れは醜類醜類のいひなり、凡夫とは生死海に迷惑流

に。左右、京師の藏經本を以て是と爲して、遂に京本を以て據となす。京師の藏本の若きは外州府より納め入る。徑山の兩藏經の如きも、皆是れ朝廷全盛の時に賜はり到らしむ。亦是れ外州府の經生の寫す所なり。萬一錯あるとも又卻つて如何んが改め正さんや。左右若し人我無くんば、定ず妙喜が言を以て至誠なりとなして、必ず古今の一大錯の上に泥在せざれ。若し己見を執して是となして、決して改め削りて一切の人の唾罵することを要せんと欲せば、版に刊りて印行するに一任す、妙喜も亦只だ隨喜讚歎することを得んのみ。公、既に得々として人をして經を以て來りて印可を求めしむ、相識にあらすと雖も、法を以て親となすが故に、覺えず切々但々として

轉するものを凡夫といふ、凡は庸なり、輕なり、輕賤の稱なり。塵は大家の音臭きなり。都盧は遊仙窟の註に云く、「大空の義」と、即ち全體の義なり、放光般若七に出づ。
 ④ 無孔の鐵鏈とは、用ひる處なきをいふ。
 ⑤ 一人等とは、楞嚴經九。
 ⑥ 第九段、孫知縣の但だ京師の藏本に據るを云ふ。
 ⑦ 外州府とは京師の外を指していふ。或は高麗、印度などを指すは鑿說なり。
 ⑧ 兩藏經とは、叢林東西の兩藏經なり。百丈清規下の知識に云ふ。
 ⑨ 全盛とは唐詩紀二十四に。
 ⑩ 經生とは、本邦に云ふ、筆耕の類なり。品字箋に云く、「生とは人の如し、俗に老人を老生、壯丁を壯生と言ふが如し」。元史列傳四十七に、「又唯

だ佛經を寫す、之を書生と謂ふし。
 ⑪ 第十段、他の取捨に任して許縱す、人我とは、實に人間なるものがあると認め、隨つて自己、おれが、心得て居るを人執とも我執とも、或は人我見などといふ、即ち五蘊が假りに和合して成れる人身の上常に主宰の我なる者の實在せるが如くに思はば、自他を區別するをいふ。
 ⑫ 古今とは、古今の人をいふ、錯はやすりなり、塵なり、厲石なり。泥は滯なり。增韵に云く、執して通ぜざるなり。
 ⑬ 版に刊るは夢溪筆談十八、事物紀原七、揮塵餘話四。印行とは、普通には活字印行をいふ、此は板に鐫るをいふ。
 ⑭ 只だ等は、世間底の欣慕稱美の語をなし去るの意。
 ⑮ 得得は禪月詩集二十。

相觸忤す、公の至誠を見て所以に更に更に情を留めず。左右決して教乘を窮めて奥義に造らんと欲せば、當に一りの名行の講師を尋ねて一心一意に之れに參詳して、徹頭徹尾ならしめて、一等に是れ心を教綱に留むべし。若し無常迅速生死事大に己事未だ明めざれば、當に一心一意に一の自分の作家の能く人の生死の窠窟を破する者を尋ねて、伊が與に死工夫を著けて厮崖むべし。忽然として漆桶を打破せば、便ち是れ徹頭の處ならん。若し只だ是れ談柄を資けて、我れ博く群書を極めて通達せずといふこと無く、禪も我れ也た會せり、教も我れ也た會せり、又能く前輩の諸の譯主講師の不到の處を検點し得たりと道ふて、我能我解を逞しうせんと要せば、則ち三教の聖人都在檢點す

① 相の字の上に「我れ元」を加へ見よ。
 ② 觸忤は碧巖四に出づ。忤は逆ふなり、戻るなり。
 ③ 第十一一段、一轉して生死事大を決せんとを勸勵す。
 ④ 名行とは、名聲人に勝れ、行業の正しき師の意。梁僧傳の序。講師とは經論を講じ、學徒を提擲するをいふ。華嚴玄談一。
 ⑤ 教綱は教相の細目は且く措いて教門の大綱要旨に着眼せんことを教ふるなり。碧巖七八則の評に云ふ。
 ⑥ 自分の作家とは、自己の本分を體得し法に自在を得て爲人度生する宗匠をいふ、作家とは作者の家の謂にして、衲僧家といふが如し。
 ⑦ 生死の窠窟とは、三界二十五有の迷界をいふ。
 ⑧ 死とは、痛切の辭なり、即ち

死は盡なり窮なり、身命を斷して努力工夫するをいふ。
 ⑨ 漆桶は前に出づ。
 ⑩ 第十二段、警策して結す。從容たる大篇此に到つて活機を以て活弄するなり。談柄は、晉書列傳十三、王衍傳に出づ。禪等とは、儒家の義は言ふに及ばず、禪も云ふなり。
 ⑪ 三教は、道の老子と儒の孔子と釋教となり。
 ⑫ 人の云云とは、上の印可を求むの語に應ず、而して其自ら言ふ所の辭を結歸す。
 ⑬ 放行とは、此は世間に流布すといふの義なり。
 ⑭ 張の傳は宋史列傳百四十八に出づ、三十八歳にして卒せり。萬姓統譜三十九。此書は師七十一歳の時の作。
 ⑮ 第一段、入道の用心を示す。
 ⑯ 方寸をして虛豁豁地とは、胃中に一物なく、知解情慮を絶

べし。亦必ずしも更に人の印可を求めて、然る後に放行せし、如何ん如何ん。

張舍人狀元に答ふ 安國

左右、決して此の事を究竟せんと欲せば、但だ常に方寸をして虚豁豁地ならしめて、物來らば即ち應せよ、人の射を學んで久々にして的中が如くならん。見すや達磨、二祖に謂つて曰く、「汝但だ外諸縁を息め内心喘ぐこと無く、心牆壁の如くにして以て道に入るべし」といふことを、如今の人纔かに此の説を聞けば、便ち差排して頑然無知の處に向つて硬く自ら退捺して、心牆壁の如くなることを得去らんと要す。祖師の所謂「錯り認めは何ぞ曾て方便を解せん」といふ者なり。巖頭云く、「纔かに恁麼なれば便ち不恁麼なり、是句も亦刻り

自己の靈光常に顯見すべし」と。錯り認むとは不見不知の處を認むるなり。

⑦ 纔かに等とは、今之を引き合に出すの意は、頑然無知の處に向つて心を牆壁の如くならしめんと欲す、これ此の恁麼の處なり。

⑧ 咄地等の語は前に出づ。これ大悟をいふ。此に因つて之を観るに、上に所謂是の句も亦刻る等は、是れ猶ほ方便にして未悟の時なり、されど既に言語の爲に轉ぜられず、況んや大悟の境界に到らんをや。

⑨ 月を見る等は、傳燈三十、丹霞の瓶珠吟の語なり、指と程とは並に方便を用ひず、見道の後は入道の方便を用ひず、然らば張舍人が此位に到るといふにあらず、但だ公、此くの如くに看去れとなり。

① 達磨等とは前に出づ。内心喘ぐとは疾息なり、是れ心の起滅するを、氣の出入する喘息の切なるに喩ふ。
② 心牆壁とは一物にも倚らず、虚豁豁地なるをいふ。
③ 頑然とは痴なり、鈍なり。即ち謬つて方便の語を解して、強ひて心を退捺し、頑然無知の處を以て虚豁豁地となさんとす。
④ 祖師とは六祖大師なり、六祖權經、傳燈五、會元二。六祖勞出の信州知常禪師に示す六祖の偈に云く、「一法を見ざれば鷲のを見を存す、大は浮雲の日月を遮るに似たり、一法を知らざれば空知を守る、遂に大虚に閃電を生ずるが如し、此の知見警然として興り、錯つて認めば何ぞ曾て方便を解せん、汝當に一念自ら非を知り、

非句も亦刻る」と。這箇便ち是れ外諸縁を息め、内心喘ぐこと無き底の様なり。縦ひ未だ咄地に折し曝地に破することを得ずとも、亦語言に轉せらるゝことを被らじ。月を見て指を観ることを休めよ、家に歸つて程を問ふことを罷めよ。情識未だ破せずんば則ち心火熾熾地なり、正當恁麼の時但だ只だ所疑底の語頭を以て提撕せよ。僧、趙州に問ふ、「狗子に還つて佛性ありや也た無きや。州云く、「無し」といふが如き、只管提撕し舉覺せよ。左來も也た不是、右來も也た不是なり。又心を將つて悟を等つことを得ざれ、又舉起の處に向つて承當することを得ざれ、又玄妙の領畧を作すことを得ざれ、又有無の商量を作すことを得ざれ、又眞無の無の卜度を作すことを得ざれ、又無事甲裏に坐在することを得ざれ、又擊石火閃電光の處に向つて會することを得ざれ。直に心を用ふる所なく、心の之く所無きことを得ん時、空に落ちんことを怕るゝこと莫れ、這裏卻つて是れ好處なり。蕩然として老鼠、牛角に入つて便ち倒斷することをせん。此の事は難に非ず易に非ず、是れ夙に曾て般若の種智を種る得ること深うして、曾て無始曠大劫より來に於て眞の善知識に承事して、正知

① 情識、第二段、本參を授けて提撕せしむ。情の上に「然れども」を加へ見よ。
② 心火等とは、凡夫の緣慮の心は念念生滅する故に智度論に蛇の舌に喩へり。
③ 左來右來して計較分別する莫れとの意。
④ 又玄妙は、意は若し深妙幽玄の解を作さば、便ち是れ鬼家の活計なり、此事元來青天白日の如きが故に。
⑤ 又有無は、趙州の無字の語をいふ。
⑥ 眞無等は、別に眞無なきが故に。
⑦ 無事甲裏とは前に出づ。
⑧ 擊石云々は頓機の處に無の字をみよ。
⑨ 老鼠は、俗語なり、前に出づ。
⑩ 此の事、第三段、得力の難易を論ず。
⑪ 妄識とは、第八識を指すと。

正見を熏習し得、靈識の中に在りて、境に觸れ縁に遇ふて、現行の處に於て、築著し猛著して、萬人叢裏に在りて自家の父母を認得するが如くに相似たるを除く。恁麼の時に當つて、人に問ふことを著され、自然に求覓する底の心馳散せず。雲門云く、「説く時は即ち有、説かざる時は便ち無なるべからず、商量する時は便ち有、商量せざる時は便ち無なるべからず。」又自ら提起して云く、「且く道へ不商量の時、是れ箇の甚麼ぞ」と。又人の會せざらんことを怕れて又自ら云く、「更に是れ甚麼ぞ」と。

① 近年以來禪に多途あり、或は一問一答して末後に一句を多くするを以て禪となす者あり。或は古人入道の因縁を以て頭を聚めて、商確して云く、「這裏は是れ虚なり、那裏は是れ

- ① 現行とは、顯現行起にて、今は現成受用なり。
- ② 萬人等とは、その獨露の處をいふ。意は夙慧あるが故に、本性を見得する難きにあらざるをいふ。
- ③ 人に等は、冷機自知の處。
- ④ 雲門等、下は易きにあらざることを論ず、雲門室中録に見ゆ。説く時等とは、口頭の禪にして眞實の禪にあらざるが故に、物物の上に受用する能はざる底を謂ふ。
- ⑤ 商量等の語は今世に流布する録中になし。
- ⑥ 更に等は、人認つて云ふ、商量せざる時は便ち無と、故に云ふ、其無なる處、更に是れ甚麼ぞと看よと。
- ⑦ 近年等、第四段、邪師を破す。
- ⑧ 或は等は、是れ口頭禪なり、此れは問答を破するに非ず、問答共のものを以て禪とす、故に之を詞するなり。
- ⑨ 古人等は、計較の禪をいふ、是れ亦人の爲に頌古を拈弄する等を詞するに非ず、今は明りに分別計較し、之を以て禪となすをいふ。
- ⑩ 商確とは、確は堅なり、正字通に權に通用して、相爭較するなりと註せり。俱舍麟記に云く、「商確は商量なり」と、今の意は勝負優劣を相争ふをいふ。
- ⑪ 是れ虚とは、方便をいふ、下の實に對す。
- ⑫ 代は代語にて之に二種あり、一は現前の衆に代る師家の垂語にして、衆に下語せしめて契はざる時は自ら衆に代つて語を下すを代語といひ、又は別語といふ、雲門録に其例多し、蓋し雲門に始まりしか。
- ⑬ 二は古人に代つて古則を擧揚して他の古人無語の處に代語

實なり、這語は玄なり、那語は妙といふて、或は代し、或は別するを禪とする者あり。或は眼見耳聞を以て和會して、三界唯心萬法唯識といふ上に在りて禪とする者あり。或は無言無説を以て黑山下の鬼窟裏に坐して、眉を閉ぢ眼を合して、之を威音王那畔、父母未生の時の消息なりと謂ひ、亦之れを默而常照と謂つて禪となす者あり。此くの如き等の輩、妙悟せんことを求めずして悟を以て第二頭に落在すと爲し、悟を以て人を誑説すと爲し、悟を以て建立なりと爲す。自ら既に會て悟らず、亦悟ある底を信せず。妙喜常に衲子の輩に謂つて説く、「世間の工巧技藝すら若し悟處なければ、尙ほ其の妙を得ず。」況んや生死を脱せんと欲して、而して只だ口頭を以て靜を説いて

- ① 或は別とは、古人の語に別するを別語といふ、即ち先徳の古則を擧揚せる中に、他の語を下せりと雖も、今我が意に契はず、別に一轉語を下す、之を別語といふ。例せば、古人の語を拈じて云く、若し是れ吾れならば便ち然らず、或は若し是れ我れならば是くの如くに道はん等と言つて別に語を下せるの類をいふ。今は只だ語言三時を以て禪となすをいふ。
- ② 或は眼等は光影邊の禪なり、此事は見聞を離れず即せずして、而して之を認めて和會すとなり。
- ③ 僧寶傳九永明章に云云す。華嚴十地品に云く、「三界の所有は但だ是れ一心」と、十地經第六地に云く、「三界は虚妄、皆是れ一心なり」と、宗鏡錄二、臨濟、會元十等。萬法唯識とは、唯識論七、同述記七に出づ。
- ④ 無言等、此は默照邪禪なり、これは仰山の所謂安禪靜慮ならずんば、這裏に到つて茫然たるの語を誤り認めて、心を閉塞するを以て禪となし、解會轉た深きが故に、邪に入ること轉た深きなり。
- ⑤ 默而常照、永嘉集下に、優曇又云云と。
- ⑥ 誑はたぶらかす、惑はす、欺くなり。誑は誑なり、意は元來悟なくして而も悟ありと云つて人を誑すなりと。
- ⑦ 建立は方便なり。
- ⑧ 世間等とは、山谷詩集十に云く、「丹青の妙處は傳ふべからず」と、莊子の五に云云。
- ⑨ 況んや等は妙悟を拂ふを破するなり。
- ⑩ 口頭等は默照邪禪に當る。

便ち收殺せんと要するをや。大いに頭を埋めて東に向つて走りて西邊の物を取らんと欲するに似たり、轉た求むれば轉た遠く、轉た急なれば轉た遅し、此の輩を名けて可憐愍の者と爲す。教中に之を大般若を誦し佛の慧命を斷する人と謂ふ。千佛出世すとも懺悔を通せし、是れ善因なりと雖も返つて惡果を招ぐべきなり。寧ろ此の身を以て碎いて微塵の如くするとも、終に佛法を以て人情に當てし、決して生死に敵せんと要せば、須らく是れ這の漆桶を打破して始めて得べし。切に忌む邪師に順に摩持して冬瓜印子を將つて印定せらるるを被つて便ち我れは千了百當すと謂ふことを、此くの如きの輩、稻麻竹葦の如し。左右は聰明にして識見あり、必ず這般の惡毒を受けし。然れど

① 收殺とは合殺に同じ、うたひどめ、まひどめをいふ、即ち事畢るをいふなり。
 ② 頭を埋むとは、俗語なり、無分曉をいふ。寒山詩、圓悟心要下に見ゆ。東に向ふ等は、計較を以て計較なき處に到らんと欲するなり、若し之を求めんと欲せば但だ須らく計較安排を離るべし。
 ③ 是れ善因、傳燈二十八に出づ。計較安排を以て口に佛法を説くは惡業にあらず、是れ善因なり、而して默照禪を認めて妙悟を撥するは是れ惡果なり。
 ④ 寧ろ等とは大惠平生の警願なり、此れは下の決して生死云云の語を起さんが爲に、先づ之れを言ふて、人をして深く其處にあらざることを信ぜしむるなり。
 ⑤ 冬瓜等とは、惡知識、杜撰の

長老の設に印定するを冬瓜印子に喩ふるなり、警嚴九十八則の評に見ゆ。
 ⑥ 稻麻等とは、邪師邪徒の多きを喩ふ。法華方便品の偈、同戒環要解に云云す。
 ⑦ 第五段、如上の邪を聞くの意を述ぶ。
 ⑧ 識見とは、目に見る所ありて、心に分別あるなり。物を知るに多ければ則ち識見増多なり。
 ⑨ 然れど等は、諸方の善知識に逼問するの時を謂ふ。
 ⑩ 千萬等、第六段、重ねて工夫提擲の法を示す。
 ⑪ 古徳とは、鴻山を指す、警嚴の文なり。
 ⑫ 天花等、警嚴第一則の評、傳燈十七、雲居篇、唐僧傳六、法雲の章。
 ⑬ 癡狂等は、畢竟自己の事にあづからずの意。

も亦用心すること切にして速効を求めんことを要し、覺えず知らずして他に染汚せられんことを恐る。故に筆に信せて葛藤すること如許す、明眼の人に覩見せらるれば、一場の敗闕なり、千萬相聽せよ。只だ趙州一箇の無字を以て、日用應縁の處に提擲せよ、間斷することを要せざれ。古徳言へることあり、「至理を研窮して悟を以て則と爲せよ」と。若し説き得て天花亂墜すとも、悟らすんば總に是れ癡狂外邊に走るのみ。之れを勉めよ、忽にすべからず。

① 湯丞相に答ふ 進之

② 丞相既に心を此の段の大事因縁に存す、缺減界の中の虚妄不實なると、或は逆、或は順、一一皆是れ機を發する時節なり。但だ常に方寸をして虚豁豁地ならしめて、日用做すべ

① 湯の傳は、宋史列傳百三十二、丞相は杜氏通典三十二に云く、秦悼武王二年に始めて丞相の官を置く、乃至金印紫綬、天助を承けて萬機を理むることとを掌る、秦に初に左右あり、二世に至りて中丞相あり、丞相の月俸錢は六萬云云。日本の左右大臣に當ると、有云く、三公丞相にあらず、此は左右僕射をいふと。師七十一歳の作なり、年譜に紹興三十二年の處に湯丞相の額に和するの偈あり。

② 第一段、用心を示す。
 ③ 缺減界とは、娑婆世界のことなり、吾人の住する現世界は精神的にも、物質的にも満足を得ること難く、事事物物が希求通りにならず、淨土の果報の満足なるに同じからざるが故に缺減界といふ。缺減に三種あり、居家必用集に出づ。

④ 機は發動の義、機根等と熟字す、根は物の根源にして能生の義、即ち人類の佛教を修行し證悟し得る能力をいふ、今の文意は吾人の遭遇すべき逆境若しくは順境、其の他見聞覺知之一一は、皆本具の佛性覺體を開悟すべき能力を開發すべき好箇の時節なれば、平常ぼんやりとして日を過ごすなどの意なり。
 ⑤ 分に等とは、前の權機密に答ふる書に云く、但だ一切時に臨み縁に隨つて酬酢し、自然に這箇の道理に合著すこと、此意なり。
 ⑥ 第二段、工夫の法を示す。
 ⑦ 生死の心とは、念起滅の虚妄の心をいふ、これ次に華嚴を引かんが爲に先づ之れを言ふ。
 ⑧ 第三段、機め悟後の境界を示す。

底の事は、分に随つて撥遣し、境に觸れ縁に逢ひ、時時に話頭を以て提撕せよ。速効を求むること莫れ、至理を研窮して悟を以て則と爲せよ。然も第一に心を存して悟を等つことを得ざれ。若し心を存して悟を等たば、則ち等つ所の心に道眼を障却せらるることを被らん。轉た急なれば轉た遅し、但だ只だ話頭を提撕せよ、驀然として提撕の處に向つて、生死の心、絶するときは則ち是れ歸家穩坐の處なり。憊廢の處に到ることを得了らば、自然に古人の種種の方便を透得して、種種の異解自ら生ぜじ。教中に所謂心の生死を絶し、心の稠林を伐り、心の垢濁を洗ひ、心の執着を解くといへるものなり。執着の處に於て、心を動轉せしめ、動轉の時に當つて、亦動轉する底の道理あるこ

- ① 古人の話則因縁をいふ。
- ② 教中とは、華嚴經六十三入法界品、解脫長者章。
- ③ 心の稠林とは、斷常等の異見をいふ、華嚴經三十八に十種の稠林を説けり、十地論十一。法華一、方便品に云く、邪見の稠林に入り、若しくは有若しくは無等、此諸見に依止して六十二見を具足す云云。科註に云く、五見交加はりて稠林の茂密なるが如し、若し有に着せば是れ常見、若し無と著せば是れ斷見なり、此の兩に因るが故に、所以に六十二見を生ずるなり」と。心とは、第六意識なり。
- ④ 心の垢濁とは、吾人の意識には貪瞋痴等の煩惱の垢が附着して同時に作用をなせり、故に所縁の境を實の如く取ることはせず、妄境に執着し隨つて境の爲に支配せられ束縛せられて、自由を得ざるなり、故に其垢濁を洗除し、執着を解脫するを要す。
- ⑤ 心を等、此れは大惠は一回此の田地に到りし人なれば、此の如くに言ふなり。
- ⑥ 亦等、動轉するものは是れ何物ぞと、纒かに覺すれば動轉底の道理なし。
- ⑦ 自然等は、傳燈十七、雲居章。
- ⑧ 珠等とは、拘泥執着せざるをいふ。
- ⑨ 撥は發なり、之を轉するなり。
- ⑩ 南陽等、第四段、邪師を轉破す。傳燈五、會元二、六祖旁出の忠國師なり。說法等とは、謂く、邪師は實法を與ふなり、邪師自ら實法を認め以て眞の歸處となす、故に之を以て人に與ふ、これ唯だ自ら迷ふのみならず、又人を迷味するなり。野干鳴とは說法を指す、佛藏經北藏四。

となく、自然に頭々に明かに、物物上に顯れて日用應縁の處、或は淨、或は穢、或は喜或は怒、或は順或は逆、珠の盤に走つて撥せざれども自ら轉するが如くならん。這箇の時に到ることを得れば、拈出して人に呈似するこ
と得ず。人の水を飲んで冷煖自知するが如し。
南陽の忠國師言へることあり、說法有所得なる是れを野干鳴と爲す」と。此の事は、青天白日の一見便見するが如し、眞實自ら見得する底は、邪師も、走作せしむること得ざるなり。前日亦嘗て面言して、此の事は傳授あるとなし、纒かに奇特玄妙ありと説かば、六耳謀を同じうせずといふの説、即ち是れ相欺くことを、便ち好し拽住して劈面に便ち唾するに。書生より宰相に做到る是れ世間法の中の最尊最貴なる

- ① 青天白日とは、黑白分明なるをいふ、意は邪師の正不正を見わけること白日に物を見るが如しと、一見便見はこれ擇法眼なり。
- ② 走作とは突出して事を作すをいふ。意は湯丞相、此の境界に到らば亦此くの如しと。
- ③ 此事等は、邪師の傳口令を破す、上に死語といふ是なり、總て言語には作用なき故に死語といふ、看經の眼を具すべしと言ふ如く、今傳授なしと云ふ底意には有の義あり、然し直に有と云ふべからず、故に無しといふのみ、故に六祖は黃梅の忍大師の處に於て三更入室す、心大師は袈裟を以て遮圍して、人をして說法なきがしめず、此等は是れ傳授の處なり、然らば一向に傳授なしと謂ふにあらず。
- ④ 六耳云云とは、意は但だ自ら知るべきをいふ。此れは耳語密談をいふ、譬へば密計せんと欲せば、三人同處に在る時は必ず其事漏れ易し、故に漏れざらしめんと欲せば、則ち或は但だ兩人相對して密に謀るべきなり。耳とは、耳に附して語るなり、六耳相集りて俱に謀らざるの謂なり。古云く、多人相會して計略せば其事漏ると、而し此の如き事は今の要にあらず、今の畢竟の意は若し自悟自證にあらざれば、本分の田地に到る能はざるをいふ。拽住とは大惠を……。
- ⑤ 第五段、有漏の善業は眞の佛法にあらざることを論ず。書の上に「公は」を加へ見よ、書生とは、史記百二十一儒林傳に辯す。宰相とは、此れは三公中の宰相にあらずと。杜氏通典二十一。
- ⑥ 此の事とは、出世間法なり。

者なり。若し此の事の上に向つて了却せずんば、即ち是れ虚しく南閻浮提に來つて打一遭す。收因結果の時には一身の惡業を帯び得て去らん。教中に説く、癡福を作すは是れ第三生の宛なりと謂ふ。何をか第三生の宛と謂ふ、第一生には癡福を作して性を見ず、第二生には癡福を受けて慚愧あることなければ、好事を做さずして一向に業のみを作す。第三生には癡福を受け盡して好事を做さざれば、殺漏子を脱却する時、地獄に入ること箭を射るが如し。人身は得難く佛法には逢ひ難し、此の身、今生に向つて度せずんば更に何れの生に向つてか此の身を度せん。此の道を學せんに須らく決定の志あるべし。若し決定の志なくんば、則ち聲を聞いて卜する者の、人の

- ① 南閻浮提とは、此世界を云ふ、前に之を註せり。法苑珠林四、名義集三等に出づ。
- ② 一遭とは、一周の義なり、前に出づ。
- ③ 收因結果とは、諸事の成就するをいふ。今は此の世を去らんとするの時をいふなり。
- ④ 教中とは、未詳、金剛經判定記。癡福とは、此事に向向せずして漫に有漏の善事をなすを謂ふ。
- ⑤ 性とは、人人本具の佛性なり。華嚴離世間品。
- ⑥ 業のみを作すとは、惡業を作すをいふ。
- ⑦ 殺漏子は此れ第二生を離れて將に第三生に到らんとする時なり、俗語なり、五尺の形骸をいふ。徒然草にいふ、かららきやうときへのにすてて云云、此れ殺漏子を指す。
- ⑧ 地獄、正に是れ第三生なり、

證道歌に云く、住相の布施は生天の福なり、猶ほ仰箭の虚空の如し、勢力盡れば箭還つて墜ち、未來の不如意。人身等は、南本涅槃經三十一迦葉品なりと、冠註に云く、「小涅槃經の文なり」と、何れも未だ檢せず。梵網經に云く、「一たび人身を失へば萬劫にも復らず、壯なる色の停らざること猶ほ奔馬の如し」と、これ小事にあらざるが故に茲に之を勸勵す。佛法等は、法華經八。此二句は大般若三百九十一、成熟有生品。此身等は洞山价和尚、母に贈る書中の語なり。諸祖偈頌下。第六段、決定の志を立てんことを要す。決定等とは、實智慧を以て邪正を辨別すれば、人惑を受けず、又妙悟を以て決定をなすの義なり。聲を聞

東と説くを見ては便ち人に隨つて東に向つて走り、西と説けば便ち人に隨つて西に向つて走るが如くならん。若し決定の志あらば則ち把得住して主宰と作り得。癡融の所謂設ひ一法の涅槃に過ぎたるあるも、吾は説く亦夢幻の如しと。況んや世間の虚幻不實の法をや。更に甚麼の心情あつてか之れと交渉を打せんや。願くは公、此の志を堅うして以て手に入ることを得て決定の義をなさば、則ち縱使ひ大地の有情盡く魔王と作つて來つて惱亂せんと欲すとも、其の便を得る處あること無けん。般若の上には虚しく棄つる底の工夫あることなし。若し心を存して上面に在かば、縱ひ今生に未だ了せずとも亦種子を種る得ること深からん。臨命終の時に亦業識に所牽を被つて諸の惡趣

- ① くとは、上の黃門司に答ふる書中に出づ。
- ② 人の等とは、東西とは喻なり、猶ほ此事を説くに彼事を説くと云ふが如し。めなし、どちら、聲について、ましませで、般若を以て定量となさずんば皆此くの如し。大論三十に云云。
- ③ 癡融は傳燈牛頭章。此は邪師が種種の奇特玄妙を説くと雖も、而も彼の惑を被らざるなり。大論五十五等。
- ④ 況等は、邪師傳授の法に況す。之とは、邪師の口耳の上の傳授を指す。
- ⑤ 魔王とは、邪師を喻ふ。大般若四百六十六に、大地、魔王となる云云と。
- ⑥ 第七段、心を般若に寄せて失せざることを論ず。虛等とは華嚴五十二、如來出現品に云云。意は一切處一切時一切事

に於て小善根を種うるも存心の工夫なるが故に、虚しく棄つるなしと。大慧經三善根品に云云。上面は猶ほ面前といふが如し、上に出づ。成佛の種子。殺漏子とは、將に今世を捨てんとするの時なり。後世の人趣に出頭し來るをいふ。我底とは本來の人を指す。契は萬姓統譜二十三に出づ。提利は事物紀原六に云云、景德四年六月、眞宗筆記六事の一に曰く、提點刑獄と、七月詔して官を擇び諸路の刑獄公事を提點す等と。此章は禪道佛法一如の義を明かにし、其の根本に達するの要徑を説く。第一段、佛事と禪語と異なきことを示す。蓋し契提利は、六度萬行を以て佛事となし、

に墮せず。④ 最漏子を換却して、頭を轉じ來るとも亦我底を味すこと得じ、之れを察せよ。

⑤ 樊提刑に答ふ 茂實

① 能く佛事を行すれども禪語を解せずと示諭せらる。能くすると解せざると別なく同なし、但だ能く行すと知る者、即ち是れ禪語なり。② 禪語を會して而して能く佛事を行せずんば、人の水底に在つて坐して渴すと叫び、飯糶裏に坐して飢うと叫ぶが如くと何ぞ異ならんや。當に知るべし、禪語は即ち佛事、佛事は即ち禪語なることを。能く行すると能く解するとは、人に在つて、法には在らず。若し更に、箇の裏に向つて同を免め別を免めば、則ち是れ、空拳指上に實解を生じ、根境法中に虚しく捏怪す。③ 却き行じて而も前まんことを求むるが如

無意味の語を以て禪語と爲す、これ言途を解するを得ざるなり。故に大惠の意の謂く、根元を截断せば則ち解せざるなしと。

④ 禪語を會すとは、來書に云く、能く佛事を行じ等と、これ然らず、此れ亦來書の佛事を行す云の句に反影して、一邊を借りて言ふ。

⑤ 水底に在るとは、佛事を行するに喩ふ、坐して渴すと叫ぶとは、禪語を解せざるを喩ふ。

⑥ 籬とは竹を以て造りし籬なり、飯糶裏とは、佛事を行するに喩ふ、意は實に飯糶裏に坐し、實に水底に在らば何ぞ飢渴せんや、今も眞に佛事を行せば何ぞ禪語を解せざらんや、當に知るべし、禪語即佛事、佛事即禪語なることを。⑦ 籬は、三才圖繪に圖あり。⑧ 法とは、能く行じて能く解すと

知る者を云ふ、前の正狀元に答ふる書中に、順背は人に在りて性にあらざる云云と、其の意同じ。

⑨ 箇の字、一本に這に作る、箇は此に同じ、法を指す。

⑩ 空拳指上とは、能く行じて能く解し、行ぜず解せずを指していふ。此事は能行能解等の上にあらざる故に。

⑪ 根境法中は、能行能解等が此れ根境法なり、者裡に此事なし、故に虚しく捏怪といふ、終日解し終日説くとも終に此法にあづからざるが故に。怪の字を一に惟に作れり。

⑫ 却行等は、淮南子九に出づ。意は能行能解を以て佛事を求めば、却行して前まんことを求むるが如し、能行能解は佛事にあらず禪語にあらず、故に終に斯事にあづからず、これ其理にあらざるをいふ。

し。④ 轉た急なれば轉た遅く、轉た疎なれば轉た遠し。⑤ 徑截に心地恰如たることを得んと要せば、但だ能くすると能くせざると、解すると解せざると、同なると同ならざると、別なると別ならざると、能く是くの如くに思量し、是くの如くに卜度する者を將つて、他方世界に掃向せよ。

却つて掃ふべからざる處に向つて看よ、是れ有なるか是れ無なるか、是れ同なるか是れ別なるか、蕩然として、心思意想絶すれば、恁麼の時に當つて自ら人に問ふことを著ひざるべきなり。

⑥ 聖泉珪和尚に答ふ

⑦ 既に外護者の心を存して相照すことを得、自ら人事を撥置して、頻に衲子の輩の與に佛事を作すべし、久久にして自ら殊勝ならん。⑧ 更に望むらくは室中之れが與に、子細にして

④ 急と遅と相背くの詞なるも、疎と遠とは同義なり、故に疎は恐らくは親の字の寫誤か。

⑤ 徑截、第二段、安解を捨て賣工夫をなさんことを勸む。意は眞に佛事を行せば、必ず禪語を解すべしとなり。

⑥ 他方等、計較卜度する者を他方世界に掃却し終れば、掃ふべからざる物現前す、これ有にあらざる無にあらざる、同にあらざる別にあらず、一切なき處、これ達磨の所謂心牆壁の如きの類なり。

⑦ 心思とは、心想の絶する時に自ら證悟すべしとなり。六祖の不思議不思議、正與麼の時、那箇がこれ明上座の父母未生已前の本來の面目と授す、是れ掃ふべからざるの處なり、大應錄下、九十六丁、玄提禪人に示す法語に云云す、皆一轍にして冷煖自知の處なり。

⑫ 普燈錄十六、温州龍翔の竹庵士珪禪師にして、佛眼遠に嗣ぐ、政和の末、法を天寧に開く、會元二十、大惠の法從姪なり。

⑬ 第一段、世俗を濶略して斯道を荷擔せんことを勸む。心を存して相照すとは庫司邊の事を照顧するをいふ。撥置とは、之を收めて一邊に除き置くをいふ。人事とは、世俗の事務なり、意は食輪は既に轉すれば、但だ當に法輪を轉すべしとなり。

⑭ 佛事とは、今は佛法商量等をいふ。⑮ 第二段、本分を以て、學者を接すべきを示す。

⑯ 子細等とは、第二義門の處に於て學者を接すべからず、第一義本分の處に於て接すべきをいふ、峨侍者は、我が國師の會下に在つて二十五度、打

人情を容るることを得ざれ、伊と共に落草することを得ざれ。直ちに之に似すに本分の草料を以てして、伊をして自語自得せしめば、方にはれ尊宿、人の爲にする體裁なり。若し是れ伊が遅疑して薦まざるを見て便ち之れが爲に注脚を下さば、但だ他の眼を暗却するのみに非ず、亦乃ち自家本分の手段を失却せん。人を得ざれば即ち是れ吾輩の緣法只だ此くの如し。若し一箇半箇の本分底を得ば、亦平昔の志願に負かざるなり。

鼓山の 達長老に答ふ

專使來つて書并に、信香等を收めてより、開法、出世して道を石門に唱へ、從來する所を忘れず、岳長老の爲に拈香して、楊岐の宗派を續ぐことを知る。既に已に箇の事を承

出せらるる等の人情を容れざる處、運つて大慈悲なり。
②落草とは、向上より地上に下りて人に接し、心と説き性と説くをいふ、碧巖三十四則前に辨す。

③體裁とは、體格風裁なり、格式といふが如し、十八史略の註に、體裁は猶ほ風致といふが如しとす。

④之とは學者を指す。若し落草し注脚を下さば、枝蔓上に枝蔓を生じて、心を以て悟を等つに至るが故に。

⑤補門警訓下に出づ。
⑥人々等、第三段、吾家は人を得るは多きにあらざることを論ず。

⑦緣法とは、因緣の法にて緣とは禪宗の機緣を指す、法は法明なり、恰榔具眼の士を得ると否とは宿緣に由るをいふ。
⑧志願とは、傳法度生の願なり、

達磨の所謂「我れ本と此の土に來るは法を傳へ、迷情を教はんが爲なり」と、是れなり。
⑨鼓山は福州閩縣に在り、白雲湧泉禪寺と號す、其の開山興聖神安國師は雪峰に嗣ぐ、鼓山に十壇あり、石門は其の一なり。福縣名勝志。

⑩達は會元二十に云く、「東禪の蒙庵思岳禪師の法嗣、宗達禪師なり。普燈二十一、續傳燈三十四等。此章は、學者の根器に隨つて拈泥すること戒む、即ち宗師の體裁、本分を以て人を接すべきを示す。

⑪第一段、書信を領す、專使とは、専ら其事の爲に使を發して他事を雜へざるをいふ。

⑫信香とは、嗣法の信を表し、傳法の由来を識るをいふ、達禪師は大惠の法孫なるが故に、信香を送りしなり。
⑬開法とは師より得る所の法を

當す、須らく卓草地にして徹頭徹尾ならしむることを做すべし。平昔の實證實悟底の一著子を以て、丈室に端居し、百二十斤の擔子を擔うて、獨木橋上より過ぎて脚蹠き手跌へば、則ち自家の性命と和に保つべからざるが如くせよ。況んや復た人の與に釘を抜き楔を抜いて、他人を救濟せんをや。古徳云く、「此の事は八十の翁翁の場屋に入るが如し、豈に是れ兒戲ならんや。」又古徳云く、「我れ若し一向に宗教を舉揚せば、法堂前草深きこと一丈にして、須らく人を倩うて看院せしめて始めて得べし。」巖頭毎に云く、「未だ肩せざる已前に向つて、一たび覷て便ち眼卓朔地なるべし」と。晏國師の石門に跨がらざる句、睦州の現成公案、爾に三十棒を放す。汾陽の無業の莫妄想、魯祖の

開演するをいふ、出世とは佛の出世に準じていふ、法華方便品。

①岳は前記の思岳禪師なり、普燈十八、汝達の宗派圖大惠法嗣の下に出づ。

②拈香とは、舊說鈔に云く、「拈は燒の義、唯だ佛祖の前に燒香す、これ拈香なり」と、備用清規達磨忌に曰く、「住持拈香の佛事を擧す」と。即ち徹悟の人に對してすることに、報恩、賞贊等の意あり。

③楊岐は舟峰補傳に。
④箇の事とは、普通には本分を指していふ、今は道を唱へ人の爲にするをいふ。承當とは荷擔するをいふ。

⑤卓草地は、獨立の貌、委委隨隨地ならざるをいふ。徹頭等は碧巖三十一則に。

⑥百二十斤とは、丈室内に於てなす爲人度生の極めて重大な

るをいふ、百二十斤とは此れは但だその重きをいふのみ。史記五十五、留侯世家に云く。

⑦獨木橋とは、これ但だ其語勢を假るのみ、傳燈九、長慶章のと其意別なり。

⑧自家等とは、萬物の懸崖に墮して自ら命は度すべからず、況んや他人を救濟することなやの意。

⑨古徳、第三段、廣く古人を引いて證す、八十の翁翁は前に註す。

⑩又古徳等、前には不好事に之を引く、今は好事に之を引く、已下師家の峻峻を引く。

⑪此語は諸傳の巖頭章に之を載せず。未だ肩等とは、未だ言句を吐露せざる以前をいふ。
⑫一たび等とは、一見便見の靈利の漢をいふ。
⑬晏國師は雪峰存の法嗣、會元七、鼓山の神安章に云く、鼓

凡そ僧の門に入るを見ては便ち轉身面壁して坐す。人の爲にせん時は當に^①這般の體裁を味さずして、方に從^②上の宗旨を失せざるべきのみ。昔、^③馮山、^④仰山に謂つて曰く、^⑤法幢を建て宗旨を立するは、一方に於て五種の緣備つて始めて成就することを得しと。五種の緣とは謂く、^⑥外護の緣、^⑦檀越の緣、^⑧衲子の緣、^⑨土地の緣、^⑩道の緣なり。聞く^⑪霜臺趙公は是れ汝が請主なりと。致政司業、鄭公は汝を送つて入院せしめしと。二公は^⑫天下の士なり、此を以て之れを觀れば、汝は五種の緣に於て稍備はれり。衲子の^⑬閩中より來る者ある毎に、^⑭法席の盛なると、^⑮檀越の歸向せると、^⑯士大夫の外護せると、^⑰住持に魔障なきと、^⑱衲子雲のごとくに集まるとを稱歎せざるもの無し、以て色力未だ衰

由尋常の道、更に一人の石門を跨らざるあり、須らく石門を跨らざるの句あるべし、作摩生か是れ石門を跨らざるの句。傳燈九。
^①睦州は睦州龍興寺に居し、述を晦まし用を藏す、常に草履を製して密に道上に置く、乃ち陳蒲鞋の號あり、師、僧の來るを見て云く、現成公案、汝に三十棒を放す」と、僧云く、某甲、是の如し」と、傳燈十二。公案式目上に、三十棒を喫すべきの罪禍現成して之れあり、然るに今之を放過するなり。
^②無業は馬祖の法嗣、僧俗歸嚮す。凡そ學者の問を致すあらば、師多く之に答へて云く、「莫妄想」と。傳燈八。魯祖も亦馬祖の法嗣、池州魯祖山の寶雲禪師なり、傳燈七。門に入るるとは室中に入るの門也。
^③這般の這は者に作るを是とす、事を指すの辭なり、事苑二に之を辯す。體裁は格式なり。
^④第四段、緣の備足することを楽しむ。
^⑤法幢等は、一方に於て法幢を建て宗旨を立つるの謂なり、楞嚴一。證道歌に曰く、法幢を建て宗旨を立つ、明明たる佛敎曹溪是れなり」と。五種の緣とは出所不明。
^⑥外護の緣とは、官人等之を守護して魔障ならしむるをいふ。檀越の緣とは、衣、食、住の窮乏せざるをいふ。檀越とは、南海寄歸傳一、事苑五、名義集一等に由づ。正しくは陀那鉢底(Dhanapatti)といふ、施主と譯す、布施の主なり、寺院の信者を檀越等といへるに同じ。施に財施、法施等あり、財物を施して他の窮乏を

へざるの時を趁ふて頻りに衲子の爲に箇の事を激揚すべし。^⑦手を垂るゝの際、須らく精彩を著けて^⑧莽鹵なることを得ざるべし。^⑨蓋し近年以來、一種^⑩禪販の輩あり、到る處に一堆一擔の^⑪相似の禪を學得す。往往に^⑫宗師も^⑬造次に放過して遂に^⑭虚を承け響を接して、^⑮遞に相印授して後人を誤り賺し、^⑯正宗をして淡薄にして單

教ふを財施といひ、説法度生するを法施といふ、財施の主は多く在家の人、法施の主は主として出家の人なり、今は財施の主をいふ。梵漢兼舉とは未詳。
^①衲子の緣は、諸方の學者來會し隨從するをいふ。土地の緣とは、地理の關係にして所住の處若し縁を闕かば自然に之を離れ去るが故に。
^②道の緣とは、師家の所説所唱各各その家風あるが故に、學者は自らの機宜に隨つて之を追慕するをいふ。
^③霜臺は杜氏通典二十二に云く、御史、風霜の任となり、不法を彈料す、百僚震恐す、官の雄峻なる之れに比するなすと、此意を取つていふか、秘炭新書に、御史臺を以て霜稜といふ、蓋し日本の彈正臺に當る。趙公は未だ詳ならず。

^④致政は、禮記註疏十三、同十曲禮上、白虎通六。司業は、もと仕ふる所の官なり、事文新集三十一。鄭公は未詳。
^⑤天下の士とは、天下高顯の士の謂なり。史記二十三。
^⑥閩中は鼓山の所在地なり。
^⑦法席の盛は、土地の緣に當る、他は知るべし。
^⑧住持等は道縁に當る、魔障とは師家と學者と融和せざるをいふ。大品般若十六、不和合化品、大般若三百三、四百四十。
^⑨垂手不垂手とは是れ洞家の呼稱、碧巖四十三則の評に、學者の爲に泥に入り、水に入るをいふなり。
^⑩莽鹵は事苑に云く、不分明の貌」と、莊子八則陽篇に云云す、君、政をなすに南莽する勿れ、民を治むるに滅裂する勿れ等、南莽は粗略にして心

を用ひざるなり、滅裂は輕易なり。
^⑪第五段、誤りに印可するを斥す。
^⑫禪販は小販(ふれうり)の謂、惡學邪解の者の法を賣弄するをいふ。楞嚴六、同釋要鈔。
^⑬一堆一擔は、臨濟錄に曰く、「三重五重、覆子につつんで人をして見せしめず」と、是れなり。大策子上に死老漢の語を抄すと、即ち經教の語を鈔録する等をいふ。
^⑭相似禪とは、取相實法に依つて説くをいふ、前の汪狀元に答ふる書に、説いて似たることを得、形容して似たることを得るも、却つて見ず、却つて悟らざるを怕る」といふ是れなり。智論六十に云云す。衆生の常顛倒を破せんが爲に無常と説けば則ち無常を認むるの類なり。

傳直指の風、幾と地を掃はしむることを致すに至る、子細にせずんばあるべからず。五祖師翁、白雲に住せし時、嘗て靈源和尚に答ふる書に云く、「今夏諸莊の顆粒、收めざれども以て憂とせず、其の憂ふべき者は一堂數百の衲子、一夏に一人の箇の狗子無佛性の話を透得するもの無きことなり。佛法の將に滅せんとするを恐るるのみ」と。汝看よ主法底の宗師の心を用ふるは、又何ぞ曾て産錢の多少、山門の大小を以て重軽と爲し、米鹽の細務を急切となし來らんや。汝既に出頭して箇の善知識の名字を承當せば、當に一味に本分の事を以て方來を接待すべし。有ゆる庫司の財穀は因を知り果を識る。知事に分付して、司を分ち、局を列ねて之れを掌らしめて、時時に大綱を提舉せよ。

- ① 造次等は、論語里仁爲美の朱註に出づ。放過とは容易に許可するをいふ。
- ② 慮を承くとはい、不實なるを喻へいふ。
- ③ 正宗記十二に云云、又宗門と稱するは多く禪門に限る、宗鏡錄一。單傳直指は達磨宗なり。碧巖第一則。
- ④ 幾どは絶無なるをいふ。
- ⑤ 五祖等、第六段、財法の輕重をいふ。會元十九、聯燈十六、五祖法演禪師は絳州の人、白雲の端禪師の法嗣なり。相承を示さば、五祖一圓悟一、大惠、故に今大惠より師翁といふなり、白雲は舒州に在り。
- ⑥ 靈源は、會元十七、續燈二十六、僧寶傳三十、普燈六等に出づ。此語は靈源語に出づ。
- ⑦ 産は五穀をいひ、錢は金錢なり。
- ⑧ 大小等は、大刹を重んじ、小

刹を輕しとするなり。
⑨ 細務は孟子盡心篇上に云く、「知者は知らざることなし、當に之れを務むべきを急と爲す」と、朱子の註に云云す。
⑩ 汝等、第七段、寺務の處分を論ず。
⑪ 一味は餘味を雜へざるなり、猶ほ專一といふが如し。
⑫ 方來は、四方より來る者なり。孟子滕文公。
⑬ 知事とは、釋氏要覽下に、主事に四員あり、一は監寺なり、監は總領の稱なり、寺院の主と稱せざる所以なり、蓋し長老を推尊す。二に維那、悅衆と譯す、授受の人をいふ。三に典座、次を典し、牀座を付す。四に直歲は、直は當るなり、一切の作務を掌る役なり、即ち年中寺内の修理を掌り、門窓等を修補し、動用の什物器具を修換し、山林田園の栽

僧を安すること必ずしも多からざれ、日用の齋粥、常に後手をして餘あらしめ、自然に力を費さざるべきなり。衲子室中に到らば双を下すこと緊しからんを要せよ、泥を挖き水を帶ぶることを得ざれ。雪峯の空禪師の如き、頃に雲居雲門に在りて相聚る、老漢、渠が自ら欺かすして是れ箇の佛法中の人なることを知る、故に一味に本分の鉗鎚を以て之れに似す。後來に自ら別處に在りて打發す、大法既に明め、向の所受、過底の鉗鎚をば一時に受用することを得て、方に知る妙喜が佛法を以て人情に當らざることを。去年一冊の語録を送り得來る、造次顛沛にも臨濟の宗旨を失せず、今衆寮の中に送り、衲子の輩に看せしむ。老漢因に筆を擲つて其の後に書して特に爲に發提し本分の衲子

- 種を提舉す、此等を知事といふ、即ち心、法道に通じて諸有に著せざる身を撰んで知事となす。
- ② 局は「やくやく」なり。
- ③ 後手の手は助語なり。餘あるは之を以て不時の用に充つるなり。
- ④ 第八段、本分を以て人を接すれば利益あることを證す。
- ⑤ 渤海の草堂清禪師の法嗣、福州雪峯の東山惠空禪師なり。會元十八、普燈十。
- ⑥ 雲居等は上に出づ、此れは海昏の雲門なり。建炎三、四年にして、師四十一、二歳の時。
- ⑦ 別處とは、靈源の省禪師の處なり。
- ⑧ 過は助字なり、大惠下に在つて受けし所の鉗鎚を受用するなり。
- ⑨ 其後に書すとはい、大惠、其の語録に跋するなり。

⑩ 發提は、其語録の語を助證するをいふ。此時、師六十五歳なり。
⑪ 所以等、第九段、引證して上の意を結ぶ。古人とは、傳燈十五、洞山草に云云。
⑫ 若し已下は香巖の語意、同じきが故に、今合せ用ふるなり。
⑬ 遺簡等、古人の勝様看るべし、泥を挖き水を帶ぶると莫れ。
⑭ 只本分等、前の張侍郎に答ふる書には、衆生の機を備きにして機に隨つて接化せよと云ふ、これ前と矛盾するに似たり、然し佛祖の人の爲にするや、或は推し、或は控く、曾て一準ならず、實法の人に與ふるなきが故に、畢竟隨機はこれ權、本分を以て接するは是れ實なり、學者に利根の者少なるが故に、或はままた其機に隨ふのみ。

をして將來の說法の式と爲さしむ。若し老漢をして初め渠が爲に挖泥帶水して、老婆禪を説かしめ、眼開けて後、定めて我れを罵ること疑なけん。⑤所以に古人云く、「我れ先師の道徳を重んぜず、只だ先師の我が爲に説破せざることを重んず。⑥若し我が爲に説破せば豈に今日あらんや」と。便ち是れ這箇の道理なり。趙州云く、「若し老僧をして伊が根機に随つて接せしめば、人自ら三乘十二分教の他を接し了るあり。老僧が這裏は、只だ本分の事を以て人を接す、若し接不得ならば、自らは學者の根性遲鈍なるなり。老僧が事に干からず」と。之を思へ之を思へ。

國譯大慧普覺禪師書下 終

①大慧禪師、說法四十餘年にして、言句天下に滿つ。②平時參徒の編録するを許さず、而も衲子私かに自ら傳寫して遂に卷帙を成す。晩年に衆の力めて請ふに因つて乃ち流通することを許す。然れども、在會に先後あり、見聞に詳略あり、又賢士大夫の得る所の法語、各自に寶藏して盡く觀るに縁なし。今の收むる所殊に未だ盡さずと爲す。更に採集して別に後録を爲らんことを、俟つて文昌、謹んで白す。

- ①三十七歳にして開悟に見えて大悟す。
 - ②四十餘年は實は三十九年なり。
 - ③平昔は猶ほ平生の如し。
 - ④卷帙は、書卷なり、増訂に、「舒卷すべきを卷といひ、編次するを帙といふ」と。古には書は皆卷となす、後に方冊となせしなり、故に今尙ほ古に順じて卷と稱す。松亭晤語一。
 - ⑤在會は大惠の會下に在るなり。
 - ⑥見聞は衲子の見聞なり、略は功を用ふる少きを略といふと。
 - ⑦法語とは、論語子罕篇に法語の言能く從ふなからんかと。
 - ⑧俟つは天下の人に俟つなり。
 - ⑨終に一言す、以上の註解は主として寫傳、大惠書漫聞に據る、予其作者を知らずと雖も、願はくは後昆の眼目を開け。
- (譯註者 齋藤探支識す)

大慧普覺禪師書上

參學 慧然 錄

淨智居士黃文昌重編

答曾侍郎 天游 問書附

開頃在長沙得圓悟老師書稱公晚歲相從所得甚是奇偉念之再三今八年矣常恨未獲親聞緒餘惟切景仰某自幼年發心參禮知識扣問此事弱冠之後卽爲婚官所役用工夫不純因循至今老矣未有所聞常自愧歎然而立志發願實不在淺淺知見之間以爲不悟則已悟則須直到古人親證處方爲大休歇之地此心雖未嘗一念退屈自覺工夫終未純一可謂志願大而力量小也向者痛懇圓悟老師老師示以法語六段其初直示此事後舉雲門趙州放下著須彌山兩則因緣令下鈍工常自舉覺久久必有入處老婆心切如此其奈鈍滯太甚今幸私家塵緣都畢閑居無佗事政在痛自鞭策以償初志第恨未得親炙教誨耳一生敗闕已一一呈似必能洞照此心望委曲提警日用當如何做工夫庶幾不涉佗塗徑與本地相契也如此說話敗闕亦不少但方投誠自難隱逃良可慙也至扣

承叙及自幼年至仕官參禮諸大宗匠中間爲科舉婚官所役又爲惡覺惡習所勝未能純一

做工夫，以此爲大罪，又能痛念無常世間種種虛幻無一可樂，專心欲究此一段大事因緣，甚愜病僧意，然既爲士人，仰祿爲生，科舉婚官，世間所不能免者，亦非公之罪也，以小罪而生大怖懼，非無始曠大劫來承事真善知識，熏習般若種智之深，焉能如此，而公所謂大罪者，聖賢亦不能免，但知虛幻非究竟法，能回心此箇門中，以般若智水，滌除垢染之穢，清淨自居，從腳下去一刀兩段，更不起相續心足矣，不必思前念後也，既曰虛幻，則作時亦幻，受時亦幻，知覺時亦幻，迷倒時亦幻，過去現在未來皆悉是幻，今日知非，則以幻藥復治幻病，病瘥藥除，依前只是舊時人，若別有人有法，則是邪魔外道見解也，公深思之，但如此崖將去時，時於靜勝中，切不得忘了須彌山，放下著兩則語，但從腳下著實做將去，已過者不須怖畏，亦不必思量，思量怖畏，卽障道矣，但於諸佛前發大誓願，願此心堅固，永不退失，仗諸佛加被，遇善知識，一言之下，頓亡生死，悟證無上正等菩提，續佛慧命，以報諸佛莫大之恩，若如此則久久無有不悟之理，不見善財童子，從文殊發心，漸次南行，過一百一十城，參五十三善知識，末後於彌勒一彈指頃，頓亡前來諸善知識所得法門，復依彌勒教思，欲奉覲文殊，於是文殊遙伸右手，過一百一十由旬，按善財頂曰：善哉善哉，善男子，若離信根，心劣憂悔，功行不具，退失精勤，於一善根，心生住著，於少功德，便以爲足，不能善巧發起行願，不爲善知識之所攝護，乃至不能了知如是法性，如是理趣，如是法門，如是所行，如是境界，若周徧知，若種種知，若盡源底，若解了，若趣入，若解說，若分別，若證知，若獲得，皆悉不能，文殊如是宣示善財，善財於言下成就阿僧祇法門，具足無量大智光明，入普賢門，於一念中，悉見三千大千世界微塵數諸善知識，悉皆親

近恭敬承事，受行其教，得不忘念，智莊嚴解脫，以至入普賢毛孔刹，於一毛孔行一步，過不可說不可說佛刹微塵數世界，與普賢等諸佛等刹等行等，及解脫自在，悉皆同等，無二無別，當恁麼時，始能回三毒爲三聚淨戒，回六識爲六神通，回煩惱爲菩提，回無明爲大智，如上遮一絡索，只在當人末後一念真實而已，善財於彌勒彈指之間，尙能頓亡諸善知識所證三昧，況無始虛僞惡業習氣耶，若以前所作底罪，爲實則現今目前境界，皆爲實有，乃至官職富貴恩愛，悉皆是實，既是實，則地獄天堂亦實，煩惱無明亦實，作業者亦實，受報者亦實，所證底法門亦實，若作遮般見解，則盡未來際，更無有人趣佛乘矣，三世諸佛，諸代祖師，種種方便，翻爲妄語矣，承公發書時，焚香對諸聖，及遙禮庵中而後遣，公誠心至切如此，相去雖不甚遠，未得面言，信意信手，不覺切但如許，雖若繁絮，亦出誠至之心，不敢以一言一字相欺，苟欺公則是自欺耳，又記得善財見最寂靜婆羅門，得誠語解脫，過去現在未來諸佛菩薩，於阿耨菩提，無已退，無現退，無當退，凡有所求，莫不成滿，皆由誠至所及也，公既與竹椅蒲團爲侶，不異善財見最寂靜婆羅門，又發雲門書對諸聖，遙禮而後遣，只要雲門信許，此誠至之劇也，但相聽只如此做工夫，將來於阿耨菩提，成滿無疑矣。

又

公處身富貴而不爲富貴所折困，非夙植般若種智，焉能如是，但恐中忘此意，爲利根聰明所障，以有所得心，在前頓放，故不能於古人直截徑要處，一刀兩段直下休歇，此病非獨賢士大夫，久參禪子亦然，多不肯退步，就省力處做工夫，只以聰明意識計較思量，向外馳求，乍聞知

識向聰明意識思量計較外，示以本分草料，多是當面蹉過，將謂從上古德有實法與人，如趙州放下著，雲門須彌山之類，是也。巖頭曰：却物爲上，逐物爲下。又曰：大統綱宗，要須識句，甚麼是句，百不思時喚作正句，亦云居頂，亦云得住，亦云歷歷，亦云惺惺，亦云恁麼時，將恁麼時，等破一切是非，纔恁麼，便不恁麼，是句亦剗，非句亦剗，如一團火相似，觸著便燒，有甚麼向傍處。今時士大夫，多以思量計較爲窟宅，問恁麼說話，便道莫落空否，喻似舟未翻先自跳下水去。此深可憐愍，近至江西見呂居仁，居仁留心此段因緣甚久，亦深有此病，渠豈不是聰明，某嘗問之曰：公怕落空，能知怕者是空耶？是不空耶？試道看，渠佇思欲計較，祇對當時便與一喝，至今茫然討巴鼻不著，此蓋以求悟證之心，在前頓放自作障礙，非干別事，公試如此做工夫，日久月深，自然築著磕著，若欲將心待悟，將心待休歇，從脚下參到彌勒下生，亦不能得悟，亦不能得休歇，轉加迷悶耳。平田和尚曰：神光不昧，萬古微猷，入此門來，莫存知解，又古德曰：此事不可以有心求，不可以無心得，不可以語言造，不可以寂默通，此是第一等入泥入水老婆說話，往往參禪人，只恁麼念過，殊不子細看，是甚道理，若是箇有筋骨底，聊聞舉著，直下將金剛王寶劍一截截斷，此四路葛藤，則生死路頭亦斷，凡聖路頭亦斷，計較思量亦斷，得失是非亦斷，當人脚跟下，淨裸裸赤灑灑，沒可把，豈不快哉，豈不暢哉，不見昔日灌谿和尚，初參臨濟，濟見來，便下繩牀，葛臂擒住，灌谿便云：領領，濟知其已徹，即便推出，更無言句與之商量，當恁麼時，灌谿如何思量計較，祇對得古來幸有如此勝樣，如今人總不將爲事，只爲龜心，灌谿當初若有一點待悟待證待休歇底心，在前時，莫道被擒住便悟，便是縛却手脚，遶四天下，挖一遭。

也不能得悟，也不能得休歇，尋常計較安排底，是識情，隨生死遷流底，亦是識情，怕怖惶惶底，亦是識情，而今參學之人，不知是病，只管在裏許頭出頭沒，教中所謂隨識而行，不隨智，以故昧却本地風光本來面目，若或一時放得下，百不思量計較，忽然失腳踏著鼻孔，即此識情便是真空妙智，更無別智可得，若別有所得，別有所證，則又却不是也，如人迷時喚東作西，及至悟時，即西便是東，無別有東，此真空妙智與太虛空齊壽，只遮太虛空中，還有一物礙得它否，雖不受一物礙，而不妨諸物於空中往來，此真空妙智亦然，生死凡聖垢染著一點不得，雖著不得，而不礙生死凡聖於中往來，如此信得及見得徹，方是箇出生入死得大自在底漢，始與趙州放下著，雲門須彌山，有少分相應，若信不及放不下，却請擔取一座須彌山，到處行脚，遇明眼人，分明舉似，一笑。

又

老龐云：但願空諸所有，切勿實諸所無，只了得遮兩句，一生參學事畢，今時有一種剃頭外道，自眼不明，只管教人死猶狃地休去歇去，若如此休歇，到千佛出世，也休歇不得，轉使心頭迷悶耳，又教人隨緣管帶，忘情默照，照來照去，帶來帶去，轉加迷悶，無有了期，殊失祖師方便，錯指示人教人一向虛生浪死，更教人是事莫管，但只恁麼歇去歇得來，情念不生，到恁麼時，不是冥然無知，直是惺惺歷歷，遮般底，更是毒害瞎却人眼，不是小事，雲門尋常見此輩，不把做人看待，彼既自眼不明，只管將冊子上語，依樣教人，遮箇作麼生教得，若信著遮般底，永劫參不得，雲門尋常不是不教人坐禪，向靜處做工夫，此是應病與藥，實無恁麼指示人處，不見黃

槃和尚云、我此禪宗、從上相承以來、不曾教人求知、解只云、學道早是接引之詞、然道亦不可學、情存學道、却成迷道、道無方所、名大乘心、此心不在內外中間、實無方所、第一不得作知解、只是說汝而今情量處、爲道情量、若盡心無方所、此道天真本無名字、只爲世人不識、迷在情中、所以諸佛出來、說破此事、恐備不了、權立道名、不可守名而生解也、前來所說瞎眼漢、錯指示人、皆是認魚目作明珠、守名而生解者、教人管帶、此是守目前鑑覺而生解者、教人硬休去歇去、此是守忘懷空寂而生解者、歇到無覺無知、如土木瓦石相似、當恁麼時、不是冥然無知、又是錯認方便解縛語而生解者、教人隨緣照顧、莫教惡覺現前、遮箇又是認著獨體情識而生解者、教人但放曠、任其自在、莫管生心動念、念起念滅、本無實體、若執爲實、則生死心生矣、遮箇又是守自然體、爲究竟法而生解者、如上諸病、非干學道人事、皆由瞎眼宗師錯指示耳、公既清淨自居、存一片真實堅固向道之心、莫管工夫純一不純一、但莫於古人言句上、只管如疊塔子相似、一層了又一層、枉用工夫、無有了期、但只存心於一處、無有不得底、時節因緣到來、自然築著磕著、噴地省去耳、不起一念、還有過也、無云、須彌山一物不將來時如何、云、放下著、遮裏疑不破、只在遮裏參、更不必自生枝葉也、若信得雲門及但恁麼參、別無佛法指似人、若信不及、一任江北江南問王老、一狐疑了一狐疑。

又

細讀來書、乃知四威儀中無時間斷、不爲公冗所奪、於急流中常自猛省、殊不放逸、道心愈久愈堅固、深懷鄙懷、然世間塵勞如火熾然、何時是了、正在關中、不得忘却、竹椅蒲團上事、平昔

留心靜勝處、正要關中用、若關中不得力、却似不會在靜中做工夫一般、承有前緣、駁難今受此報之歎、獨不敢聞命、若動此念、則障道矣、古德云、隨流認得性、無喜亦無憂、淨名云、譬如高原陸地不生蓮花、卑濕淤泥乃生此花、老胡云、真如不守自性、隨緣成就一切事法、又云、隨緣赴感靡不周、而常處此菩提座、豈欺人哉、若以靜處爲是、關處爲非、則是壞世間相而求實相、離生滅而求寂滅、好靜惡鬧時、正好著力、驀然鬧裏撞翻靜時消息、其力能勝竹椅蒲團上千萬億倍、但相聽、決不相誤、又承以老龐兩句爲行住坐臥之銘箴、善不可加、若正鬧時生厭惡、則乃是自擾其心耳、若動念時、只以老龐兩句提撕、便是熱時一服清涼散也、公具決定信、是大智慧人、久做靜中工夫、方敢說這般話、於佗人分上、則不可、若向業識茫茫增上慢人前、如此說、乃是添佗惡業擔子、禪門種種病痛、已具前書、不識曾子細理會否。

又

承諭、外息諸緣、內心無喘、可以入道、是方便門、借方便門以入道、則可、守方便而不捨、則爲病、誠如來語、山野讀之、不勝歡喜踊躍之至、今諸方泰桶輩、只爲守方便而不捨、以實法指示人、以故瞎人眼不少、所以山野作辨邪正說、以救之、近世魔強法弱、以湛入合、湛爲究竟者、不可勝數、守方便不捨爲宗師者、如麻似粟、山野近嘗與禪子輩舉此兩段、正如來書所說、不差一字、非左右留心般若中、念念不間斷、則不能洞曉、從上諸聖諸異方便也、公已捉著欄柄矣、既得欄柄在手、何慮不捨方便門而入道耶、但只如此做工夫、看經教、并古人語錄種種差別言句、亦只如此做工夫、如須彌山放下著、狗子無佛性話、竹篋子話、一口吸盡西江水話、庭前柏

樹子話亦只如此做工夫更不得別生異解別求道理別作伎倆也公能向急流中時時自如此提撥道業若不成就則佛法無靈驗矣記取承夜夢焚香入山僧之室甚從容切不得作夢會須知是真入室不見舍利弗問須菩提夢中說六波羅蜜與覺時同別須菩提云此義幽深吾不能說此會有彌勒大士汝往彼問咄漏逗不少雪竇云當時若不放過隨後與一箇誰名彌勒誰是彌勒者便見冰銷瓦解咄雪竇亦漏逗不少或有人問只如曾待制夜夢入雲門之室且道與覺時同別雲門卽向佗道誰是入室者誰是爲入室者誰是作夢者誰是說夢者誰是不作夢會者誰是真入室者咄亦漏逗不少

又

來書細讀數過足見辨鐵石心立決定志不肯草草但只如此崖到臘月三十日亦能與閻家老子厮抵更休說豁開頂門眼握金剛王寶劍坐毘盧頂上也某嘗謂方外道友曰今時學道之士只求速效不知錯了也却謂無事省緣靜坐體究爲空過時光不如看幾卷經念幾聲佛佛前多禮幾拜懺悔平生所作底罪過要免閻家老子手中鐵棒此是愚人所爲而今道家者流全以妄想心想日精月華吞霞服氣尙能留形住世不被寒暑所逼況回此心此念全在般若中耶先聖明明有言喻如太末蟲處處能泊唯不能泊於火簇之上衆生亦爾處處能緣唯不能緣於般若之上苟念念不退初心把自家心識緣世間塵勞底回來抵在般若上雖今生打未徹臨命終時定不爲惡業所牽流落惡道來生出頭隨我今生願力定在般若中現成受用此是決定底事無可疑者衆生界中事不著學無始時來習得熟路頭亦熟自然取之左右

逢其原須著撥置出世間學般若心無始時來背遠乍聞知識說著自然理會不得須著立決定志與之作頭抵決不兩立此處若入得深彼處不著排遣諸魔外道自然竄伏矣生處放教熟熟處放教生政爲此也日用做工夫處捉著欄柵漸覺省力時便是得力處也

答李參政 漢老 問書附

邴近扣壽室伏蒙激發蒙滯忽有省入顧惟根識暗鈍平生學解盡落情見一取一捨如衣壞絮行草棘中適自纏繞今一笑頓釋欣幸可量非大宗匠委曲垂慈何以致此自到城中著衣喫飯抱子弄孫色色仍舊既亡拘滯之情亦不作奇特之想其餘夙習舊障亦稍輕微臨別叮嚀之語不敢忘也重念始得入門而大法未明應機接物觸事未能無礙更望有以提誨使卒有所至庶無玷於法席矣

示諭自到城中著衣喫飯抱子弄孫色色仍舊既亡拘滯之情亦不作奇特之想宿習舊障亦稍輕微三復斯語歡喜踊躍此乃學佛之驗也儻非過量大人於一笑中百了千當則不能知吾家果有不傳之妙若不爾者疑怒二字法門盡未來際終不能壞使太虛空爲雲門口草木瓦石皆放光明助說道理亦不奈何方信此段因緣不可傳不可學須是自證自悟自肯自休方始徹頭公今一笑頓亡所得夫復何言黃面老子曰不取衆生所言說一切有爲虛妄事雖復不依言語道亦復不著無言說來書所說既亡拘滯之情亦不作奇特之想暗與黃面老子所言契合卽是說者名爲佛說離是說者卽波旬說山野平昔有大誓願寧以此身代一切衆生受地獄苦終不以此口將佛法以爲人情瞎一切人眼公既到恁麼田地自知此事不從人

得但且仍舊更不須問大法明未明應機礙不礙若作是念則不仍舊矣承過夏後方可復出甚愜病僧意若更熱荒馳求不歇則不相當也前日見公歡喜之甚以故不敢說破恐傷言語今歡喜既定方敢指出此事極不容易須生慚愧始得往往利根上智者得之不費力遂生容易心便不修行多被目前境界奪將去作主宰不得日久月深迷而不返道力不能勝業力魔得其便定爲魔所攝持臨命終時亦不得力千萬記取前日之語理則頓悟乘悟併銷事非頓除因次第盡行住坐臥切不可忘了其餘古人種種差別言句皆不可以爲實然亦不可以爲虛久久純熟自然默契自本心矣不必別求殊勝奇特也昔水潦和尚於探藤處問馬祖如何是祖師西來意祖云近前來向爾道水潦纔近前馬祖攔臂一躍踞倒水潦不覺起來拍手呵呵大笑祖曰汝見箇甚麼道理便笑水潦曰百千法門無量妙義今日於一毛頭上盡底識得根源去馬祖便不管佗雪峯知鼓山緣熟一日忽然驀臂擒住曰是甚麼鼓山釋然了悟了心便亡唯微笑舉手搖曳而已雪峯曰子作道理耶鼓山復搖手曰和尙何道理之有雪峯便休去蒙山道明禪師趁盧行者至大庾嶺奪衣鉢盧公擲於石上曰此衣表信可力爭耶任公將去明舉之不動乃曰我求法非爲衣鉢也願行者開示盧公曰不思善不思惡正當恁麼時那箇是上座本來面目明當時大悟通身汗流泣淚作禮曰上來密語密意外還更有意旨否盧公曰我今爲汝說者卽非密意汝若返照自己面目密却在汝邊我若說得卽不密也以三尊宿三段因緣較公於一笑中釋然優劣何如請自斷看還更有奇特道理麼若更別有則却似不曾釋然也但知作佛莫愁佛不解語古來得道之士自己既充足推己之餘應機接物

如明鏡當臺明珠在掌胡來胡現漢來漢現非著意也若著意則有實法與人矣公欲大法明應機無滯但且仍舊不必問人久久自點頭矣臨行面稟之語請書於座右此外別無說縱有說於公分上盡成剩語矣葛藤太多姑置是事

又

那比蒙誨答備悉深旨那自有驗者三一事無逆順隨緣卽應不留習中二宿習濃厚不加排遣自爾輕微三古人公案舊所茫然時復瞥地此非自昧者前書大法未明之語蓋恐得少爲足當擴而充之豈別求勝解耶淨除現流理則不無敢不銘佩

信後益增瞻仰不識日來隨緣放曠如意自在否四威儀中不爲塵勞所勝否寤寐二邊得一如否於仍舊處無走作否於生死心不相續否但盡凡情別無聖解公旣一笑豁開正眼消息頓亡得力不得力如人飲水冷煖自知矣然日用之間當依黃面老子所言剝其正性除其助因達其現業此乃了事漢無方便中真方便無修證中真修證無取捨中真取捨也古德云皮膚脫落盡唯一真實在又如梅檀繁柯脫落盡唯真梅檀在斯達現業除助因剝正性之極致也公試思之如此說話於了事漢分上大似一柄臘月扇子恐南地寒暄不常也少不得一笑

答江給事 少明

人生一世百年光陰能有幾許公白屋起家歷盡清要此是世間第一等受福底人能知慙愧回心向道學出世間脫生死法又是世間第一等討便宜底人須是急著手脚冷却面皮不得受人差排自家理會本命元辰教去處分明便是世間出箇了事底大丈夫也承連日

去與參政道話甚善甚善，此公歇得馳求心得，言語道斷，心行處滅，差別異路，覷見古人脚手，不被古人方便文字所羅籠，山僧見渠如此，所以更不會與之說一字，恐鈍置佗，直候渠將來自要與山僧說話，方始共渠眉毛厮結，理會在，不只恁麼便休，學道人若馳求心不歇，縱與之眉毛厮結，理會何益之有，正是癡狂外邊走耳，古人云：親近善者，如霧露中行，雖不濕衣，時時有潤，但頻與參政說話，至禱至禱，不可將古人垂示言教，胡亂穿鑿，如馬大師遇讓和尚說法，云：譬牛駕車，車若不行，打車即是，打牛即是，馬師聞之，言下知歸，遮幾句兒言語，諸方多少說法，如雷如霆，如雲如雨，底理會不得，錯下名言，隨語生解，見與舟峯書尾杜撰解法，山僧讀之不覺絕倒，可與說如來禪祖師禪底一狀領過，一道行遣也，來頌子細看過，却勝得前日兩頌，自此可已之，頌來頌去，有甚了期，如參政相似，渠豈是不會做頌，何故都無一字，乃識法者懼耳，間或露一毛頭，自然抓著山僧痒處，如出山相頌云：到處逢人，驀面欺之語，可與叢林作點眼藥，公異日自見矣，不必山僧注破也，某近見公頓然改變，爲此事甚力，故作此書，不覺縷縷。

答富樞密 季中

示諭，蚤歲知信，向此道，晚年爲知解所障，未有一悟入處，欲知日夕體道方便，既荷至誠，不敢自外，據款結案，葛藤少許，只遮求悟入底，便是障道，知解了也，更別有甚麼知解爲公作障，畢竟喚甚麼作知解，知解從何而至，被障者復是阿誰，只此一句，顛倒有三，自言爲知解所障，是一，自言未悟，甘作迷人，是一，更在迷中，將心待悟，是一，只遮三顛倒，便是生死根本，直須一念不生，顛倒心絕，方知無迷，可破，無悟可待，無知解可障，如人飲水，冷煖自知，久久自然不作遮。

般見解也，但就能知知解底心上看，還障得也，無能知知解底心上，還有如許多般也，無從上大智慧之士，莫不皆以知解爲僞侶，以知解爲方便，於知解上行平等慈，於知解上作諸佛事，如龍得水，似虎靠山，終不以此爲僞，只爲佗識得知解起處，既識得起處，卽此知解便是解脫之場，便是出生死處，既是解脫之場，出生死處，則知解底當體寂滅，知解底既寂滅，能知知解者不可不寂滅，菩提涅槃真如佛性，不可不寂滅，更有何物可障，更向何處求悟入，釋迦老子曰：諸業從心生，故說心如幻，若離此分別，則滅諸有趣，僧問大珠和尚：如何是大涅槃，珠云：不造生死業，是大涅槃，僧云：如何是生死業，珠云：求大涅槃，是生死業，又古德云：學道人一念計生死，卽落魔道，一念起諸見，卽落外道，又淨名云：衆魔者樂生死，菩薩於生死而不捨，外道者樂諸見，菩薩於諸見而不動，此乃是以知解爲僞侶，以知解爲方便，於知解上行平等慈，於知解上作諸佛事，底樣子也，只爲佗了達三祇劫空，生死涅槃俱寂靜，故既未到遮箇田地，切不可被邪師輩，胡說亂道，引入鬼窟裏，閉眉合眼，作妄想，邇來祖道衰微，此流如麻似粟，真是一盲引衆盲，相牽入火坑，深可憐愍，願公硬著脊梁骨，莫作遮般去就，作遮般去就，雖暫拘得箇臭皮袋子，住便以爲究竟，而心識紛飛，猶如野馬，縱然心識暫停，如石壓草，不覺又生，欲直取無上菩提，到究竟安樂處，不亦難乎，某亦嘗爲此流所誤，後來若不遇真善知識，幾致空過一生，每每思量，直是耐耐，以故不惜口業，力救此弊，今稍有知非者，若要得截理會，須得遮一念子，曝地一破，方了得生死方名悟入，然切不可存心待破，若存心在破處，則永劫無有破時，但將妄想顛倒底心，思量分別底心，好生惡死底心，知見解會底心，欣靜厭鬧底心，一時

按下，只就按下處看箇話頭，僧問趙州，狗子還有佛性也無，州云無，此一字子，乃是摧許多惡知惡覺底器仗也，不得作有無會，不得作道理會，不得向意根下思量卜度，不得向揚眉瞬目處探根，不得向語路上作活計，不得處在無事甲裏，不得向舉起處承當，不得向文字中引證，但向十二時中，四威儀內，時時提撕，時時舉覺，狗子還有佛性也無，云無，不離日用，試如此做工夫看，月十日便自見得也，一郡千里之事，都不相妨，古人云，我這裏是活底祖師意，有甚麼物能拘執他，若離日用別有趨向，則是離波求水，離器求金，求之愈遠矣。

又

竊知日來以此大事因緣爲念，勇猛精進，純一無雜，不勝喜躍，能二六時中，熾然作爲之際，必得相應也，未寤寐二邊得一如也未，如未切不可一向沈空趣寂，古人喚作黑山下鬼家活計，盡未來際，無有透脫之期，昨接來誨，私慮左右必已耽著靜勝三昧，及詢直閣公，乃知果如所料，大凡涉世有餘之士，久膠於塵勞中，忽然得人指令，向靜默處做工夫，乍得箇中無事，便認著以爲究竟安樂，殊不知似石壓草，雖暫覺絕消息，奈何根株猶在，寧有證徹寂滅之期，要得真正寂滅現前，必須於熾然生滅之中，驀地一跳跳出，不動一絲毫，便攪長河爲酥酪，變大地作黃金，臨機縱奪，殺活自由，利他自利，無施不可，先聖喚作無盡藏陀羅尼門，無盡藏神通遊戲門，無盡藏如意解脫門，豈非真大丈夫之能事也，然亦非使然，皆吾心之常分耳，願左右快著精彩，決期於此廓徹大悟，箇中皎然如百千日月，十方世界，一念明了，無一絲毫頭異想，始得與究竟相應，果能如是，豈獨於生死路上得力，異日再秉鈞軸，登君於堯舜之上，如指諸掌耳。

又

示諭初機得少靜坐工夫，亦自佳，又云，不敢妄作靜見，黃面老子所謂，譬如有人自塞其耳，高聲大叫，求人不聞，真是自作障礙耳，若生死心未破，日用二六時中，冥冥蒙蒙地，如魂不散，底死人一般，更討甚閑工夫，理會靜理會閑耶，涅槃會上廣額屠兒，放下屠刀，便成佛，豈是做靜中工夫來，渠豈不是初機，左右見此，定以爲不然，須差排渠作古佛示現，今人無此力量，若如是見，乃不信自殊勝，甘爲下劣人也，我此門中，不論初機晚學，亦不問久參先達，若要真箇靜，須是生死心破，不著做工夫，生死心破，則自靜也，先聖所說，寂靜方便，正爲此也，自是末世邪師輩，不會先聖方便語耳，左右若信得山僧及，試向鬧處看，狗子無佛性話，未說悟不悟，正當方寸擾擾時，謾提撕舉覺看，還覺靜也無，還覺得力也無，若覺得力，便不須放捨，要靜坐時，但燒一炷香，靜坐，坐時不得令昏沈，亦不得掉舉，昏沈掉舉，先聖所訶，靜坐時，纔覺此兩種病現前，但只舉狗子無佛性話，兩種病不著用力排遣，當下怙怙地矣，日久月深，纔覺省力，便是得力處也，亦不著做靜中工夫，只遮便是工夫也，李參政，頃在泉南，初相見時，見山僧力排，默照邪禪瞎人眼，渠初不平，疑怒相半，驀聞山僧頌庭前栢樹子話，忽然打破漆桶，於一笑中，千了百當，方信山僧開口見膽，無秋毫無相欺，亦不是爭人我，便對山僧懺悔，此公現在彼，請試問之，還是也無，道謙上座已往福唐，不識已到彼否，此子參禪，喫辛苦更多，亦嘗十餘年入枯禪，近年始得箇安樂處，相見時試問渠，如何做工夫，曾爲浪子偏憐客，想必至誠吐露也。

答李參政別紙 漢老

富樞頃在三衢時嘗有書來問道因而打葛藤一上落草不少尚爾滯在默照處定是遭邪師引入鬼窟裏無疑今又得書復執靜坐爲佳其滯泥如此如何參得徑山禪今次答渠書又復縷縷葛藤不惜口業痛與剷除又不知肯回頭轉腦於日用中看話頭否先聖云寧可破戒如須彌山不可被邪師熏一邪念如芥子許在情識中如油入麪永不可出此公是也如與之相見試取答渠底葛藤一觀因而作箇方便救取此人四攝法中以同事攝爲最強左右當大啓此法門令其信入不唯省得山僧一半力亦使渠信得及肯離舊窟也

答陳少卿 季任

承諭欲留意此段大事因緣爲根性極鈍若果如此當爲左右賀也今時士大夫多於此事不能百了千當直下透脫者只爲根性太利知見太多見宗師纔開口動舌早一時會了也以故返不如鈍根者無許多惡知惡覺爲地於一機一境上一言一句下撞發便是達磨大師出頭來用盡百種神通也奈何他不得只爲他無道理可障利根者返被利根所障不能得啐地便折曝地便破假饒於聰明智解上學得於自己本分事上轉不得力所以南泉和尚云近日禪師太多竟箇癡鈍人不可得章敬和尚曰至理亡言時人不悉強習佗事以爲功能不知自性元非塵境是箇微妙大解脫門所有鑑覺不染不礙如是光明未曾休廢曩劫至今固無變易猶如日輪遠近斯照雖及衆色不與一切和合靈燭妙明非假鍛鍊爲不了故取於物象但如捏目妄起空花徒自疲勞枉經劫數若能返照無第二人舉措施爲不虧實相左右自言根鈍試如此返照看能知鈍者還鈍也無若不回光返照只守鈍根更生煩惱乃是向幻妄上重增

幻妄空花上更添空花也但相聽能知根性鈍者決定不鈍雖不得守著遮箇鈍底然亦不得捨却遮箇鈍底參取捨利鈍在人不在心此心與三世諸佛一體無二若有二則法不平等矣受教傳心俱爲虛妄求真覓實轉見參差但知得一體無二之心決定不在利鈍取捨之間則便當見月亡指直下一刀兩段若更遲疑思前算後則乃是空拳指上生實解根境法中虛捏怪於陰界中妄自因執無有了時近年以來有一種邪師說默照禪教人十二時中是事莫管休去歇去不得做聲恐落今時往往士大夫爲聰明利根所使者多是厭惡鬧處乍被邪師輩指令靜坐却見省力便以爲是更不求妙悟只以默然爲極則某不惜口業力救此弊今稍稍有知非者願公只向疑情不破處參行住坐臥不得放捨僧問趙州狗子還有佛性也無州云無遮一子便是箇破生死疑心底刀子也遮刀子欄柄只在當人手中教別人下手不得須是自家下手始得若捨得性命方肯自下手若捨性命不得且只管在疑不破處崖將去驀然自肯捨命一下便了那時方信靜時便是鬧時底鬧時便是靜時底語時便是默時底默時便是語時底不著問人亦自然不受邪師胡說亂道也至禱至禱昔朱世英嘗以書問雲庵真淨和尚云佛法至妙日用如何用心如何體究望慈悲指示真淨曰佛法至妙無二但未至於妙則互有長短苟至於妙則悟心之人如實知自心究竟本來成佛如實自在如實安樂如實解脫如實清淨而日用唯用自心自心變化把得便用莫問是之與非擬心思量早不是也不擬心一一天真一一明妙一一如蓮花不著水心清淨超於彼所以迷自心故作衆生悟自心故成佛而衆生卽佛佛卽衆生由迷悟故有彼此也如今學道人多不信自心不悟自心不得自

心明妙受用，不得自心安樂解脫，心外妄有禪道，妄立奇特，妄生取捨，縱修行，落外道二乘禪寂，斷見境界，所謂修行恐落斷常坑，其斷見者，斷滅却自心本妙明性，一向心外著空，滯禪寂，常見者不悟一切法空，執著世間諸有爲法，以爲究竟也。邪師輩教士大夫，攝心靜坐，事事莫管，休去歇去，豈不是將心休心，將心歇心，將心用心，若如此修行，如何不落外道二乘禪寂，斷見境界，如何顯得自心明妙受用，究竟安樂，如實清淨解脫，變化之妙，須是當人自見得，自悟得，自然不被古人言句轉，而能轉得古人言句，如清淨摩尼寶珠，置泥潦之中，經百千歲，亦不能染污，以本體自清淨故，此心亦然，正迷時爲塵勞所惑，而此心體本不曾惑，所謂如蓮花不著水也。忽若悟得此心本來成佛，究竟自在，如實安樂，種種妙用，亦不從外來，爲本自具足故。黃面老子曰：無有定法名阿耨多羅三藐三菩提，亦無有定法如來可說。若確定本體實有恁麼事，又却不是也，事不獲已，因迷悟取捨故，說道理有若干，爲未至於妙者，方便語耳，其實本體亦無若干，請公只恁麼用心，日用二六時中，不得執生死佛道是有，不得撥生死佛道歸無，但只看狗子還有佛性也無，趙州云：無，切不可向意根下卜度，不可向言語上作活計，又不得向開口處承當，又不得向擊石火閃電光處會，狗子還有佛性也無，無，但只如此參，亦不得將心待悟，待休歇，若將心待悟，待休歇，則轉沒交涉矣。

又

示諭自得山野向來書之後，每遇關中禪避不得處，常自點檢，而未有著力工夫，只遮禪避不得處，便是工夫了也，若更著力點檢，則又却遠矣。昔魏府老華嚴云：佛法在日用處，行住坐臥處，喫茶喫飯處，語言相問處，所作所爲處，舉心動念，又却不是也，正當禪避不得處，切忌起心動念，作點檢想，祖師云：分別不生，虛明自照，又龐居士云：日用事無別，唯吾自偶諧，頭頭非取捨，處處勿張乖，朱紫誰爲號，丘山絕點埃，神通并妙用，運水及般柴，又先聖云：但有心分別計較，自心見量者，悉皆是夢，切記取禪避不得時，不得更擬心，不擬心時，一切現成，亦不用理會利，亦不用理會鈍，總不干佗利鈍之事，亦不干佗靜亂之事，正當禪避不得時，忽然打失布袋，不覺拊掌大笑矣，記取記取，此事若用一毫毛工夫取證，則如人以手撮摩虛空，只益自勞耳，應接時但應接，要得靜坐，但靜坐，坐時不得執著坐底爲究竟，今時邪師輩，多以默照靜坐爲究竟法，疑誤後昆，山野不怕結怨，力詆之以報佛恩，救末法之弊也。

答趙待制 道夫

示諭一一備悉，佛言有心者皆得作佛，此心非世間塵勞妄想心，謂發無上大菩提心，若有是心，無不成佛者，士大夫學道多自作障難，爲無決定信故也，佛又言信爲道元功德母，長養一切諸善法，斷除疑網，出愛流，開示涅槃無上道，又云信能增長智功德，信能必到如來地，示諭鈍根未能悟徹，且種佛種子於心田，此語雖淺近，然亦深遠，但辦肯心，必不相賺，今時學道之士，往往緩處却急，急處却放緩，龐公云：一朝蛇入布衲，試問宗師，甚時節，昨日事，今日尚有記不得者，況隔陰事，豈容無忘失耶，決欲今生打教徹，不疑佛，不疑祖，不疑生，不疑死，須有決定信，具決定志，念念如救頭然，如此做將去，打未徹時，方始可說根鈍耳，若當下便自謂我根鈍，不能今生打得徹，且種佛種結緣，乃是不行欲到，無有是處，某每爲信此道者說，漸覺得日

用二六時中省力處，便是學佛得力處也。自家得力處，他人知不得，亦拈出與人看不得。虛行者，謂道明上座曰：汝若返照自己本來面目，密意盡在汝邊，是也。密意者，便是日用得力處也。得力處，便是省力處也。世間塵勞事，拈一放一，無窮無盡。四威儀內，未嘗相捨，爲無始時來，與之結得緣深故也。般若智慧，無始時來，與之結得緣淺故也。乍聞知識說著，覺得一似難會，若無始時來，塵勞緣淺，般若緣深者，有甚難會處。但深處放教淺淺處放教深，生處放教熟，熟處放教生，纔覺思量塵勞事時，不用著力排遣，只就思量處，輕輕撥轉話頭，省無限量，亦得無限量。請公只如此崖將去，莫存心等悟，忽地自悟去。參政公想日日相會，除圍碁外，還會與說著遮般事否？若只圍碁，不曾說著遮般事，只就黑白未分處，掀了盤，撒了子，却問：佗索取那一著，若索不得，是真箇鈍根漢，姑置是事。

答許司理 壽源

黃面老子曰：信爲道元功德母，長養一切諸善法。又云：信能增長智功德，信能必到如來地。欲行千里，一步爲初，十地菩薩，斷障證法門，初從十信而入，然後登法雲地，而成正覺。初歡喜地，因信而生歡喜故也。若決定堅起脊梁骨，要做世出世間沒量漢，須是箇生鐵鑄就底方了得。若半明半暗，半信半不信，決定了不得，此事無人情，不可傳授，須是自家省發，始有趣向分。若取佗人口頭，永劫無有歇時。千萬十二時中，莫令空過，逐日起來應用處，圓陀陀地與釋迦達磨無少異，自是當人見不徹，透不過，全身跳在聲色裏，却向裏許求，出頭轉沒交涉矣。此事亦不在久參知識，徧歷叢林，而後了得，而今有多少在叢林，頭白齒黃了不得底，又有多少乍

入叢林，一撥便轉千了百當底，發心有先後，悟時無先後。昔李文和都尉參石門慈照，一句下承當，便千了百當，嘗有偈呈慈照云：學道須是鐵漢，著手心頭便判，直趣無上菩提，一切是非莫管，但從脚下崖將去，死便休，不要念後思前，亦不要生煩惱，煩惱則障道也。祝祝。

又

左右具正信，立正志，此乃成佛作祖基本也。山野因以湛然名，公道號如水之湛然，不動則虛明自照，不勞心力，世間出世間法，不離湛然，無纖毫透漏，只以此印於一切處印定，無是無不是，一一解脫，一一明妙，一一實頭，用時亦湛然，不用時亦湛然，祖師云：但有心分別計較，自心見量者，悉皆是夢，若心識寂滅，無一動念處，是名正覺，覺既正，則於日用二六時中，見色聞聲，嗅香了味，覺觸知法，行住坐臥，語默動靜，無不湛然，亦自不作顛倒想，有想無想，悉皆清淨，既得清淨，動時顯湛然之用，不動時歸湛然之體，體用雖殊，而湛然則一也。如析梅檀，片片皆梅檀，今時有一種杜撰漢，自己腳跟下不實，只管教人攝心靜坐，坐教絕氣息，此輩名爲真可憐愍，請公只恁麼做工夫，山野雖然如此指示，公真不得已耳。若實有恁麼做工夫底事，卽是汚染公矣。此心無有實體，如何硬收攝得住，擬收攝向甚處安著，既無安著處，則無時無節，無古無今，無凡無聖，無得無失，無靜無亂，無生無死，亦無湛然之名，亦無湛然之體，亦無湛然之用，亦無恁麼說湛然者，亦無恁麼受湛然說者，若如是見得徹去，徑山亦不虛作此號，左右亦不虛受此號，如何如何。

答劉寶學 彥倫

卽日烝滌不審燕處悠然放曠自如無諸魔撓否日用四威儀內與狗子無佛性話一如否於動靜二邊能不分別否夢與覺合否理與事會否心與境皆如否老龐云心如境亦如無實亦無虛有亦不管無亦不拘不是聖賢了事凡夫若真箇作得箇了事凡夫釋迦達磨是甚麼泥團土塊三乘十二分教是甚麼熱盞鳴聲公既於此箇門中自信不疑不是小事要須生處放教熟熟處放教生始與此事少分相應耳往往士大夫多於不意中得箇瞥地處却於如意中打失了不可不使公知在如意中須時時以不如意中時節在念切不可暫忘也但得本莫愁末但知作佛莫愁佛不解語遮一著子得易守難切不可忽須教頭正尾正擴而充之然後推己之餘以及物左右所得既不滯在一隅想於日用中不著起心管帶枯心忘懷也近年已來禪道佛法衰弊之甚有般杜撰長老根本自無所悟業識茫茫無本可據無實頭伎倆收攝學者教一切人如渠相似黑漆漆地緊閉却眼喚作默而常照彥沖被此輩教壞了苦哉苦哉遮箇話若不是左右悟得狗子無佛性徑山亦無說處千萬掙下面皮痛與手段救取這箇人至懇至禱然有一事亦不可不知此公清淨自居世味澹薄積有年矣定執此爲奇特若欲救之當與之同事令其歡喜心不生疑庶幾信得及肯轉頭來淨名所謂先以欲鉤牽後令入佛智是也黃面老子云觀法先後以智分別是非審定不違法印次第建立無邊行門令諸衆生斷一切疑此乃爲物作則萬世楷模也況此公根性與左右迥不同生天定在靈運前成佛定在靈運後者也此公決定不可以智慧攝當隨所好攝以日月磨之恐自知非忽然肯捨亦不可定若肯轉頭來却是箇有力量底漢左右亦須退步讓渠出一頭始得比時禪歸錄得渠答紫

巖老子一書山僧隨喜讀一徧讚歎歡喜累日直是好一段文章又似一篇大義末後與之下箇謹對不識左右以謂如何昔達磨謂二祖曰汝但外息諸緣內心無喘心如牆壁可以入道二祖種種說心說性俱不契一日忽然省得達磨所示要門遂白達磨曰弟子此回始息諸緣也達磨知其已悟更不窮詰只曰莫成斷滅去否曰無達磨曰子作麼生曰了了常知故言之不可及達磨曰此乃從上諸佛諸祖所傳心體汝今既得更勿疑也彥沖云夜夢盡思十年之間未能全克或端坐靜默一空其心使慮無所緣事無所託頗覺輕安讀至此不覺失笑何故既慮無所緣豈非達磨所謂內心無喘乎事無所託豈非達磨所謂外息諸緣乎二祖初不識達磨所示方便將謂外息諸緣內心無喘可以說心說性說道說理引文字證據欲求印可所以達磨一一列下無處用心方始退步思量心如牆壁之語非達磨實法忽然於牆壁上頓息諸緣卽時見月亡指便道了了常知故言之不可及此語亦是臨時被達磨拶出底消息亦非二祖實法也杜撰長老輩既自無所證便逐旋捏合雖教他人歇渠自心火熾熾晝夜不停如欠二稅百姓相似彥沖却無許多勞攘只是中得毒深只管外邊亂走說動說靜說語說默說得說失更引周易內典硬差排和會真是爲佗閑事長無明殊不思量一段生死公案未曾結絕臘月三十日作麼生折合去不可眼光欲落未落時且向闍家老子道待我澄神定慮少時却去相見得麼當此之時縱橫無礙之說亦使不著心如木石亦使不著須是當人生死心破始得若得生死心破更說甚麼澄神定慮更說甚麼縱橫放蕩更說甚麼內典外典一了一切了了一悟一切悟一證一切證如斬一結絲一斬一時斷證無邊法門亦然更無次第左右既悟

狗子無佛性話，還得如此也未？若未得如此，直須到恁麼田地始得。若已到恁麼田地，當以此法門興起大悲心，於逆順境中，和泥合水，不惜身命，不怕口業，拯拔一切，以報佛恩，方是大丈夫所爲。若不如是，無有是處。彥沖引孔子稱易之爲道也，屢遷和會佛書中，應無所住而生其心，爲一貫。又引寂然不動，與土木無殊，此尤可笑也。向渠道欲得不招無間業，莫謗如來正法輪，故經云：不應住色生心，不應住聲香味觸法生心，謂此廣大寂滅妙心，不可以色見聲求，應無所住，謂此心無實體也。而生其心，謂此心非離真而立處，立處卽真也。孔子稱易之爲道也，屢遷，非謂此也。屢者，若也。遷者，革也。吉凶悔吝，生乎動，屢遷之旨，返常合道也。如何與應無所住而生其心，合得成一塊？彥沖非但不識佛意，亦不識孔子意。左右於孔子之教，出沒如游園觀，又於吾教深入闢域，山野如此，杜撰還是也。無故圭峯云：元亨利貞，乾之德也。始於一氣，常樂我淨，佛之德也。本乎一心，專一氣而致柔修，一心而成道。此老如此和會，始於儒釋二教，無偏枯無遺恨。彥沖以應無所住而生其心，與易之屢遷，大旨同貫，未敢相許。若依彥沖差排，則孔子與釋迦老子，殺著買草鞋始得，何故一人屢遷，一人無所住？想讀至此，必絕倒也。

答劉通判 彥沖

令兄寶學公，初未嘗知管帶忘懷之事，信手摸著鼻孔，雖未盡識得諸方邪正，而基本堅實，邪毒不能侵，忘懷管帶在其中矣。若一向忘懷管帶，生死心不破，陰魔得其便，未免把虛空，隔截作兩處。處靜時受無量樂，處鬧時受無量苦，要得苦樂均平，但莫起心管帶，將心忘懷。十二時中，放教蕩蕩地，忽爾舊習瞥起，亦不著用心按捺，只就瞥起處看箇話頭。狗子還有佛性也無？

無，正恁麼時，如紅爐上一點雪，相似。眼辨手親者，一連連得，方知癩融道，恰恰用心時，恰恰無心用。曲談名相，勞直說無繁重，無心恰恰用，常用恰恰無。今說無心處，不與有心殊，不是誑人語。昔婆修盤頭，常一食不臥，六時禮佛，清淨無欲，爲衆所歸。二十祖闍夜多，將欲度之，問其徒曰：此徧行頭陀，能修梵行，可得佛道乎？其徒曰：我師精進如此，何故不可？闍夜多曰：汝師與道遠矣。設苦行歷於塵劫，皆虛妄之本也。其徒不憤，皆作色厲聲，謂闍夜多曰：尊者蘊何德行，而譏我師？闍夜多曰：我不求道，亦不顛倒，我不禮佛，亦不輕慢，我不長坐，亦不懈怠，我不一食，亦不雜食，我不知足，亦不貪欲，心無所希，名之曰道。婆修聞已，發無漏智，所謂先以定動，後以智拔也。杜撰長老輩，教左右靜坐等作佛，豈非虛妄之本乎？又言靜處無失，鬧處有失，豈非壞世間相，而求實相乎？若如此修行，如何契得癩融所謂今說無心處，不與有心殊。請公於此，諦當思量看。婆修初亦將謂長坐不臥，可以成佛。纔被闍夜多點破，便於言下知歸，發無漏智，真是良馬見鞭影而行也。衆生狂亂是病，佛以寂靜波羅蜜藥治之，病去藥存，其病愈甚，拈一放一，何時是了，生死到來，靜鬧兩邊，都用一點不得。莫道鬧處失者多，靜處失者少，不如少與多得，與失靜與鬧，縛作一束，送放他方世界，却好就日用非多非少，非靜非鬧，非得非失處，略提撕看，是箇甚麼，無常迅速，百歲光陰，一彈指頃，便過也。更有甚麼閑工夫，理會得理會失，理會靜理會鬧，理會多理會少，理會會忘懷，理會管帶石頭和尚云：謹白參玄人，光陰莫虛度，遮一句子，開眼也著，合眼也著，忘懷也著，管帶也著，狂亂也著，寂靜也著，此是徑山如此差排，想杜撰長老輩，別有差排處也，咄，且置是事。

又

左右做靜勝工夫積有年矣，不識於開眼應物處，得心地安閑否？若未得安閑，是靜勝工夫未得力也。若許久猶未得力，當求箇徑截得力處，方始不孤負平昔許多工夫也。平昔做靜勝工夫，只爲要支遣箇闌底，正闌時却被闌底聒擾自家方寸，却似平昔不曾做靜勝工夫一般耳。遮箇道理只爲太近，遠不出自家眼睛裏，開眼便刺著，合眼處亦不缺少，開口便道著，合口處亦自現成，擬欲起心動念，承當渠早已蹉過十萬八千了也。直是無備用心處，遮箇最是省力。而今學此道者，多是要用力求，求之轉失，向之愈背，那堪墮在得失解路上，謂闌處失者多，靜處失者少，左右在靜勝處，住了二十餘年，試將些子得力底來看，則箇若將椿椿地底做靜中得力處，何故却向闌處失却？而今要得省力靜闌一如，但只透取趙州無字，忽然透得，方知靜闌兩不相妨，亦不著用力支撐，亦不作無支撐解矣。

答秦國太夫人

謙禪歸，領所賜教，并親書數頌，初亦甚疑之，及詢謙子細，方知不自欺，曠劫未明之事，豁爾現前，不從人得，始知法喜禪悅之樂，非世間之樂可比。山野爲國太歡喜，累日寢食俱忘，兒子作宰相，身作國夫人，未足爲貴，糞堆堆頭，收得無價之寶，百劫千生，受用不盡，方始爲真貴耳。然切不得執著此貴，若執著則墮在尊貴中，不復興悲起智，憐愍有情耳。記取記取。

答張丞相 德遠

恭惟燕居阿練若，與彼上人同會一處，娛戲毗盧藏海，隨宜作佛事，少病少惱，鈞候動止萬福。

從上諸聖，莫不皆然，所謂於念念中，入一切法，滅盡三昧，不退菩薩道，不捨菩薩事，不捨大慈悲心，修習波羅蜜，未嘗休息，觀察一切佛國土，無有厭倦，不捨度衆生願，不斷轉法輪事，不廢教化衆生業，乃至所有勝願，皆得圓滿，了知一切國土差別，入佛種性，到於彼岸，此大丈夫四威儀中，受用家事耳。大居士於此力行無倦，而妙喜於此，亦作普州人，又不識還許外人插手，否？聞到長沙，卽杜口毗耶，深入不二，此亦非分外法，如是故，願居士如是受用，則諸魔外道，定來作護法善神也。其餘種種差別異旨，皆自心現量境界，亦非他物也。不識居士，以爲如何。

答張提刑 曠叔

老居士所作所爲，冥與道合，但未能得因地一下耳。若日用應緣，不失故步，雖未得因地一下，臘月三十日，閻家老子，亦須拱手歸降，況一念相應耶？妙喜老漢，雖未目擊，觀其行事，小大折中，無過不及，只此便是道所合處。到遮裏，不用作塵勞想，亦不用作佛想法，佛法塵勞都是外事，然亦不得作外事想，但回光返照，作如是想者，從甚麼處得來？所作所爲時，有何形段？所作既辨，隨我心意，無不周旋，無有少剩，正當恁麼時，承誰恩力？如此做工夫，日久月深，如人學射，自然中的矣。衆生顛倒，迷已逐物，耽少欲味，甘心受無量苦，逐日未開眼時，未下牀時，半惺半覺時，心識已紛飛，隨妄想流蕩矣。作善作惡，雖未發露，未下牀時，天堂地獄，在方寸中，已一時成就矣。及待發時，已落在第八佛不云乎？一切諸根，自心現，器身等藏，自妄想相，施設顯示，如河流，如種子，如燈，如風，如雲，利那展轉壞，躁動如猿猴，樂不淨處，如飛蠅，無厭足，如風火，無始虛僞習氣，因如汲水輪等事，於此識得破，便喚作無人無我智，天堂地獄，不在別處，只在當人

半惺半覺未下牀時方寸中並不從外來發未發覺未覺時切須照顧照顧時亦不得與之用
力爭爭著則費力矣祖不云乎止動歸止止更彌動纔覺日用塵勞中漸漸省力時便是當人
得力之處便是當人成佛作祖之處便是當人變地獄作天堂之處便是當人穩坐之處便是
當人出生死之處便是當人致君於堯舜之上之處便是當人起疲氓於凋瘵之際之處便是
當人覆蔭子孫之處到遮裏說佛說祖說心說性說玄說妙說理說事說好說惡亦是外邊事
如此等事尚屬外矣況更作塵勞中先聖所訶之事耶作好事尚不肯豈肯作不好事耶若信
得此說及永嘉所謂行亦禪坐亦禪語默動靜體安然不是虛語請依此行履始終不變易則
雖未徹證自己本地風光雖未明見自己本來面目生處已熟熟處已生矣切切記取纔覺省
力處便是得力處也妙喜老漢每與箇中人說此話往往見說得頻了多忽之不肯將爲事居
士試如此做工夫看只十餘日便自見得省力不省力得力不得力矣如人飲水冷暖自知說
與人不得呈似人不得先德云語證則不可示人說理則非證不了自證自得自信自悟處除
會證會得已信已悟者方默默相契未證未得未信未悟者不唯自不信亦不信他人有如此
境界老居士天資近道現定所作所爲不著更易以佗人較之萬分中已省得九千九百九十
九分只缺噴地一發便了士大夫學道多不著實理會除却口議心思便茫然無所措手足不
信無措手足處正是好處只管心裏要思量得到口裏要說得分曉殊不知錯了也佛言如來
以一切譬喻說種種事無有譬喻能說此法何以故心智路絕不思議故信知思量分別障道
必矣若得前後際斷心智路自絕矣若得心智路絕說種種事皆此法也此法既明卽此明處

便是不思議大解脫境界只此境界亦不可思議境界既不可思議一切譬喻亦不可思議種
種事亦不可思議只遮不可思議底亦不可思議此語亦無著處只遮無著處底亦不可思議
如是展轉窮詰若事若法若譬喻若境界如環之無端無起處無盡處皆不可思議之法也所
以云菩薩住是不思議於中思議不可盡入此不可思議處思與非思皆寂滅然亦不得住在
寂滅處若住在寂滅處則被法界量之所管攝教中謂之法塵煩惱滅却法界量種種殊勝一
時蕩盡了方始好看庭前栢樹子麻三斤乾屎橛狗子無佛性一口吸盡西江水東山水上行
之類忽然一句下透得方始謂之法界無量回向如實而行如實而用便能於一毛
端現寶王刹坐微塵裏轉大法輪成就種種法破壞種種法一切由我如壯士展臂不借佗力
師子游行不求伴侶種種勝妙境界現前心不驚異種種惡業境界現前心不怕怖日用四威
儀中隨緣放曠任性逍遙到得遮箇田地方可說無天堂無地獄等事永嘉云亦無人亦無佛
大千沙界海中漚一切聖賢如電拂此老若不到遮箇田地如何說得出來此語錯會者甚多
苟未徹根源不免依語生解便道一切皆無撥無因果將諸佛諸祖所說言教盡以爲虛謂之
誑惑人此病不除乃莽莽蕩蕩招殃禍者也佛言虛妄浮心多諸巧見若不著有便著無若不
著此二種便於有無之間博量卜度縱識得此病定在非有非無處著到故先聖苦口叮嚀令
離四句絕百非直下一刀兩段更不念後思前坐斷千聖頂額四句者乃有無非有非無亦有
亦無是也若透得此四句了見說一切諸法實有我亦隨順與之說有且不被此實有所礙見
說一切諸法實無我亦隨順與之說無且非世間虛豁之無見說一切諸法亦有亦無我亦隨

順與之說亦有亦無，且非戲論。見說一切諸法非有非無，我亦隨順與之說，非有非無，且非相違。淨名云：外道六師所墮，汝亦隨墮，是也。士大夫學道，多不肯虛却心，聽善知識指示，善知識纔開口，渠已在言前。一時領會了也，及至教渠吐露盡，一時錯會，正好在言前領略底，又却滯在言語上，又有一種一向作聰明，說道理，世間種種事藝，我無不會者，只有禪一般，我未曾在當官處，呼幾枚杜撰長老來，與一頓飯喫却了，教渠恣意亂說，便將心意識記取，遮杜撰說底，却去勸人一句來，一句去，謂之厮禪。末後我多一句，備無語時，便是我得便宜了也，及至撞著箇真實明眼漢，又却不識，縱然識得，又無決定信，不肯四楞塌地放下，就師家理會，依舊要求印可，及至師家於逆順境中，示以本分鉗鎚，又怕懼不敢親近，此等名爲可憐愍者。老居士妙年登高第起家，所在之處，隨時作利益事，文章事業皆過人，而未嘗自矜一心一意，只要退步著實理會。此段大事因緣，見其至誠，不覺切怛如許，非獨要居士識得遮般病痛，亦作勸發初心菩薩，入道之資糧也。

答汪內翰 彥章

承杜門壁觀，此息心良藥也。若更鑽故紙，定引起藏識中無始時來生死根苗，作善根難，作障道難，無疑得息心，且息心已過去底事，或善或惡，或逆或順，都莫思量。現在事得省便省，一刀兩段不要遲疑。未來事自然不相續矣。釋迦老子云：心不妄取，過去法亦不貪著。未來事不於現在有所住，了達三世悉空寂，但看僧問趙州狗子還有佛性也無，州云：無。請只把閑思量底心，回在無字上，試思量看，忽然向思量不及處，得遮一念破，便是了達三世處也。了達時安排

不得計較，不得引證，不得何以故，了達處不容安排，不容計較，不容引證，縱然引證得計較得，安排得與了達底了沒交涉，但放教蕩蕩地，善惡都莫思量，亦莫著意，亦莫忘懷，著意則流蕩，忘懷則昏沈，不著意，不忘懷，善不是善，惡不是惡，若如此了達，生死魔何處摸摸，一箇汪彥章，聲名滿天下，平生安排得計較得，引證得底，是文章，是名譽，是官職，晚年收因結果處，那箇是實，做了無限之乎者也，那一句得力，名譽既彰，與匿德藏光者，相去幾何，官職已做，到大兩制，與作秀才時，相去多少，而今已近七十歲，儘公伎倆，待要如何，臘月三十日，作廢生折合去，無常殺鬼，念念不停，雪峯真覺云：光陰倏忽，暫須臾，浮世那能得久居，出嶺年登三十二，入關早是四旬餘，佗非不用頻頻舉，已過還須旋旋除，爲報滿城朱紫道，閻王不怕佩金魚，古人苦口叮嚀，爲甚麼事，世間愚庸之人，飢寒所迫，日用無佗念，只得身上稍煖，肚裏不飢便了，只是遮兩事，生死魔却不能爲惱，以受富貴者較之，輕重大不等，受富貴底，身上既常煖，肚裏又常飽，既不被遮兩事所迫，又却多一件不可說底無狀，以故常在生死魔網中，無由出離，除宿有靈骨，方見得徹，識得破，先聖云：瞥起是病，不續是藥，不怕念起，唯恐覺遲，佛者覺也，爲其常覺，故謂之大覺，亦謂之覺王，然皆從凡夫中做得出來，彼既丈夫，我寧不爾，百年光景，能得幾時，念念如救頭然，做好事尚恐做不辨，況念念在塵勞中而不覺也，可畏，可畏，近收呂居仁四月初書，報曾叔夏劉彥禮死，居仁云：交游中時復抽了一兩人，直是可畏，渠邇來爲此事甚切，亦以瞥地回頭稍遲，爲恨，比已作書答之云：只以末後知非底一念爲正，不問遲速也，知非底一念，便是成佛作祖底基本，破魔網底利器，出生死底路頭也，願公亦只如此做工夫，做得工夫漸

熟則日用二六時中，便覺省力矣。覺得省力時，不要放緩，只就省力處，崖將去，崖來崖去，和遮省力處，亦不知有時，不爭多也，但只看箇無字，莫管得不得，至禱至禱。

又

伏承杜門息交，世事一切闕略，唯朝夕以某向所舉話頭提撕，甚善甚善，既辨此心，當以悟爲則。若自生退屈，謂根性陋劣，更求入頭處，正是舍元殿裏問長安在甚處爾。正提撕時，是阿誰能知根性陋劣底？又是阿誰求入頭處底？又是阿誰妙喜不避口業，分明爲居士說破？只是箇汪彥章，更無兩箇，只有一箇汪彥章，更那裏得箇提撕底？知根性陋劣底，求入頭處底，來當知皆是汪彥章影子，並不干佗汪彥章事。若是真箇汪彥章，根性必不陋劣，必不求入頭處，但只信得自家主人公及，並不消得許多勞攘。昔有僧問仰山禪宗頓悟，畢竟入門的意如何？山曰：此意極難，若是祖宗門下，上根上智，一聞千悟，得大總持，此根人難得，其有根微智劣，所以古德道：若不安禪靜慮，到遮裏總須茫然。僧曰：除此格外，還別有方便令學人得入也？無。山曰：別有別無，令汝心不安，我今問汝，汝是甚處人？曰：幽州人。山曰：汝還思彼處否？曰：常思。山曰：彼處樓臺林苑，人馬駢闐，汝返思思底，還有許多般也？無。曰：某甲到遮裏，一切不見有。山曰：汝解猶在境，信位即是，人位即不是，妙喜已是老婆心切，須著更下箇注脚。人位即是汪彥章，信位即是知根性陋劣，求入頭處底。若於正提撕話頭時，返思能提撕底，還是汪彥章否？到遮裏間不容髮，若佇思停機，則被影子惑矣。請快著精彩，不可忽，不可忽，記得前書中嘗寫去得，息心且息心，已過去底事，或善或惡，或逆或順，都莫理會，現在事得省便省，一刀兩段，不要遲疑，未來

事自然不相續矣，不識曾如此覷捕否？遮箇便是第一省力做工夫處也，至禱至禱。

又

伏承第五合嗣以疾不起，父子之情，千生百劫，恩愛習氣之所流注，想當此境界，無有是處。五濁世中，種種虛幻，無一真實，請行住坐臥，常作是觀，則日久月深，漸漸銷磨矣。然正煩惱時，子細揣摩窮詰，從甚麼處起？若窮起處，不得現今煩惱底，却從甚麼處得來？正煩惱時，是有是無？是虛是實？窮來窮去，心無所之，要思量，但思量要哭，但哭來哭去，思量來思量去，抖擻得藏識中許多恩愛習氣盡時，自然如冰歸水，還我箇本來無煩惱，無思量，無憂無喜底去耳。入得世間出世無餘，世間法則佛法，佛法則世間法也。父子天性一而已，若子喪而父不煩惱，不思量，如父喪而子不煩惱，不思量，還得也無？若硬止遏哭時，又不敢哭，思量時，又不敢思量，是特欲逆天理，滅天性，揚聲止響，潑油救火耳。正當煩惱時，總不是外事，且不得作外邊想。永嘉云：無明實性即佛性，幻化空身即法身，是真語實語，不誑不忘等語，恁麼見得了，要思量，要煩惱，亦不可得，作是觀者，名爲正觀，若佗觀者，名爲邪觀，邪正未分，正好著力，此是妙喜決定義，無智人前莫說。

大慧普覺禪師書上終

大慧普覺禪師書下

參學 慧然錄

答夏運使

示論道契則霄壤共處，趣異則覲面楚越，誠哉是言，卽此乃不傳之妙。左右發意欲作妙喜書，未操觚拂紙，已兩手分付了也。又何待堅忍究竟以俟佗日耶？此箇道理唯證者方默默相契，難與俗子言。延平乃閩嶺佳處，左右能自調伏，不爲逆順。揅子所轉，便是大解脫人。此人能轉一切關揅子，日用活潑潑地，拘牽惹絆，佗不得，苟若直下便恁麼承當，自然無一毫毛於我作障。古德有言，佛說一切法爲度一切心，我無一切心，何用一切法。又懶融云，恰恰用心時，恰恰無心用，曲談名相勞，直說無繁重，無心恰恰用，常用恰恰無。今說無心處，不與有心殊，非特懶融如是，妙喜與左右亦在其中。其中事難拈出似人，前所謂默默相契是也。

答呂舍人 居仁

千疑萬疑只是一疑，話頭上疑破，則千疑萬疑一時破。話頭不破，則且就上與之厮崖。若棄了話頭，却去別文字上起疑，經教上起疑，古人公案上起疑，日用塵勞中起疑，皆是邪魔眷屬。第一不得向舉起處承當，又不得思量卜度，但著意就不可思量處思量，心無所之，老鼠入牛角，便見倒斷也。又方寸若闌，但只舉狗子無佛性話，佛語祖語，諸方老宿語，千差萬別，若透得

箇無字，一時透過，不著問人，若一向問人佛語又如何，祖語又如何，諸方老宿語又如何，永劫無有悟時也。

答呂郎中 陸禮

令兄居仁，兩得書，爲此事甚忙，然亦當著忙。年已六十，從官又做了，更待如何？若不早著忙，臘月三十日，如何打疊得辦。聞左右邇來亦忙，只遮著忙底，便是臘月三十日消息也。如何是佛乾屎橛，遮裏不透，與臘月三十日何異？指大家，一生鑽故紙，是事要知，博覽群書，高談闊論，孔子又如何，孟子又如何，莊子又如何，周易又如何，古今治亂又如何，被遮些言語使得來，七顛八倒，諸子百家纔聞人舉著一字，便成卷念將去，以一事不知無恥，及乎問著佗自家屋裏事，並無一人知者，可謂終日數佗寶，自無半錢分。空來世上打一遭，脫却遮殼漏子，上天堂也不知，入地獄也不知，隨其業力，流入諸趣，並不知若是別人家裏事，細大無有不知者。士大夫讀得書多，底無明多，讀得書少，底無明少，做得官小，底人我小，做得官大，底人我大，自道我聰明靈利，及乎臨秋毫利害聰明，也不見靈利，也不見平生所讀底書，一字也使不著。蓋從上大人丘乙巳時，便錯了也，只欲取富貴耳，取得富貴底，又能有幾人肯回頭轉腦，向自己腳跟下推窮，我遮取富貴底，從何處來，卽今受富貴底，異日却向何處去，既不知來處，又不知去處，便覺心頭迷悶，正迷悶時，亦非佗物，只就遮裏看箇話頭，僧問雲門，如何是佛，門云，乾屎橛，但舉此話，忽然伎倆盡時，便悟也。切忌尋文字引證，胡亂博量注解，縱然注解得，分明說得有下落，盡是鬼家活計，疑情不破，生死交加，疑情若破，則生死心絕矣。生死心絕，則佛見法見亡矣。佛見

法見尙亡，況復更起衆生煩惱見耶？但將迷悶底心，移來乾屎橛上，一抵抵住，怖生死底心，迷悶底心，思量分別底心，作聰明底心，自然不行也。覺得不行時，莫怕落空，忽然向抵住處絕消息，不勝慶快平生得消息絕了，起佛見法見衆生見，思量分別，作聰明，說道理，都不相妨。日用四威儀中，但常放教蕩蕩地，靜處鬧處，常以乾屎橛提撕，日往月來，水牯牛自純熟矣。第一不得向外面別起疑也。乾屎橛上疑破，則恒河沙數疑，一時破矣。前此亦嘗如此寫與居仁，比趙景明來得書，書中再來問云：不知離此別有下工夫處也無？又如舉手動足著衣喫飯，當如何體究爲復？只看話頭爲復？別有體究，又平生一大疑事，至今未了，只如死後斷滅不斷滅，如何決定見得，又不要引經論所說，不要指古人公案，只據目前直截分明，指示剖判斷滅不斷滅，實處觀渠如此說話，返不如三家村裏省事漢，却無如許多糞壤死也，死得瞥脫，分明向佗道：千疑萬疑只是一疑，話頭上疑破，則千疑萬疑一時破，話頭不破，則且就話頭上與之厮崖，若棄了話頭，却去別文字上起疑，經教上起疑，古人公案上起疑，日用塵勞中起疑，皆是邪魔眷屬，又不得向舉起處承當，又不得思量卜度，但只著意，就不可思量處思量，心無所之，老鼠入牛角，便見倒斷也。寫得如此分曉了，又却更來切切怛怛地問：不知許多聰明知見，向甚處去也？不信道，平生讀底書，到遮裏一字也使不著，而今不得已，更爲佗放些惡氣息，若只恁麼休去，却是妙喜被渠問了，更答不得也。此書纔到，便送與渠一看，居仁自言：行年六十歲，此事未了，問渠未了底爲復是舉手動足著衣喫飯底未了，若是舉手動足著衣喫飯底，又要如何了？佗殊不知只遮欲了知決定見得死後斷滅不斷滅底，便是閻家老子面前喫鐵棒底，此疑不

破，流浪生死，未有了期，向渠道，千疑萬疑只是一疑，話頭若破，死後斷滅不斷滅之疑，當下冰銷瓦解矣。更教直截分明，指示剖判斷滅不斷滅，如此見識，與外道何異？平生做許多之乎者也，要作何用？渠既許多遠地，放遮般惡氣息來熏人，妙喜不可只恁麼休去，亦放些惡氣息，却去熏佗，則箇渠教不要引經教及古人公案，只據目前直截分明，指示斷滅不斷滅實處，普志道禪師問六祖，學人自出家，覽涅槃經近十餘載，未明大意，願師垂誨，祖曰：汝何處未了？對曰：諸行無常，是生滅法，生滅滅已，寂滅爲樂，於此疑惑。祖曰：汝作麼生疑？對曰：一切衆生皆有二身，謂色身法身也。此乃居仁同道。色身無常，有生有滅，法身有常，無知無覺，經云：生滅滅已，寂滅爲樂者，未審是何身寂滅？何身受樂？若色身者，色身滅時，四大分散，全是苦苦，不可言樂。若法身寂滅，卽同草木瓦石，誰當受樂？又法性是生滅之體，五蘊是生滅之用，一體五用，生滅是常，生則從體起用，滅則攝用歸體，若聽更生，卽有情之類，不斷不滅，若不聽更生，卽永歸寂滅，同於無情之物，如是則一切諸法，被涅槃之所禁伏，尙不得生，何樂之有？可與居仁同道。祖師到遮裏，不能臨濟德山用事，遂放些氣息還佗云：汝是釋子，何習外道斷常邪見，而議最上乘法？據汝所解，卽色身外別有法身，離生滅，求於寂滅，又推涅槃常樂，言有身受者，斯乃執客生死，耽著世樂，汝今當知，佛爲一切迷人，認五蘊和合爲自體相，分別一切法，爲外塵相，好生惡死，念念遷流，不知夢幻虛假，枉受輪回，以常樂涅槃，翻爲苦相，終日馳求佛愍，此故乃示涅槃真樂，利那無有生相，利那無有滅相，更無生滅可滅。到此請著眼睛。是則寂滅現前，當現前時，亦無現前之量，乃謂常樂，此樂無有受者，亦無有不受者。猶較子。豈有一體五用之名，何況更言涅槃禁伏諸法令永

不生此乃誘佛毀法居仁亦有聽吾偈曰不分疎無上大涅槃圓明常寂照凡愚謂之死外道執為斷諸求二乘人目以為無作盡屬情所計六十二見本妄立虛假名何為真實義居仁要見此句唯有過量人未見通達無取捨居仁更疑以知五蘊法及以蘊中我居仁在處許外現衆色像花莫眼一音聲相兼殺平等如夢幻教得不起凡聖見不作涅槃解亦未見二邊三際斷常應諸根用而不起用想分別一切法不起分別想劫火燒海底風鼓山相擊真常寂滅樂其涅槃相如是吾今強言說令汝捨邪見只是居仁不肯捨汝勿隨言解居仁記取許汝知少分也不消得志道聞偈忽然大悟葛藤不少只遮一絡索便是直截分明指示居仁底指頭子也居仁見此若道猶是經論所說尚指古人公案若尚作如此見入地獄如箭射

答呂舍人 居仁

承日用不輟做工夫工夫熟則撞發關楔子矣所謂工夫者思量世間塵勞底心回在乾屎橛上令情識不行如土木偶人相似覺得昏但沒巴鼻可把捉時便是好消息也莫怕落空亦莫思量前後幾時得悟若存此心便落邪道佛云是法非思量分別之所能解解著即禍生知得思量分別不能解者是誰只是箇呂居仁更不得回頭轉腦也前此答隆禮書說盡禪病矣諸佛諸祖並無一法與人只要當人自信自肯自見自悟耳若只取佗人口頭說底恐誤人此事決定離言說相離心緣相離文字相能知離諸相者亦只是呂居仁疑佗死後斷滅不斷滅亦只是呂居仁求直截指示者亦只是呂居仁日用二六時中或瞋或喜或思量或分別或昏沈或掉舉皆只是呂居仁只遮呂居仁能作種種奇特變化能與諸佛諸祖同游寂滅大解脫光

明海中成就世間出世間事只是呂居仁信不及耳若信得及請依此注脚入是三昧忽然從三昧起失却孃生鼻孔便是徹頭也

又

令弟子育經由出所賜教讀之喜慰可知無常迅速百歲光陰如電閃便是收因結果底時節到來也乾屎橛如何覺得沒巴鼻無滋味肚裏悶時便是好底消息也第一不得向舉起處承當又不得颺在無事甲裏不可舉時便有不舉時便無也但將思量世間塵勞底心回在乾屎橛上思量來思量去無處奈何伎倆忽然盡便自悟也不得將心等悟若將心等悟永劫不能得悟也前此答隆禮書說盡措大家病痛矣承只置在座右若依此做工夫雖未悟徹亦能分別邪正不為邪魔所障亦種得般若種子深縱今生不了來生出頭現成受用亦不費力亦不被惡業奪將去臨命終時亦能轉業況一念相應耶逐日千萬不要思量別事但只思量乾屎橛莫問幾時悟至禱至禱悟時亦無時節亦不驚群動衆即時怙怙地自然不疑佛不疑祖不疑生不疑死得到不疑之地便是佛地也佛地上本無疑無悟無迷無生無死無有無無無涅槃無般若無佛無衆生亦無恁麼說者此語亦不受亦無不受者亦無知不受者亦無恁麼說不受者居仁如是信得及佛亦只如是祖亦只如是悟亦只如是迷亦只如是疑亦只如是生亦只如是死亦只如是日用塵勞中亦只如是死後斷滅不斷滅亦只如是編管在衡州亦只如是居仁還信得及麼信得及亦只如是信不及亦只如是畢竟如何如是如是亦只如是

左右妙年自立，便在一個人頂額上，不爲富貴所籠羅，非百劫千生願力所持，焉能致是？又能切切於此一大事，念念不退轉，有決定信，具決定志，此豈淺丈夫所能？老瞿曇云：唯此工事實，餘二則非真。請著鞭，不可忽。世間事只遮是，先聖豈不云乎？朝聞道夕死可矣。不知到底是何道，到遮裏豈容眨眼，不可更引吾道一以貫之去也。須自信自悟，說得底終是無憑據，自見得自悟得，自信得及了，說不得，形容不出，却不妨，只怕說得似形容得似，却不見，却不悟者，老瞿曇指爲增上慢人，亦謂之誘般若人，亦謂之大妄語人，亦謂之斷佛慧命人，千佛出世，不通懺悔，若透得狗子無佛性話，遮般說話，却成妄語矣。而今不可便作妄語會，呂居仁比連收兩書，書中皆云：夏中答隆禮書，常置座右，以得爲期，又聞嘗錄呈左右，近世貴公子似渠者，如優曇鉢花時一現耳，頃在山頭，每與公說遮般話，見公眼目定動，領覽得九分九釐，只欠箇地一下，爾若得箇地一下了，儒卽釋，釋卽儒，僧卽俗，俗卽僧，凡卽聖，聖卽凡，我卽爾，爾卽我，天卽地，地卽天，波卽水，水卽波，酥酪醍醐攪成一味，餅盤釵釧鎔成一金，在我不在人，得到遮箇田地，由我指揮，所謂我爲法王，於法自在，得失是非，焉有罣礙，不是強爲法如是故也。此箇境界，除無垢老子，他人如何信得及，縱信得及，如何得入手，左右已信得及，已覷得見，已能分別，是邪是正，但未得入手耳，得入手時，不分老少，不在智愚，如將梵位直授凡庸，更無階級次第，永嘉所謂一超直入如來地是也，但相聽決不相誤。

又

某萬緣休罷，日用只如此，無煩軫念，左右分上，欠少箇甚麼，在世界上，可謂千足萬足，苟能於此箇門中，翻身一擲，何止腰纏十萬貫，騎鶴上揚州而已哉。昔楊文公大年三十歲見廣慧，意輕功名富貴，道之所在，法如是故也。趙州云：諸人被十二時使，老僧使得十二時，此老此說，非是強爲，亦法如是故也。大率爲學爲道一也，而今學者，往往以仁義禮智信爲學，以格物忠恕一以貫之之類爲道，只管如博謎子相似，又如衆盲摸象，各說異端，釋不云乎：以思惟心，測度如來圓覺境界，如取燈火燒須彌山，臨生死禍福之際，都不得力，蓋由此也。楊子云：學者所以修性，性卽道也。黃面老子云：性成無上道，圭峯云：作有義事，是惺悟心，作無義事，是狂亂心，狂亂由情念，臨終被業牽，惺悟不由情，臨終能轉業，所謂義者是義理之義，非仁義之義，而今看來，遮老子亦未免析虛空爲兩處，仁乃性之仁，義乃性之義，禮乃性之禮，智乃性之智，信乃性之信，義理之義亦性也，作無義事卽背此性，作有義事卽順此性，然順背在人不在性也，仁義禮智信在性不在人也，人有賢愚，性卽無也，若仁義禮智信在賢而不在愚，則聖人之道，有揀擇取捨矣，如天降雨，擇地而下矣，所以云：仁義禮智信在性而不在人也。賢愚順背在人而不在性也。楊子所謂修性，性亦不可修，亦順背賢愚而已。圭峰所謂惺悟狂亂是也。趙州所謂使得十二時，被十二時使是也。若識得仁義禮智信之性起處，則格物忠恕一以貫之，在其中矣。肇法師云：能天能人者，豈天人之所能哉。所以云：爲學爲道一也。大率聖人設教，不求名，不伐功，如春行花木，具此性者，時節因緣到來，各各不相知，隨其根性，大小方圓長短，或青或黃，

或紅或綠或臭或香同時發作非春能大能小能方能圓能長能短能青能黃能紅能綠能臭能香此皆本有之性遇緣而發耳百丈云欲識佛性義當觀時節因緣時節若至其理自彰又讓師謂馬師曰汝學心地法門如下種子我說法要譬彼天澤汝緣合故當見其道所以云聖人設教不求名不伐功只令學者見性成道而已無垢老子云道在一芥則一芥重道在天下則天下重是也左右嘗升無垢之堂而未入其室見其表而未見其裏百歲光陰只在一刹那間刹那間悟去如上所說者皆非實義然既悟了以爲實亦在我以爲非實亦在我如水上的蘆無人動著常蕩蕩地觸著便動捺著便轉轉地非是強爲亦法如是故也趙州狗子無佛性話左右如人捕賊已知窩盤處但未捉著耳請快著精彩不得有少間斷時時向行住坐臥處看讀書史處修仁義禮智信處侍奉尊長處提誨學者處喫粥喫飯處與之廝崖忽然打失布袋夫復何言。

答宗直閣

示論應緣日涉差別境界未嘗不在佛法中又於日用動容之間以狗子無佛性話破除情塵若作如是工夫恐卒未得悟入請於脚跟下照顧差別境界從甚麼處起動容周旋之間如何以狗子無佛性話破除情塵能知破除情塵者又是阿誰佛不云乎衆生顛倒迷已逐物物本無自性迷已者自逐之耳境界本無差別迷已者自差別耳既日涉差別境界又在佛法中既在佛法中則非差別境界既在差別境界中則非佛法矣拈一放一有甚了期廣額居兒在涅槃會上放下屠刀立地便成佛豈有許多切切怛怛來日用應緣處纔覺涉差別境界時但只

就差別處舉狗子無佛性話不用作破除想不用作情塵想不用作差別想不用作佛法想但只看狗子無佛性話但只舉箇無字亦不用存心等悟若存心等悟則境界也差別佛法也差別情塵也差別狗子無佛性話也差別間斷處也差別無間斷處也差別遭情塵惑亂身心不安樂處也差別能知許多差別底亦差別若要除此病但只看箇無字但只看廣額居兒放下屠刀云我是千佛一數是實是虛若作虛實商量又打入差別境界上去也不如一刀兩段不得念後思前念後思前則又差別矣玄沙云此事限約不得心思路絕不因莊嚴本來真靜動用語笑隨處明了更無欠少今時人不悟箇中道理妄自涉事涉塵處處染著頭頭繫絆縱悟則塵境紛紜名相不實便擬疑心斂念攝事歸空閉自藏睛隨有念起旋旋破除細想纔生即便遏捺如此見解即是落空亡底外道魂不散底死人溟溟漠漠無覺無知寒耳偷鈴徒自欺誑左右來書云盡是玄沙所訶底病默照邪師埋人底坑子不可不知也舉話時都不用作許多伎倆但行住坐臥處勿令間斷喜怒哀樂處莫生分別舉來舉去看來看去覺得沒理路沒滋味心頭熱鬧時便是當人放身命處也記取記取莫見如此境界便退心如此境界正是成佛作祖底消息也而今默照邪師輩只以無言無說爲極則喚作威音那畔事亦喚作空劫已前事不信有悟門以悟爲誑以悟爲第二頭以悟爲方便語以悟爲接引之詞如此之徒謾入自謾誤人自誤亦不可不知日用四威儀中涉差別境界覺得省力時便是得力處也得力處極省力若用一毫毛氣力支撐定是邪法非佛法也但辦取長遠心與狗子無佛性話廝崖崖來崖去心無所之忽然如睡夢覺如蓮花開如披雲見日到恁麼時自然成一片矣但日用

七顛八倒處，只看箇無字，莫管悟不悟，徹不徹，三世諸佛只是箇無事人，諸代祖師亦只是箇無事人，古德云：但於事上通無事，見色聞聲不用聲。又古德云：愚人除境不亡心，智者亡心不除境。於一切處無心，則種種差別境界自無矣。而今士大夫多是急性，便要會禪，於經教上及祖師言句中，博量要說得分曉，殊不知分曉處却是不分曉底事。若透得箇無字，分曉不分曉，不著問人矣。老漢教士大夫放教鈍，便是遮箇道理也。作鈍勝狀元亦不惡，只怕挖白耳一笑。

答李參政 秦發

示論華嚴重法界，斷非虛語，既非虛語，必有分付處，必有自肯處。讀至此，嗟歎久之。士大夫平昔所學，臨死生禍福之際，手足俱露者，十常八九。考其行事，不如三家村裏省事漢，富貴貧賤，不能汨其心，以是較之，智不如愚，貴不如賤者多矣。何以故？生死禍福現前，那時不容僞故也。大參相公平昔所學，已見於行事，臨禍福之際，如精金入火，愈見明耀。又決定知華嚴重法界，斷非虛語，則定不作佗物想矣。其餘七顛八倒，或逆或順，或正或邪，亦非佗物。願公常作此觀，妙喜亦在其中。異日相從於寂寞之濱，結當當來世香火因緣，成就重法界，以實其事，豈小補哉。更須下箇注脚，即今遮一絡索，切忌作寓言指物會一笑。

答曾宗丞 天隱

左右天資近道，身心清淨，無佗緣作障，只遮一段，誰人能及。又能行住坐臥，以老僧所示省要處，時時提撕，休說一念相應，千了百當，便是此生打未徹，只恁麼崖到臘月三十日，闍家老子，也須倒退三千里始得。何以故？爲念念在般若中，無異念，無間斷，故只如道家流，以妄心存想，

日久月深，尙能成功，不爲地水火風所使，況全念住在般若中，臘月三十日，豈不能轉業耶。而今人多，是將有所得心學道，此是無妄想中真妄想也。但放教自在，然不得太緊，不得太緩，只恁麼做工夫，省無限心力。左右生處已熟，熟處已生，十二時中，自然不著枯心，忘懷將心管帶矣。雖未透脫，諸魔外道已不能伺其便，亦自能與諸魔外道共一手，同一眼，成就彼事而不墮其數矣。除公一人可以語此，餘人非但不能，如公行履，亦未必信得及也。但於話頭上看，看來看去，覺得沒巴鼻，沒滋味，心頭悶時，正好著力，切忌隨佗去，只遮悶處，便是成佛作祖，坐斷天下人舌頭處也，不可忽，不可忽。

答王教授 大授

不識左右別後，日用如何做工夫。若是曾於理性上得滋味，經教中得滋味，祖師言句上得滋味，眼見耳聞處得滋味，舉足動步處得滋味，心思意想處得滋味，都不濟事。若要直下休歇，應是從前得滋味處，都莫管佗，却去沒撈摸處，沒滋味處，試著意看，若著意不得，撈摸不得，轉覺得沒撈摸，可把捉，理路義路，心意識都不行。如土木瓦石相似時，莫怕落空，此是當人放身命處，不可忽，不可忽。聰明靈利人，多被聰明所障，以故道眼不開，觸塗成滯，衆生無始時來，爲心意識所使，流浪生死，不得自在。果欲出生死，作快活漢，須是一刀兩段，絕却心意識路頭，方有少分相應。故永嘉云：損法財，滅功德，莫不由茲心意識。豈欺人哉。頃蒙惠教，其中種種趣向，皆某平昔所訶底病，知是般事，颺在腦後，且向沒巴鼻處，沒撈摸處，沒滋味處，試做工夫看。如僧問趙州：狗子還有佛性也。無州云：無。尋常聰明人，纔聞舉起，便以心意識領會，博量引證，要說

得有分付處，殊不知不容引證，不容博量，不容以心意識領會，縱引證得，博量得，領會得，盡是獨體前情識邊事，生死岸頭，定不得力，而今普天之下，喚作禪師長者，會得分曉底，不出左右書中，寫來底消息耳，其餘種種邪解，不在言也，密首座某與渠同在平普融會中相聚，盡得普融要領，渠自以為安樂，然所造者，亦不出左右書中消息，今始知非，別得箇安樂處，方知某無秋毫相欺，今特令去相見，無事時，試令渠吐露看，還契得左右意否，八十翁翁入場屋，真誠不是小兒戲，若生死到來不得力，縱說得分曉，和會得有下落，引證得無差別，盡是鬼家活計，都不干我一星事，禪門種種差別異解，唯識法者懼，大法不明者，往往多以病為藥，不可不知。

答劉侍郎 季高

示諭臘月三十日已到，要之日用，當如是觀察，則世間塵勞之心，自然銷殞矣，塵勞之心既銷，殞則來日依前孟春猶寒矣，古德云，欲識佛性義，當觀時節因緣，此箇時節，乃是黃面老子出世成佛，坐金剛座，降伏魔軍，轉法輪度眾生，入涅槃底時節，與解空所謂臘月三十日時節，無異無別，到遮裏，只如是觀，以此觀者名為正觀，異此觀者名為邪觀，邪正未分，未免隨佗時節遷變，要得不隨時節，但一時放下著，放到無可放處，此語亦不受，依前只是解空居士，更不是別人。

又

吾佛大聖人能空一切相，成萬法智，而不能即滅定業，況博地凡夫耶，居士既是箇中人，想亦常入是三昧，昔有僧問一老宿，世界怎麼熱，未審向甚麼處回避，老宿曰，向鑊湯鐵炭裏回避。

曰，只如鑊湯鐵炭裏，作麼生回避，曰，衆苦不能到，願居士日用四威儀中，只如此做工夫，老宿之言不可忽，此是妙喜得効底藥方，非與居士此道相契，此心相知，亦不肯容易傳授，只用一念相應草湯下，更不用別湯使，若用別湯使，令人發狂，不可不知也，一念相應草，不用佗求，亦只在居士四威儀中，明處明如日，黑處黑如漆，若信手拈來，以本地風光一照，無有錯者，亦能殺人，亦能活人，故佛祖常以此藥，向鑊湯鐵炭裏，醫苦惱眾生，生死大病，號大醫王，不識居士還信得及否，若言我自父子不傳之祕方，不用向鑊湯鐵炭裏回避底妙術，卻望居士布施也。

答李郎中 似表

士大夫學此道，不患不聰明，患太聰明耳，不患無知見，患知見太多耳，故常行識前一步，昧卻脚跟下快活自在底消息，邪見之上者，和會見聞覺知為自己，以現量境界為心地法門，下者弄業識，認門頭戶口，簸兩片皮，談玄說妙，甚者至於發狂，不勒字數，胡言漢語，指東畫西，下下者以默照無言空空寂寂，在鬼窟裏著到，求究竟安樂，其餘種種邪解，不在言而可知也，沖密等歸，領所賜教讀之喜，慰不可言，更不復叙世諦相酬酢，只以左右向道勇猛之志，便入葛藤，禪無德山臨濟之殊，法眼曹洞之異，但學者無廣大決定志，而師家亦無廣大融通法門，故所入差別，究竟歸宿處，並無如許差別也，示諭欲妙喜因，書指示徑要處，只遮求指示徑要底一念，早是刺頭入膠盆了也，不可更向雪上加霜，雖然有問，不可無答，請左右都將平昔或自看經教話頭，或因人舉覺指示，得滋味歡喜處，一時放下，依前百不知百不會，如三歲孩兒相似。

大慧普覺禪師書 下

四七

有性識而未行，卻向未起，求徑要底一念子，前頭看，看來看去，覺得轉沒巴鼻，方寸轉不寧帖。時不得放緩，遮裏是坐斷千聖頂額處，往往學道人，多向遮裏打退了，左右若信得及，只向未起，求徑要指示一念前看，看來看去，忽然睡夢覺，不是差事，此是妙喜平昔做底得力工夫，知公有決定志，故挖泥帶水，納遮一場敗闕，此外別無可指示，若有可指示，則不徑要矣。

答李寶文 茂嘉

向承示諭，性根昏鈍，而阻勉修持，終未得超悟之方，某頃在雙徑，答富季申所問，正與此間同，能知昏鈍者，決定不昏鈍，更欲向甚處求超悟，士大夫學此道，卻須借昏鈍而入，若執昏鈍，自謂我無分，則爲昏鈍魔所攝矣，蓋平昔知見多，以求證悟之心，在前作障，故自己正知見不能現前，此障亦非外來，亦非別事，只是箇能知昏鈍底主人公耳，故瑞嚴和尚，居常在丈室中，自喚云，主人公，又自應云，諾，惺惺著，又自應云，諾，佗時後日，莫受人謾，又自應云，諾，諾，古來幸有恁麼勝機，謾向遮裏提撕看，是箇甚麼，只遮提撕底，亦不是別人，只是遮能知昏鈍者耳，能知昏鈍者，亦不是別人，便是李寶文，本命元辰也，此是妙喜應病與藥，不得已略爲居士，指箇歸家穩坐底路頭而已，若便認定死語，真箇喚作本命元辰，則是認識神爲自己，轉沒交涉矣，故長沙和尚云，學道之人，不識真，只爲從前認識神，無量劫來生死本，癡人喚作本來人，前所云借昏鈍而入是也，但只看能知得如是昏鈍底，畢竟是箇甚麼，只向遮裏看，不用求超悟，看來看去，忽地大笑去矣，此外無可言者。

答向侍郎 伯恭

示諭悟與未悟，夢與覺，一段因緣，黃面老子云，汝以緣心聽法，此法亦緣，謂至人無夢，亦有無之無，謂夢與非夢，一而已，以是觀之，則佛夢金鼓，高宗夢得說，孔子夢奠兩楹，亦不可作夢與非夢解，却來觀世間，猶如夢中事，教中自有明文，唯夢乃全妄想也，而衆生顛倒，以日用目前境界爲實，殊不知全體是夢，而於其中復生虛妄分別，以想心繫念神識紛飛爲實夢，殊不知正是夢中說夢，顛倒中又顛倒，故佛大慈悲，老婆心切，悉能徧入一切法界，諸安立海，所有微塵，於一一塵中，以夢自在法門，開悟世界海微塵數衆生，住邪定者，入正定聚，此亦普示顛倒衆生，以目前實有底境界爲安立海，令悟夢與非夢，悉皆是幻，則全夢是實，全實是夢，不可取不可捨，至人無夢之義，如是而已，來書見問，乃是某三十六歲時所疑，讀之不覺抓著痒處，亦嘗以此問圓悟先師，但以手指曰，住住休妄想，休妄想，某復曰，如某未睡著時，佛所讚者，依而行之，佛所訶者，不敢違犯，從前依師及自做工夫，零碎所得者，惺惺時，都得受用，及乎上牀半醒半覺時，已作主宰，不得夢見得金寶，則夢中歡喜無限，夢見被人以刀杖相逼，及諸惡境界，則夢中怕怖惶恐，自念此身尙存，只是睡著，已作主宰，不得，況地水火風分散，衆苦熾然，如何得不被回換，到遮裏方始著忙，先師又曰，待汝說底許多妄想絕時，汝自到寤寐恒一處也，初聞亦未之信，每日我自顧，寤與寐分明作兩段，如何敢開大口說禪，除非佛說寤寐恒一，是妄語，則我此病不須除，佛語果不欺人，乃是我自未了，後因聞先師舉諸佛出身處，薰風自南來，忽然去却礙膺之物，方知黃面老子所說，是真語實語，如語，不誑語，不欺人，真大慈悲，粉身沒命，不可報礙膺之物，既除，方知夢時便是寤時底，寤時便是夢時底，佛言寤寐恒一，

方始自知。遮般道理。拈出呈似人。不得說與人。不得如夢中境界。取不得。捨不得。承問妙喜於未悟已前。已悟之後。有異無異。不覺依實供通。子細讀來。教字字至誠。不是問禪。亦非見詰。故不免以昔時所疑慮。吐露。願居士試將老龐語。謾提撕。但願空諸所有。切勿實諸所無。先以目前日用境界。作夢會了。然後却將夢中底。移來目前。則佛金鼓。高宗得說。孔子奠兩楹。決不是夢矣。

答陳教授 卓卿

此道寂寥。無出今日。邪師說法。如惡叉聚。各各自謂得無上道。咸唱邪說。幻惑凡愚。故某每每切齒於此。不惜身命。欲扶持之。使光明種子。知有吾家本分事。不墮邪見網中。萬一得衆生界中佛種。不斷。亦不虛受黃面老子覆蔭。所謂將此深心。奉塵刹。是則名爲報佛恩。然亦是不知時不量力之一事也。左右既是箇中人。不得不說箇中事。因筆不覺及此耳。

答林判院 少瞻

示論求一語與信道人。做工夫。既看圓覺經。經中豈止一語而已哉。諸大菩薩各隨自所疑慮。發問。世尊據所疑。一一分明剖析。大段分曉。前所給話頭。亦在其中矣。經云。居一切時不起妄念。於諸妄心亦不息滅。住妄想境不加了知。此語最親切於無了知不辨真實。老漢昔居雲門庵時。嘗頌之曰。荷葉團團團似鏡。菱角尖尖尖似錐。風吹柳絮毛毳走。雨打梨花蛺蝶飛。但將此頌。放在上面。卻將經文移來下面。頌卻是經。經卻是頌。試如此做工夫。看莫管悟不悟。心頭休熱忙。亦不可放緩。如調絃之法。緊緩得其所。則曲調自成矣。歸去但與沖輩相親。遞相琢磨。磨道業。

無有不辨者。祝祝。

答黃知縣 子餘

收書知爲此一大事。因緣甚力。大丈夫漢所作所爲。當如是耳。無常迅速。生死事大。過了一日。則銷了一日好事。可畏可畏。左右春秋鼎盛。正是作業不識好惡時。能回此心。學無上菩提。此是世界上最難。容靈利漢。五濁界中有甚麼奇特事。過如此段因緣。趁色力强健。早回頭。比臨老回頭。其力量勝百千萬億倍。老漢私爲左右喜。前此寫去法語。曾時時觀看否。第一記取。不得起心動念。肚裏熱忙。急要悟。纔作此念。則被此念塞斷路頭。永不能得悟矣。祖師云。執之失度。必入邪路。放之自然。體無去住。此乃祖師吐心吐膽爲人處也。但日用費力處。莫要做此箇門中不容費力。老漢常爲人說此話。得力處。乃是省力處。省力處。乃是得力處。若起一念希望心。求悟入處。大似人在自家堂屋裏坐。卻問他人。覓住處無異。但把生死兩字。貼在鼻尖兒上。不要忘了。時時提撕話頭。提來提去。生處自熟。熟處自生矣。此語已寫在空相道人書中。請同此書互換一看。便了得也。

答嚴教授 子卿

真實到不疑之地者。如渾鋼打就。生鐵鑄成。直饒千聖出頭來。現無量殊勝境界。見之亦如不見。況於此作奇特殊勝道理耶。昔藥山坐禪次。石頭問。子在遮裏作甚麼。藥山云。一物不爲。石頭云。恁麼則閑坐也。藥山云。閑坐則爲也。石頭然之。看佗古人。一箇閑坐也。奈何佗不得。今時學道之士。多在閑坐處。打住。近日叢林無鼻孔。輩謂之默照者是也。又有一種脚跟元不曾踏。

地認得箇門頭戶口光影一向狂發與說平常話不得盡作禪會了似遮般底喚業識作本命元辰更是不可與語本分事也不見雲門大師有言光不透脫有兩般病一切處不明面前有物是一又透得一切法空隱隱地似有箇物相似亦是光不透脫又法身亦有兩般病得到法身為法執不忘已見猶存坐在法身邊是一直饒透得法身去放過即不可子細檢點來有甚麼氣息亦是病而今學實法者以透過法身為極致而雲門返以為病不知透過法身了合作麼生到遮裏如人飲水冷煖自知不著問別人問別人則禍事也所以云真實到不疑之地者如渾鋼打就生鐵鑄成是也如人喫飯飽時不可更問人我飽未飽昔黃檗問百丈從上古人以何法示人百丈只據坐黃檗云後代兒孫將何傳授百丈拂衣便起云我將謂汝是箇人遮箇便是爲人底樣子也但向自信處看還得自信底消息絕也未若自信底消息絕則自然不取佗人口頭辦矣臨濟云汝若歇得念念馳求心與釋迦老子不別不是欺人第七地菩薩求佛智心未滿足故謂之煩惱直是無備安排處著一星兒外料不得數年前有箇許居士認得箇門頭戶口將書來呈見解云日用中空豁豁地無一物作對待方知三界萬法一切元無直是安樂快活放得下因示之以偈曰莫戀淨潔處淨潔使人困莫戀快活處快活使人狂如水之任器隨方圓短長放下不放下更請細思量三界與萬法匪歸何有鄉若只便恁麼此事大乖張爲報許居士家親作禍殃豁開千聖眼不須頻禱禳偶晨起稍涼爲然記得子卿道友初得箇人頭時尙疑恐是光影遂將從來所疑公案按照方見趙州老漢敗關處不覺信筆寫藤如許

答張侍郎 子韶

左右以自所得瞥脫處爲極則纔見涉理路入泥入水爲人底便欲掃除使滅蹤跡見某所集正法眼藏便云臨濟下有數箇庵主好機鋒何不收入如忠國師說義理禪教壞人家男女決定可刪左右見道如此諦當而不喜忠國師說老婆禪坐在淨淨潔潔處只愛擊石火閃電光一著子此外不容一星兒別道理真可惜耳故某盡力主張若法性不寬波瀾不闊佛法知見不立生死命根不斷則不敢如此四楞著地入泥入水爲人蓋衆生根器不同故從上諸祖各立門戶施設備衆生機隨機攝化故長沙岑大蟲有言我若一向舉揚宗教法堂前須草深一丈倩人看院始得既落在遮行戶裏被人喚作宗師須備衆生機說法如擊石火閃電光一著子是遮般根器方承當得根器不是處用之則振苗矣某豈不曉瞥脫一推便七穿八穴是性燥所以集正法眼藏不分門類不問雲門臨濟曹洞潑仰法眼宗但有正知正見可以令人悟入者皆收之見忠國師大珠二老宿禪備衆體故收以救此一類根器者左右書來云決定可刪觀公之意正法眼藏盡去除諸家門戶只收似公見解者方是若爾則公自集一書化大根器者有何不可不必須教妙喜隨公意去之若謂忠國師說挖泥帶水老婆禪便絕後則如巖頭睦州烏白汾陽無業鎮州普化定上座雲峯悅法昌遇諸大老舍兒孫滿地今亦寂然無主化者諸公豈是挖泥帶水說老婆禪乎然妙喜主張國師無垢破除初不相妨也

答徐顯謨 稚山

左右頻寄聲妙喜想只是要調伏水牯牛捏殺遮糊繇子耳此事不在久歷叢林飽參知識只

貴於一言一句下，直截承當，不打之邊爾。據實而論，問不容髮，不得已說箇直截，已是紆曲了也。說箇承當，已是蹉過了也。況復牽枝引蔓，舉經舉教，說理說事，欲究竟耶？古德云：但有纖毫，即是塵。水牯牛未調伏，糊糝子未死，縱說得恒沙道理，並不干我一星兒事。然說得不得，亦非外邊事。不見江西老宿有言：說得亦是汝心，說不得亦是汝心。汝欲直截擔荷，見佛見祖，如生冤家，方有少分相應。如此做工夫，日久月深，不著起心求悟，水牯牛自調伏，糊糝子自死矣。記取記取，但向平昔心意識，湊泊不得處，取不得處，捨不得處，看箇話頭，借問雲門：如何是佛？門云：乾屎橛。看時不用將平昔聰明靈利思量卜度，擬心思量，十萬八千未是遠，莫是不思量，不計較，不擬心，便是麼？咄！更是箇甚麼，且置是事。

答楊教授 彥候

左右強項中，却有不可思議底柔和，致一言之下，千了百當。此事殊勝，若不問於強項中，打發得幾人。佛法豈到今日，非有般若根性，則不能如是。盛事盛事，示諭欲來年春夏間，棹無底船，吹無孔笛，施無盡供，說無生話，要了無窮，無始不有不無，巴鼻，但請來與遮無面目，商量定不錯了。遮話又承需道號，政欲相塗糊，可稱快然居士。故真淨老人云：快然大道，只在目前。縱橫十字，擬而留連，便是此義也。某只在長沙作久住計，左右佗日果從此來，則林下不寂寞也。

答樓樞密

不識別後日用應緣處，不被外境所奪否？視堆案之文，能撥置否？與物相遇時，能動轉否？住寂靜處，不妄想否？體究箇事，無雜念否？故黃面老子有言：心不妄取，過去法亦不貪著。未來事不

於現在有所住，了達三世悉空寂，過去事或善或惡，不須思量，思量則障道矣。未來事不須計較，計較則狂亂矣。現在事到面前，或逆或順，亦不須著意，著意則擾方寸矣。但一切臨時隨緣酬酢，自然合著遮箇道理。逆境界易打，順境界難打。逆我意者，只消一箇忍字，定省少時便過了。順境界直是無備回避處，如磁石與鐵相偶，彼此不覺合作一所，無情之物尚爾，況現行無明，全身在裏許作活計者，當此境界若無智慧，不覺不知，被佗引入羅網，却向裏許要求出路，不亦難乎？所以先聖云：入得世間，出世無餘，便是遮箇道理也。近世有一種修行失方便者，往往認現行無明爲人，世間便將出世間法，強差排作出世無餘之事，可不悲乎？除夙有誓願，即時識得破，作得主，不被佗牽引，故淨名有言：佛爲增上慢人，說離婬怒癡，爲解脫耳。若無增上慢者，佛說婬怒癡性，即是解脫。若免得此過，於逆順境界中，無起滅相，始離得增上慢名字。怎麼方可作入得世間，謂之有力量漢，已上所說，都是妙喜平昔經歷過底。即今日用亦只如此修行，願公趁色力強健，亦入是三昧。此外時時以趙州無字提撕，久久純熟，焉然無心，撞破秦桶，便是徹頭處也。

又

日用工夫，前書已葛藤不少，但只依舊不變不動，物來則與之酬酢，自然物我一如矣。古德云：放曠任其去住，靜鑑覺其源流，語證則不可示人，說理則非證不了，自證自得處，拈出呈似人，不得，唯親證親得者，略露目前些子，彼此便默默相契矣。示論自此不被人謾，不錯用工夫矣。大槩已正，彌柄已得，如善牧牛者，索頭常在手中，爭得犯人苗稼，焉地放却索頭，鼻孔無撈摸。

處平田淺草一任縱橫，慈明老人所謂四方放去，休攔遏，八面無拘，任意游，要收只在索頭撥，未能如是，當緊把索頭，且與順摩拈，淹沒工夫，既熟，自然不著用意，隄防矣。工夫不可急急，則躁動，又不可緩，緩則昏但矣。忘懷著意，俱蹉過，譬如擲劍揮空，莫論及之，不及昔嚴陽尊者問趙州，一物不將來，時如何。州云：放下著。嚴陽云：一物既不將來，放下箇甚麼。州云：放不下，擔取去。嚴陽於言下大悟。又有僧問古德，學人奈何不得，時如何。古德云：老僧亦奈何不得。僧云：學人在學地，故是奈何不得，和尙是大善知識，爲甚麼亦奈何不得。古德云：我若奈何得，則便拈却，爾遮不奈何。僧於言下大悟。二僧悟處，即是樓樞密迷處，樓樞密疑處，即是二僧問處。法從分別生，還從分別滅，滅諸分別法，是法無生，滅細觀來書，病已去盡，別證候亦不生矣。大段相近，亦漸省力矣。請只就省力處，放教蕩蕩地，忽然啐地破，曝地斷便了，千萬勉之。

答曹太尉 功顯

某雖年運而往矣，不敢不勉強力以此事與諸子輩激揚，一日粥後撥牌子，輪一百人入室，間有負命者上鉤來，亦有咬人師子，以此法喜禪悅爲樂，殊不覺倦，亦造物見憐耳。左右福慧兩全，日在至尊之側，而留意此段大事，因緣真不可思議事。釋迦老子曰：有勢不臨難，豪貴學道難，非百劫千生，曾承事善知識，種得般若種子深，焉能如是信得及，只遮信得及處，便是成佛作祖底基本也。願公只向信得及處覷捕，久久自透脫矣。然第一不得著意安排，覷透脫處，若著意則蹉過也。釋迦老子又曰：佛道不思議，誰能思議佛。又佛問文殊師利曰：汝入不思議三昧耶。文殊曰：弗也。世尊，我即不思議，不見有心能思議者。云何而言入不思議三昧，我初發

心欲入是定，如今思惟實無心想而入三昧，如人學射，久習則巧，後雖無心，以久習故，箭發皆中，我亦如是，初學不思議三昧，繫心一緣，若久習成就，更無心想，常與定俱，佛與祖師所受用處，無二無別。近年叢林，有一種邪禪，以閉目藏睛，背盧都地，作妄想，謂之不思議事，亦謂之威音那畔，空劫已前事，纔開口便喚作落今時，亦謂之根本上事，亦謂之淨極光通達，以悟爲落。在第二頭以悟爲枝葉邊事，蓋渠初發步時便錯了，亦不知是錯，以悟爲建立，既自無悟門，亦不信有悟者，遮般底謂之謗大般若，斷佛慧命，千佛出世不通懺悔，左右具驗，人眼久矣。似此等輩，披却師子皮，作野干鳴，不可不知。某與左右雖未承顏接論，此心已默默相契多年矣。前此答字極不如禮，今專遣法空禪人代往致敬，故不暇入善思，惟三昧只恁麼信手信意，不覺葛藤如許，聊謝不敏而已。

答榮侍郎 茂實

承留心欲究竟此一段大事，因緣既辨，此心第一不要急急，急則轉遲矣，又不得緩，緩則怠墮矣。如調琴之法，緊緩要得中，方成曲調，但向日用應緣處，時時覷捕，我遮能與人決斷，是非曲直底，承誰思力，畢竟從甚麼處流出，覷捕來覷捕去，平昔生處，路頭自熟，生處既熟，則熟處却生矣。那箇是熟處，五陰六入十二處十八界二十五有，無明業識思量計較，心識晝夜熒熒，如野馬無暫停息底，是遮一絡索，使得人流浪生死，使得人做不好事，遮一絡索既生，則菩提涅槃真如佛性便現前矣。當現前時，亦無現前之量，故古德契證得了，便解道：應眼時若千日，萬象不能逃影質，應耳時若幽谷大小音聲無不足，如此等事，不假佗求，不借佗力，自然向應緣處。

活鱖鱖地未得如此且將遮思量世間塵勞底心回在思量不及處試思量看那箇是思量不及處僧問趙州狗子還有佛性也無州云無只遮一字儘備有甚麼伎倆請安排看請計較看思量計較安排無處可以頓放只覺得肚裏悶心頭煩惱時正是好底時節第八識相次不行矣覺得如此時莫要放却只就遮無字上提撕提撕來提撕去生處自熟熟處自生矣近年以來叢林中有一種唱邪說爲宗師者謂學者曰但只管守靜不知守者是何物靜者是何人却言靜底是基本却不信有悟底謂悟底是枝葉更引僧問仰山曰今時人還假悟也無仰山曰悟則不無爭奈落在第二頭癡人面前不得說夢便作實法會謂悟是落第二頭殊不知馮山自有警覺學者之言直是痛切曰研窮至理以悟爲則此語又向其處著不可馮山疑誤後人要教落在第二頭也曹閣使亦留心此事恐其被邪師輩所誤比亦如此書切切但寫與此公聰明識見皆有大過人處決不到錯認方便語作實法會但某未得與之目擊私憂過計耳聞老居士亦與之是道友因筆不覺葛藤無事相見時試問渠取書一看方知妙喜相期不在眼底彼此氣義相投又非勢利之交寫了一紙紙盡又添一紙不暇更事形迹此書亦如是前書託是箇中人故曰切不可道老老大大著甚來由若如此則好事在面前定放過矣寫時雖似率易然亦機感相投亦不覺書在紙上荷公信得妙喜及便把做事日用應緣處便恢張此箇法門以報聖主求賢安天下之意真不負其所知也願種種堪忍始終只如今日做將去佛法世法打作一片且耕且戰久久純熟一舉而兩得之豈非腰纏十萬貫騎鶴上揚州乎

又

示諭鐘鳴漏盡之譏爲君上盡誠而下安百姓自有開絃賞音者願公凡事堅忍當逆順境政好著力所謂將此深心奉塵刹是則名爲報國恩平昔學道只要於逆順界中受用逆順現前而生苦惱大似平昔不會向箇中用心祖師曰境緣無好醜好醜起於心若不強名妄情從何起妄情既不起真心任徧知請於逆順境中常作是觀則久久自不生苦惱苦惱既不生則可以驅魔王作護法善神矣前此老大大著甚來由之說言猶在耳豈忘之耶欲識佛性義當觀時節因緣以居士前十餘載閑自有閑時時節今日仕權在手便有忙底時節當念閑時是誰閑忙時是誰忙須信忙時却有閑時道理閑時却有忙時道理政在忙中當體主上起公之意頃刻不可暫忘自警自察何以報之若常作是念則鑊湯鐵炭刀山劍樹上亦須著向前況目前些小逆順境界耶與公以此道相契故不留情淨盡吐露

答黃門司 節夫

收書并許多葛藤不意便解如此拈弄直是弄得來活鱖鱖地真是自證自得者可喜可喜但只如此從教人道遮官人不依本分亂說亂道佗家自有通人愛除是曾證曾悟者方知若是聽響之流一任佗鑽龜打瓦更批判得如來禪祖師禪好儘契得妙喜拄杖也且道是賞伊罰伊一任諸方更疑三十年

答孫知縣

蒙以所修金剛經相示幸得隨喜一徧近世士大夫肯如左右留心內典者實爲希有不得意趣則不能如是信得及不具看經眼則不能窺測經中深妙之義真火中蓮也詳味久之不能

無疑耳。左右詆諸聖師翻譯失真，而汨亂本真，文句增減，違背佛意。又云：自始持誦，即悟其非，欲求定本是正，舛差而習僞已久，雷同一律，暨得京師藏本，始有據依，復考釋天親無著論頌，其義脗合，遂泮然無疑。又以長水孤山二師皆依句而違義，不識左右敢如是批判，則定嘗見六朝所譯梵本，盡得諸師翻譯錯謬，方始泮然無疑。既無梵本，便以臆見刊削聖意，則且未論招因帶果，毀謗聖教，墮無間獄，恐有識者見之，却如左右檢點諸師之過，還著於本人矣。古人有言：交淺而言深者，招尤之道也。某與左右素昧平生，左右以此經求印證，欲流布萬世，於衆生界中，種佛種子，此是第一等好事，而又以某爲箇中人，以箇中消息，相期於形器之外，故不敢不上稟。昔清涼國師造華嚴疏，欲正譯師訛舛，而不得梵本，但書之于經尾而已。如佛不思議法品中，所謂一切佛，有無邊際身，色相清淨，普入諸趣，而無染著，清涼但云佛不思議法品上卷第三葉第十行，一切諸佛舊脫諸字，其餘經本脫落，皆注之于經尾。清涼亦聖師也，非不能添入及減削，止敢書之于經尾者，識法者懼也。又經中有大瑠璃寶，清涼曰：恐是吠瑠璃，舊本錯寫，亦不敢改，亦只如此注之經尾耳。六朝翻譯諸師，非皆淺識之士，翻譯場有譯語者，有譯義者，有潤文者，有證梵語者，有正義者，有唐梵相校者，而左右尙以爲錯譯聖意，左右既不得梵本，便妄加刊削，却要後世人誦信，不亦難乎。如論長水依句而違義，無梵本證，如何便決定，以其爲非，此公雖是講人，與佗講人不同。嘗參瑠璃廣照禪師，因請益瑠璃首楞嚴中，富樓那問佛清淨本然，云何忽生山河大地之義，瑠璃遂抗聲云：清淨本然，云何忽生山河大地，長水於言下大悟，後方披襟自稱座主。蓋座主多是尋行數墨，左右所謂依句而不依義，長水非

無見識，亦非尋行數墨者，不以具足相故，得阿耨菩提。經文大段分明，此文至淺至近，自是左右求奇大過，要立異解，求人從己耳。左右引無著論云：以法身應見如來，非以相具足故。若爾如來雖不應以相具足見，應相具足爲因，得阿耨菩提，爲離此著故。經言：須菩提於意云何，如來可以相成就得阿耨菩提，須菩提莫作是念等者，此義明相具足體非菩提，亦不以相具足爲因也。以相是色自性故，此論大段分明，自是左右錯見錯解爾。色是相緣起，相是法界緣起，梁昭明太子謂莫作是念如來不以具足相故，得阿耨菩提。三十二分中，以此分爲無斷無滅分，恐須菩提不以具足相，則緣起滅矣。蓋須菩提初在母胎，即知空寂，多不住緣起相，後引功德施菩薩論末後，若相成就，是真實有此相滅時，即名爲斷，何以故，以生故有斷，又怕人不會，又云：何以故一切法，是無生性，所以遠離斷常二邊，遠離二邊，是法界相，不說性而言相，謂法界是性之緣起故也。相是法界緣起故，不說性而言相，梁昭明所謂無斷無滅是也。此段更分明，又是左右求奇太過，強生節目爾。若金剛經可以刊削，則一大藏教，凡有看者，各隨臆解，都可刊削也。如韓退之指論語中畫字爲畫字，謂舊本差錯，以退之之見識，便可改了，而只如此論，在書中何也，亦是識法者懼爾。圭峯密禪師造圓覺疏鈔，密於圓覺，有證悟處，方敢下筆，以圓覺經中一切衆生皆證圓覺，圭峯改證爲具，謂譯者之訛，而不見梵本，亦只如此論在疏中，不敢便改正經也。後來泐譚真淨和尚撰皆證論，論內痛罵圭峯，謂之破凡夫臊臭漢，若一切衆生皆具圓覺而不證者，畜生永作畜生，餓鬼永作餓鬼，盡十方世界都虛是箇無孔鐵鎚，更無一人發真歸元，凡夫亦不須求解脫，何以故一切衆生皆已具圓覺，亦不須求證故。左右以

京師藏經本爲是，遂以京本爲據。若京師藏本從外州府納入，如徑山兩藏經，皆是朝廷全盛時賜到，亦是外州府經生所寫，萬一有錯，又卻如何改正？左右若無人，我定以妙喜之言爲至誠，不必泥在古今一大錯上。若執己見爲是，決欲改削，要一切人唾罵，一任刊版印行，妙喜也只得隨喜讚歎而已。公既得得遣人以經來求，印可雖不相識，以法爲親，故不覺切切但相觸忤。見公至誠，所以更不留情。左右決欲窮教乘造，與義當尋一名行講師，一心一意與之參詳，教徹頭徹尾，一等是留心教網也。若以無常迅速生死事大，已事未明，當一心一意尋一本分作家，能破人生死窠窟者，與伊著死工夫，厮崖忽然打破，泰桶便是徹頭處也。若只是要資談柄，道我博極群書，無不通達，禪我也會，教我也會，又能檢點得前輩諸譯主講師不到處，逞我能我解，則三教聖人都可檢點，亦不必更求人印可，然後放行也。如何如何。

答張舍人狀元 安國

左右決欲究竟此事，但常令方寸虛豁豁地，物來卽應，如人學射，久久中的矣。不見達磨謂二祖曰：汝但外息諸緣，內心無喘，心如牆壁，可以入道。如今人纔聞此說，便差排向頑然無知處，硬自遏捺，要得心如牆壁去。祖師所謂，錯認何會解方便者也。巖頭云：纔恁麼便不恁麼，是句亦刻，非句亦刻。遮箇便是外息諸緣，內心無喘底樣子也。縱未得啐地折囉地破，亦不被語言所轉矣。見月休觀，指歸家罷。問：程情識未破，則心火熾熾地，正當恁麼時，但以所疑底話頭提撕，如僧問趙州：狗子還有佛性也無？州云：無。只管提撕舉覺，左來也不是，右來也不是，又不得將心等悟，又不得向舉起處承當，又不得作玄妙領略，又不得作有無商量，又不得作真無

之無卜度，又不得坐在無事甲裏，又不得向擊石火閃電光處會，直得無所用心，心無所之時，莫怕落空，遮裏卻是好處。驀然老鼠入牛角，便見倒斷也。此事非難非易，除是夙曾種得般若種智之深，曾於無始曠大劫來，承事真善知識，熏習得正知正見，在靈識中，觸境遇緣，於現行處築著磕著，如在萬人叢裏，認得自家父母相似，當恁麼時，不著問人，自然求覓底心不馳散矣。雲門云：不可說時卽有，不說時便無也。不可商量時便有，不商量時便無也。又自提起云：且道，不商量時是箇甚麼？又怕人不會，又自云：更是甚麼？近年以來，禪有多塗，或以一問一答，末後多一句爲禪者，或以古人入道因緣，聚頭商確云：遮裏是虛，那裏是實，遮語玄，那語妙，或代或別，爲禪者，或以眼見耳聞和會，在三界唯心，萬法唯識上，爲禪者，或以無言無說，坐在黑山下鬼窟裏，閉眉合眼，謂之威音王那畔，父母未生時消息，亦謂之默，而常照爲禪者，如此等輩，不求妙悟，以悟爲落在第二頭，以悟爲誑人，以悟爲建立，自既不會悟，亦不信有悟底，妙喜常謂衲子輩說：世間工巧技藝，若無悟處，尚不得其妙，況欲脫生死，而只以口頭說靜，便要收殺，大似埋頭向東走，欲取西邊物，轉求轉遠，轉急轉遲，此輩名爲可憐愍者，教中謂之謗大般若，斷佛慧命人，千佛出世，不通懺悔，雖是善因，返招惡果，寧以此身碎如微塵，終不以佛法當人情，決要敵生死，須是打破遮泰桶始得。切忌被邪師順摩挲，將冬瓜印子印定，便謂我千了百當，如此之輩，如稻麻竹葦，左右聰明有識見，必不受遮般惡毒，然亦恐用心之切，要求速效，不覺不知遭佗染污，故信筆葛藤如許，被明眼人覷見一場敗闕，千萬相聽，只以趙州一箇無字，日用應緣處提撕，不要間斷。古德有言：研窮至理，以悟爲則，若說得天花亂墜，不悟總是癡

狂外邊走耳勉之不可忽。

答湯丞相 進之

丞相既存心此段大事因緣，缺誠界中虛妄不實，或逆或順，一一皆是發機時節，但常令方寸虛豁豁地，日用合做底事，隨分撥遣，觸境逢緣，時時以話頭提撕，莫求速效，研窮至理，以悟爲則，然第一不得存心等悟，若存心等悟，則被所等之心障，却道眼轉急轉遲矣，但只提撕話頭，驀然向提撕處，生死心絕，則是歸家穩坐之處，得到恁麼處了，自然透得古人種種方便，種種異解，自不生矣。教中所謂絕心生死，伐心稠林，洗心垢濁，解心執著，於執著處，使心動轉，當動轉時，亦無動轉底道理，自然頭頭上明，物物上顯，日用應緣處，或淨或穢，或喜或怒，或順或逆，如珠走盤，不撥而自轉矣。得到遮箇時節，拈出呈似人，不得，如人飲水，冷煖自知，南陽忠國師有言，說法有所得，是爲野干鳴，此事如青天白日，一見便見，真實自見得底，邪師走作不得，前日亦嘗而言，此事無傳授，纔說有奇特玄妙，六耳不同謀之說，即是相欺，便好拽住劈面便唾，書生做到宰相，是世間法中最尊最貴者，若不向此事上了却，即是虛來南閣浮提，打一遭收因結果時，帶得一身惡業去，教中說作癡福，是第三生冤，何謂第三生冤，第一生作癡福，不見性，第二生受癡福，無慚愧，不做好事，一向作業，第三生受癡福，盡不做好事，脫却殼漏子時，入地獄，如箭射，人身難得佛法難逢，此身不向今生度，更向何生度，此身學此道，須有決定志，若無決定志，則如聽聲卜者，見人說東，便隨人向東走，說西，便隨人向西走，若有決定志，則把得住，作得主宰，懶融所謂設有一法過於涅槃，吾說亦如夢幻，況世間虛幻不實之法，更有甚麼。

心情與之打交涉也。願公堅此志，以得入手，爲決定義，則縱使大地有情，盡作魔王，欲來惱亂，無有得其便處。般若上無虛棄底工夫，若存心在上面，縱今生未了，亦種得種子深，臨命終時，亦不被業識所牽，墮諸惡趣，換却殼漏子，轉頭來，亦昧我底不得，察之。

答樊提刑 茂實

示論能行佛事，而不解禪語，能與不解，無別無同，但知能行者，即是禪語，會禪語而不能行佛事，如人在水底坐，叫渴，飯糲裏坐，叫飢，何異。當知禪語，即佛事，佛事，即禪語，能行能解，在人不在法，若更向箇裏覓同覓別，則是空拳指上生實解，根境法中虛捏怪，如却行而求前，轉急轉遲，轉疎轉遠矣。要得徑截心地豁如，但將能與不能，解與不解，同與不同，別與不別，能如是思量，如是卜度者，掃向佗方世界，却向不可掃處看，是有是無，是同是別，驀然心思意想絕，當恁麼時，自不著問人矣。

答聖泉珪和尚

既得外護者存心相照，自可撥置人事，頻與衲子輩作佛事，久久自殊勝，更望室中與之子細，不得容人情，不得共伊落草，直似之以本分草料，教伊自悟自得，方是尊宿爲人體裁也。若是見伊遲疑不薦，便與之下注脚，非但瞎却佗眼，亦乃失却自家本分手段，不得人，即是吾輩緣法只如此，若得一箇半箇本分底，亦不負平昔志願也。

答鼓山逮長老

專使來收書并信香等，知開法出世，唱道於石門，不忘所從來，爲岳長老拈香續楊岐宗派，既

已承當簡事，須卓卓地做，教徹頭徹尾，以平昔實證實悟底一著子，端居丈室，如擔百二十斤擔子，從獨木橋上過，脚蹉手跌，則和自家性命不可保，況復與人抽釘拔楔，救濟他人耶？古德云：此事如八十翁翁入場屋，豈是兒戲？又古德云：我若一向舉揚宗教，法堂前草深一丈，須倩人看院，始得巖頭每云：向未屙已前，一覷便眼卓朔地，晏國師不跨石門句，睦州現成公案，放個三十棒，汾陽無業莫妄想，魯祖凡見僧入門，便轉身面壁而坐，爲人時，當不昧這般體裁，方不失從上宗旨耳。昔馮山謂仰山曰：建法幢立宗旨，於一方五種緣備，始得成就。五種緣，謂外護緣、檀越緣、弟子緣、土地緣、道緣。聞霜臺趙公是汝請主，致政司業鄭公送汝入院，二公天下士，以此觀之，汝於五種緣稍備，每有弟子自閩中來者，無不稱歎法席之盛。檀越歸向，士大夫外護，住持無魔障，弟子雲集，可以趁色力未衰時，頻與弟子激揚簡事，垂手之際，須著精彩，不得莽鹵。蓋近年以來，有一種裨販之輩，到處學得一堆一擔相似禪，往往宗師造次放過，遂至承虛接響，遞相印授，誤賺後人，致使正宗淡薄，單傳直指之風，幾掃地矣。不可不子細。五祖師翁住白雲時，嘗答靈源和尚書云：今夏諸莊顆粒不收，不以爲憂，其可憂者，一堂數百弟子，一夏無一人透得箇狗子無佛性話，恐佛法將滅耳。汝看主法底宗師用心，又何曾以產錢多少、山門大小爲重輕？米鹽細務爲急切來？汝既出頭承當簡善，知識名字，當一味以本分事接待方來，所有庫司財穀分付，知因識果，知事分司，列局令掌之時，時時提舉大綱，安僧不必多，日用齋粥常教，後手有餘，自然不費力。弟子到室中，下及要緊，不得拖泥帶水，如雪峯空禪師，頃在雲居雲門相聚，老漢知渠不自欺，是箇佛法中人，故一味以本分錯鈍似之，後來自在別處打

發，大法既明，向所受過底錯鈍，一時得受用，方知妙喜不以佛法當人情，去年送得一冊語錄來，造次顛沛，不失臨濟宗旨，今送在衆寮中，與弟子輩看。老漢因撥筆書其後，特爲發揚，使本分弟子爲將來說法之式。若使老漢初爲渠拖泥帶水，說老婆禪，眼開後，定罵我無疑，所以古人云：我不重先師道德，只重先師不爲我說破。若爲我說破，豈有今日，便是遮箇道理也。趙州云：若教老僧隨伊根機，接人自有三乘十二分教，接他了也。老僧遮裏，只以本分事接人，若接不得，自是學者根性遲鈍，不干老僧事，思之思之。

大慧普覺禪師書下終

大慧禪師說法四十餘年、言句滿天下、平時不許參徒編錄、而弟子私自傳寫、遂成卷帙、晚年因衆力請、乃許流通、然在會有先後、見聞有詳略、又賢士大夫所得法語、各自寶藏、無緣盡觀、今之所收、殊爲未盡、俟更採集別爲後錄。

文昌謹白

大慧普覺禪師書跋

國譯叢林盛事

解題

叢林盛事上下二卷、上卷に六十八則、下卷に七十一則の語頭を收む。この書、我邦に傳來せらるること久しく、叢林雜僧の之を知らざるもの少なし。著者道融、字は古月、宋の寧宗慶元前後の人なり。嘗て羅湖野録を讀み、其の序引に「前哲入道の機縁、禪書に多く備載せず、其の過ち當時英俊の編次を失するにあり、是れ衛宗弘法の心無くして然り」と云ふに至り概然として感あり、爾來、日常見聞する所の、近古名徳の行持を收録して、禪林衲僧の龜鏡に資したるもの即ち本書なり。道融の前後に密庵咸傑、應庵曇華、松源崇岳等輩出し、禪風天下に競ひしも、而も道融の名、各種の僧傳に見えず、ために其の行業の詳ならざるを憾む。

國譯叢林盛事序

余、身を叢林に廁ふること、僅んど三十年所、當代の諸大老に見ゆること多し。世を厭ふて、扇を丹丘中峰の下に掩ひ、日に草木と俱に脱す。而も陳習未だ忘せず、瞌睡の餘、手に信せて、骨董箱を抽き、^①江西の瑩公著す所の羅湖野錄一帙を得たり。卷首を開くに及び、乃ち、無著師之れが序引を爲し、曰へるあり、「前哲入道の機縁、禪書に多く備載せざるは、其の過、當時の英俊編次を失するにあり、是れ衛宗弘法の心無うして然るなり。遂に賢を見て齊しきを思ふ者に、徒に嘆息を増すあるを致さしむ」と。細に其の語を味ふに、誠に吾輩、懶慢の病を箴すべし。因つて、平日衆に在つて、目に見、耳に聞く

國譯叢林盛事 序

① 骨董箱は本箱なり。
 ② 江西瑩公は大惠果禪師の法嗣なり。
 ③ 無著師は、妙摠尼なり、諸方に參じ、終りに大惠に嗣法す、今の羅湖野錄には、無著の文を跋文に載す、道融禪師の見し本は、卷首に載せしと見ゆ。
 ④ 賢を見て齊しきを思ふは、論語の語、賢者を見ては、之に齊しからんと思ひ、不賢者を見ては内に自ら省み改むるなり。
 ⑤ 懶慢は疎懶と散漫との略なり、鄭峯は育王山の舊名なり、佛照徳光禪師は大惠の法嗣なり、其下に多く英衲を出す、浙翁、北瀾等の如き是れなり。
 ⑥ 道愜、孤雲と號し、育王に住す、佛照に嗣ぐ。
 ⑦ 古月道融禪師は、其母、梵僧月を懷中に投すと夢みて育す、又安穩眠と號す、曾て密庵に參じ佛照に參じ、空谷寶曇と友としよし、華藏の宗演塗毒智策は皆先輩なり、而も年齒を忘れて唱酬倦むことなし、蓋し英邁の士なり、未だ其世系を詳にせず。

前輩、近世行ふべく、録すべきの語を追憶して、共に一篇となす。書成つて、鄭峰の佛照老人に將呈す。見て之を悦び、侍僧道權に謂つて曰く、「此れ真に吾門の盛事なり、胡ぞ木に刊して以て後世に傳へざる」と。因て叢林盛事を以て之に名く。我を知り我を罪して、晒を加ふる母れ。
歳は丁巳、慶元三年、仲秋の日

道融序す

國譯叢林盛事綱目

卷上

- 程大卿黃龍に參す
- 眞淨大愚に居る
- 圓通の秀
- 佛心才
- 典午牧牛の頌
- 應庵圓悟に依る
- 或庵體亂擾と號す
- 且庵の仁
- 谷山の旦
- 宏智夢に一聯を作る
- 富鄭公投子に參す
- 佛印東坡の玉帶を解く
- 承天の宗書を馳す
- 芙蓉投子の典座となる
- 張安道楞伽を見る
- 佛燈の詢罵天と號す
- 木庵の永
- 瞎堂は圓悟の晩子たり
- 白楊の順
- 懶庵の需
- 圓極の岑
- 艸堂の清
- 芙蓉楊次公韓魏公に答ふ
- 剖禪師圓頭と作る
- 淨因の成枯木
- 雪堂父母に見ゆ
- 開福の寧妬まる
- 直道妙喜に參す
- 密庵の破沙盆
- 月庵の果
- 一仕官焦山に題す
- 混源の密上堂
- 慈航の朴

按ずるに此目錄は興聖の梅峯和尚の補添せしものなるべし。

深己庵
自得の陣
竹原庵主
西禪の淨此庵
尤延之
李德邁
本歸雲の叢林佞篇
五臺艸衣の文殊
廣教の會
開善の謙の頌古
陳彭公汝霖 觀音經を寫す
仁宗帝大覺を見る

卷下

寶峰の祥叉手

月堂の昌
開善の謙 本傳
水庵一糙と號す
顏出庵
無着妙德
光佛照
懶庵の樞
水墨の觀音
三峰の印
圓通の旻
安相國晏に見ゆ
孝宗徑山の酒に詔す

普慈の聞

龜山の光
辨正堂
如無明
全無庵
瓊首座
策塗毒
棘空谷
柏堂の雅
自得の暉竹の頌を作る
吳居厚
二靈庵主

鐵庵一大

雪堂の行
大圓の智
證西林老衲と號す
伊庵の權
塗毒放翁と厚し
誰庵の演
雪巢村僧と號す
雷庵の正受
圓悟初め講肆にあり
蔣山の元
瑞岩の順
枯木の元
庵號道號
寢禪の妙
常樂の和山主

蘇子由
妙道道人
詢罵天佛鑑と問答
高宗孝宗彌勒を贊す
石窓の恭
別峯の雲
松源の頌
大慧祖慶に與ふるの頌
士大夫尊宿の語に序す
肯堂の充
萬壽の脩
瀉山の寶
安定郡王欲を戒むる文を作る
保安の封
震山堂

晁光祿迥
機簡堂
劍門の分庵主
印別峯
孝宗佛照を遇す
洪首座
曇廣南
晦庵の光
無垢居士
公安の珠
咲庵の悟
空東山
思鑑傳燈錄を開す
圓通の永建上人
崇野堂

龍丘法師慧仁
金沙灘頭菩薩の像
唐の虞世南
前輩の贊に式あり
或庵の示衆
婺州靈應講主
象田の梵卿
最庵の印

姑蘇の尼祖勲
黃龍楊岐
雲居の如
佛心才の示衆
東坡京口に到る
混源密の頌
慈恩法師
榮陽郡王

雪堂の舒
曇橋洲
佛印の示衆
長蘆の祖照
曾文清公
甄公龍文
遜庵の演

國譯叢林盛事綱目終

國譯叢林盛事卷上

宋沙門道

融

撰

程大卿 南禪師に參ず、南 生緣の話を看せしむ。法昌一日問うて曰く、「何ぞ直下に伊が爲めに、勦絶し去らざる。」南曰く、「也た曾て蛇の爲めに足を畫き來る、是れ伊自ら 警地ならず。」昌曰く、「和尚如何んが他の爲めにせん。」南曰く、「生薑を咬盡し、醋を呷盡す。」昌曰く、「流俗の阿師も、又與麼にし去る。」南曰く、「法昌作麼生。」昌、拂子を拈じて便ち打す。南曰く、「者の老漢、與麼に人情無きことを得たり。」昌休し去る。佛印 一日入室の次、忽ち 東坡至る。印曰く、「此間榻座なし、居士に奉陪するに及ばず。」坡曰く、「暫く和尚の四大を借つて榻座とせん。」印曰く、「山僧に一間あり、居士若し道ひ得ば、即ち請ふ坐せよ、若し道ひ得ずんば、即ち玉帶を輪却せよ。」坡欣然として曰く、「便ち請ふ。」印曰く、「居士

① 黃龍慧南禪師は石霜の圓に嗣ぐ。
② 生緣の話とは三關の内の一關也、大卿は疑ふらくは程公闢と同人か、雲臥記談に話あり。
③ 法昌猶遇は、北禪賢に嗣ぐ、賢は福嚴の雅に嗣ぐ、雅は洞山守初に嗣ぐ、初は雲門に嗣ぐ、法昌の傳は、僧寶傳卷二十八に詳かなり。
④ 勦絶は剃き取る事、警地は靈利を言ふ。
⑤ 佛印慧元禪師は黃龍に嗣ぐ、僧寶傳に傳あり、熙寧元年、吳江の壽聖に住する時、嗣法

適來道ふ、山僧が四大を借つて榻座とせんと、只山僧が如きは、四大本空、五陰有にあらす、居士什麼の處に向つて坐せん。坡擬議して答を加ふる能はず、遂に玉帶を解いて大咲して出づ。印却つて、雲山の衲衣を以て之に贈る、坡偈あり、云ふ。

「百千燈作一燈光。盡是劫沙妙法王。

是故東坡不敢惜。借君四大作禪床。」

又云ふ、

「病骨難堪玉帶圍。鈍根仍落箭鋒機。

會當乞食歌姬院。換得雲山舊衲衣。」

又云く、

「此帶閱人如傳舍。流傳到此亦悠哉。

錦袍錯落渾相稱。乞與祥狂老萬回。」

印二偈を以て、謝して云く、

「石霜奪得裴休笏。三百年來衆口誇。

爭似蘇公留玉帶。長和明月共無瑕。」

の書を讀す、黃龍其人を記せず、仍つて自ら來つて一見せしむ、佛印住持の事を頼めて之に赴けば黃龍既に没す、此に於て再び吳中に還る。(僧寶傳)

東坡は蜀の人、大天才ありて文に、詩に、書に、畫に、入るとして精妙ならざるなし、而も坎珂を以て終ふ。

東坡居士は、五祖の戒和尚の後身なり、故に常居袈裟を着けて人に接す、故に佛印贈るに、雲山の衲(衲衣)を以てして、相添はしむ。(僧寶傳廿九)

裴休、石霜の諸に謁す。諸笏を拈起して曰く、天子の手中にあつては珪となり、官人の手中にあつては笏となる、老僧の手中に在つては喚んで何となす。裴休對ふる無し、請乃ち笏を留す。

又云く、

「荆山卞氏三朝獻。趙國相如萬死回。

至寶只應天子用。因何留在小蓬萊。」

楊次公提刑、一日芙蓉楮、禪師に問うて曰く、「某と師と相別るること幾年ぞ。」楮曰く、「七年。」楊云く、「者七年參禪するや、學道するや。」楮曰く、「者の鼓笛を打せず。」楊曰く、「與麼なれば、則ち空しく山水に遊んで、百無所成。」楮曰く「相別るること未だ久しからざるに、善く能く高鑑せり。」と

楊阿々大笑す。韓魏公夏日來り訪ふ。楮出で、接す。韓遂に曰く、「禁足不出、甚に因つて破戒するや。」楮曰く、「官には針をも容れず、私に車馬を通す。」韓大いに之を喜ぶ。

眞淨禪師、筇の大愚に居るとき、太守錢公弋來り遊び、禪者の驟多を怪む。衆、師に道德あれば、奔隨して至るを以てす。錢公即ち其の室に入る、未だ以て之を奇とするにあらす。翌日齋を命じ、師席に就く。俄かに犬あつて逸して屏帷の間に入る、師少しく之を避く。錢嘲りて曰く、「大善知識、固に能く龍を降し虎を伏す、豈犬を畏れんや。」師聲に應じて曰く、

卞氏、玉を荆山に獲て、三朝に獻す、之を和氏夜光の玉と云ふ、後に秦始皇の玉璽となる。

趙の簡相如は秦に使し、璧を全うして還る、是れより此玉を連城の璧とも云ふ。

楊次公、楊傑字は次公、無爲居士と號す、臨終の遺偈に曰く、「生も亦戀ふべからず、死も亦捨つべからず、大慮空の之乎者也、錯を以て錯に就く西方極樂」と。

芙蓉楮禪師は、投子の青に嗣ぐ、沂水の人、剛勁孤硬なり、徽宗嘗て紫衣禪師號を賜ふ、堅く辭して受けず、徽宗怒つて僧衣を奪ひ緇州に流す。

韓琦、魏公に封ぜらる。

眞淨克文禪師、黃龍南に嗣ぐ、黃龍の法道浩々なり、其法を嗣ぐもの甚だ多し、就中眞淨、晦堂を白眉となす。

「伏し易きは巖に偲るの虎、降し難きは護宅の龍。」錢大いに喜ぶ。乃ち居を聖壽に移して道を問ふ。

① 承天の宗、行脚の時、泉州の棲隱和尚の爲めに、書を馳せて京師に到り、李駙馬の宅に、都尉に相看す。問うて曰く、「甚によつて京師に到れる。」宗曰く、「専ら院門の爲めに馳書す。」尉曰く、「適來一問を伸ぶるを悔ゆ。」宗曰く、「都尉其の便を得るに慣る。」尉使ち喝す。宗曰く、「一著を放過す。」尉云く、「再犯容さす。」宗曰く、「三十年後、大いに人あつて擧するあらん。」尉大いに咲ふ。

興陽 剖禪師、初め大陽に在つて園頭となり、瓜を種うる次で、陽問ふ、「甜瓜は何れの時か熟す。」剖曰く、「即今熟し了れり。」楊云く、「甜底を揀んで摘み來れ。」剖曰く、「摘み來つて、什麼人にか與へて、喫せしめん。」陽曰く、「園に入らざる者に與へて喫せん。」剖曰く、「未審、園に入らざるもの、還つて喫するや、也た無しや。」陽云く、「汝還つて伊を識るや。」剖云く、「然も識らずと雖も、與へざるを得ず。」陽咲つて去る。剖因に病に臥す、陽問うて曰く、「是の身は幻泡の如く、幻泡の中に成辨す、若し箇の泡幻無くんば、大事辨するに由なし、若し大事辨せんことを要せば、箇の泡幻を識取せよ。」

① 師は眞淨を指す。
② 護宅の龍は降伏すれば宅を守つて呉れない、語路は錢に擬せしなり。

③ 承天の宗、開庵嗣宗禪師、未詳。
④ 李駙馬、駙馬都尉李遵勗は、見地明白の士なり、谷隱に謁して投機の偈あり、曰く、「學道は須らく是れ鐵漢なるべし、手を心頭に著けて便ち判す」と、病革るとき、慈明と商量、泊然として逝く。(居士分燈) 先覺宗乘に、眞宗の女、萬壽公主に向す云々。
⑤ 剖禪師は鄂州大陽の警延に嗣ぐ。

作養生。剖云く、「猶ほ是れ者邊の事。」陽云く、「那邊の事作養生。」剖云く、「匣地に紅輪秀で、海底に華を開かず。」陽咲つて曰く、「乃ち爾く惺々なりや。」剖喝して云く、「將に謂へり、我れ忘却すと。」後竟に起たす、陽遂に直裰并に偈を以て浮山の遠に付す。遠後に投子の青を接して、洞上の一宗を起す。

法雲の 圓通秀禪師、初め華嚴を習ふ。一日嘆じて曰く、「吾れ觀るに、善財始め文殊に見え、復た百十城を過ぎ、五十三の善知識に事ふ。又聞く、達磨西來し、老盧南に去つて、教外別に無上の心印を傳ふと。吾れ豈方偶に止まり、性相の宗に滯らんや。」因つて所業を捨て、東裝南遊す。無爲に至つて、懷禪師に謁す。懷問うて曰く、「座主、甚廢の經をか講ずる。」秀曰く、「粗華嚴を習ふ。」懷曰く、「華嚴は何を以て宗となす。」秀曰く、「法界を以て宗となす。」懷曰く、「法界何を以て宗と爲す。」秀曰く、「心を以て宗となす。」懷曰く、「心は何を以て宗となす。」秀答ふる能はず、懷曰く、「毫釐も差あれば、天地懸隔、汝當に自ら肯會して省發あるべし。」後十七日、僧の白兆報慈に問うて云ふ、「情生すれば智隔たり、想變すれば體殊なり、情未だ生ぜざる時如何ん。」慈曰く、「隔」と擧するを聞き、師此に於て大悟す。直に方丈に到つて所得を陳す。懷喜んで曰く、「前後の座主、吾を見る者多し、唯汝一人大法を承くるに堪へたり。吾が宗異日汝一人

① 陽遂に云云、大陽剖を失ひて法道の斷えん事を憂ひ、洞下の蘊奥を以て浮山の遠録公に托し、以て繼者を求めしむ、浮山は臨濟下なり、故に投子を接するや、己れに嗣がしめずして、大陽に嗣がしむ、青の下に芙蓉を出し、又丹霞を出して、洞下の宗風大に振ふ。
② 圓通名は法秀、天衣の婁に嗣ぐ、雲門宗。
③ 惠能姓は盧。方偶は一方の偶なり。
④ 天衣懷禪師は雲門宗の人。

にあつて行はれん。師遂に服勤すること八年、懷推して上首となす。舒の四面に出世し、後東京の法雲に居る。雲門の正宗、茲より大いに聞く。

芙蓉の楮、投子に在つて典座となる。子一日問ふ、「厨司、勾當易からず。」楮云く、「敢てせず。」子云く、「粥を煮るや、飯を蒸すや。」楮云く、「人力は米を淘り、火を著け、行者は粥を煮、飯を蒸す。」子云く、「汝作麼生。」楮云く、「和尚慈悲、佗を放して閑にし去れ。」投子之に駭く。

浮因の成枯木、僧に問ふ、「甚麼の處の人。」僧云く、「西川。」成云く、「幾時か郷を離る。」僧云く、「前年三月。」成云く、「未だ本國を離れざる一句、作麼生か道はん。」僧云く、「通身是れ口、祇對をなし難し。」成云く、「猶ほ是れ離家失業の句。」僧無語。成打すること一拂子して云く、「枉げて許多の艸鞋を踏破す。」

鼓山の佛心才禪師は閩の人、初め死心に參す。心問ふ、「郷里甚麼ぞ。」才云く、「福州。」心云く、「玄沙嶺を出でず、保壽河を渡らず、甚によつて這裡に到る。」才云く、「行によつて掉臂を妨げず。」心云く、「左手に掉ふか、右手に掉ふか。」才兩手を放下して、掉出す。心大いに喜ぶ。挂搭を許すに及び、已に侍僧に擠でらる。云ふ、「才到る處に入

①舒の四面云々、白雲庵和尚の推薦にて、初めて四面山に出世せしなり、師曾つて黃龍南を請つて「此の道者何ぞ能く事をなさん」と云へり。

②勾當はきりもりなり。

③枯木法成禪師は曹洞下、芙蓉の法子。

④佛心法才禪師、靈源清に嗣ぐ、清は晦堂に嗣ぐ、黃龍派。

⑤死心新、晦堂に嗣ぐ、黃龍下。

⑥玄沙は五嶺を出で、北せず、保壽は黃河を渡つて南せず。

⑦行によつて云々、足を運ぶ毎に兩手を掉ふ也、今の軍隊式の歩み方なり。

⑧吵は闌なり、人を騒すを云ふ。

の叢林を吵す、和尚之を留むるを得ざれ。是に於て心遂に納れず。云ふ、「聞く汝到る處に人の叢林を吵すと、且く他處に往け。」才云く、「大善知識、眼甚麼の處に在るや」と、拂袖して出づ。照黙に見ゆ、照黙之を納る。

未だ幾くならず、遂に黃龍の道に契ふ。照黙大法を以て之に任す。

樂全先生、張安道、慶曆中潯州に守たり。一僧舍に至り、梵夾の齊整なるを見て、怪み取つて之を閲するに、乃ち楞伽阿跋多羅寶經なり、恍然として舊物を獲るが如し。細かに筆畫を觀るに、手迹宛然として、自ら書する所の者の如し。悲喜太息し、是れより悟入す。嘗て經首の四偈をもつて必要を發明す。東坡南都を過ぎ、親しく公の説を見る、且つ錢三十萬を以て托して云く、「江淮の間に印施せよ」と。東坡親ら書して、佛印をして石に金山に刻せしむ。故に樂全に贈る詩に、

「樂全居士樂於天。維摩丈室空怡然。」

と曰ふ句あり。

雪堂の行は、括蒼の人、少うして上座に登り、因に殺生の者を見て、盡然として感あり。遂に家を捨て、直に泗州の普照王寺に抵つて出家し、

①靈源清禪師、黃龍の照黙堂に居る、著に靈源筆語あり。

②張方平字安道、樂全と號す。王孔子没して百年、孟軻出づ、而も其後絶えて人無きは何ぞや。樂全曰く、豈に無からんや、又之に過ぐるものあり。

③曰く誰ぞ。曰く、南岳謙、嵩山の珪、馬祖、石頭、丹霞、無業、鸞峰、岩頭之れなり。

④安石版然嘆伏す。

⑤梵夾の齊整は、一切經の軌、齊整なるを見しなり。

⑥東坡親ら書すとは、みづから跋文を書せしなり、元豐八年九月九日なり、次に、元祐三年に福州に於て再版せるものあり。

⑦雪堂、佛眼に嗣ぐ、楊岐下。

⑧盡然は心痛の貌。

塔を掃ふをもつて務となす。既に剃髮し、舒の龍門に往いて、佛眼禪師に依り、侍者となる。一積寒暑を度り、又且つ、蟲を養ひ、隣肩皆之を厭ふ。毎に殿堂の僻處に於て坐禪す。一日、玄沙脚指頭を築著するの話を看て、大いに發明あり。佛眼は乃ち、川の人、上堂の次で、行、侍立す。戯れて曰く、「川僧は藜苳、浙僧は瀟洒、諸人若し也た信せずんば、山僧が侍者を看取せよ」と。一衆大いに咲ふ。後其の父大常博士より出で、三衢に守たり、行時に母の老いたるを以て來歸す。聞者其の縊縷を見て、再三すれども與に進めず、行乃ち、衣を解いて之に與へ、纒かに通覆す。而して其の母之を聞いて覺えず地に仆れて曰く、「我が兒猶ほ在りや」と。遂に迎へて宅堂に入れ、逼つて換衣澡浴せしむ。浴に及び、其の衣盡く換へ去り、只だ其の新衣を著くるを得。行泣いて曰く、「我れ幾年か他と、眷屬を爲す、豈一旦遽かに相捨てんや」と。即ち吉祥寺に抵つて宿をなす。次日、父母兄弟俱に來つて報謁す。而も行、黎明を以て去り、竟に見るに及ばず。但だ壁間に偈を留めて云く、

「莫嫌心似鐵 自己尙爲冤
掃盡門前雪 方開火裡蓮
萬般休更問 一等是忘緣
箇事相應處 金剛種現前」

① 藜苳は藜と苳を以て殺戮せざるを云ふ。
② 川の人、川は四川なり、浙中の僧、蜀僧の勁強を罵つて、川藜苳と云ふ。
③ 三衢は山の名、衢州にあり、路三越に通ず、故に三衢と云ふ。(元和郡縣志)
④ 郷を出でし時、着くる處の衣なり。
⑤ 父を捨て母を離るゝも、尙ほ此衣と眷屬をなす。

其の母師を憶ふに因つて失明す。行再び括蒼に歸る。其の父逼つて南明に出世せしめ、衢の烏巨に遷り、其の道大いに振ひ、饒の薦福に終ふ。妙喜親しく爲めに語録の序を撰し、世に流傳す。

典午 和尙は成都の人、姓は鄭氏、名は天游、本仕族なり。初め郡庠に試みられ、復た梓州に試みらる、二處俱に發す。游敢て承受せず、名を竄して關を出づ。適々山谷道人西より還り、其の風骨凡ならず、論議超卓を見るに因つて、適ち舟を同じうして下り、竟に廬山に往いて剃髮し、舊名を改めず。首めに死心に參じ、契はず、乃ち洪堂に、湖潭に依る。時に妙喜侍者たり、游書司に居り、且夕相從ふ。後古樂山に往いて、大事を發明し、廬山の小寶峰に出世し、後雲巖に居る。嘗て忠道者の牧牛の頌に和して曰く、

「兩角指天 四蹄踏地
拽斷鼻圈 牧甚屎屁」

① 典午、洪堂に嗣ぐ、堂は眞淨に嗣ぐ、黃龍下。
② 山谷道人黃魯直は、晦堂に參ず、江西の詩祖と稱せらる。
③ 湖潭は、南昌府にあり、石門山あり、其下に寶峰院あり、真元中、馬祖道一禪師示寂、舍利を得て茲に葬る、眞淨、洪堂皆此院に住す。
④ 頌は狂なり、天と同音。
⑤ 典とは、物品を質に置くことなり、此の天は、質屋の典とするも、百貫の直打はありと。

初め張無盡、其の坦率事を事とせざるを見て、嘗つて之を慢つて、之を顛游と謂ふ。後妙喜此の頌を持して之を獻す、無盡几を撫して稱賞す。妙喜曰く、「相公且く道へ、者の頌は是れ甚麼の人の做せし。無盡曰く、「此れ彌勒大士にあらずんば、安んぞ能く此言を發せん。」妙喜曰く、「此れ乃ち前日の顛游の作る所なり。」無盡曰く、「奇なる哉、奇なる哉、洪堂に乃ち此の兒あるか、臨濟の一宗、其れ此に在り、但だ質庫中に將ち去つて、典するも也た

一百貫を典じ得ん。商英肉眼別たす、幾ど此の人を蹉過せり」と。遂に香を焼いて雲巖を望んで悔過す。游後に雲巖を退き、廬山の棲賢を過ぐ。長老其の堅老、又且つ川氣あるを見て、挂搭を肯はず。卻けて曰く、「老々大々、正に是れ質庫裡の典牛か。」と、游之を聞いて、乃ち偈を述べて去る。曰く、

⑤ 質庫何曾解典牛。只緣二償重實難酬。

想君本領無多子。爭解三能容二者一頭。

因つて武寧に庵すること四十年、身を終るまで出でず。塗毒の之に見えしとき、已に九十三なりき。

佛燈の詢、罵天と號す、湖の安吉の人、佛鑑に嗣ぐ。禾山に住するの日、嘗て上堂す。僧問ふ、「如何なるか是れ賓中の賓。」答へて曰く、「客路天

の遠きが如く、候門海の深きに似たり。」如何なるか是れ賓中の主。」云く、「長へに客を送るの遠きによつて、憶ひ得たり家に別るゝの遠きを。」如何

なるか是れ主中の賓。」云く、「相逢ふて馬より下らず、各自に前程あり。」如何なるか、是れ主中の主。」云く、「一朝祖令を權る、誰れか是れ出頭の人。」賓主還つて向上の事ありや也た無きや。」云く、「向上に將ち來れ。」如何んが是れ向上の事。」云く、「大海若し足ることを知らば、百川應に倒流すべし。」僧禮拜す。詢云く、「此れは是れ詢上座、三十年の學得底、」と。

- ⑤ 堅老は、蓋し頑健にして老年の意ならん、川氣は粗糖なるを云ふ。
- ⑥ 質庫裡云々は、前の無盡の評語を踏んで云ひしなり。
- ⑦ 質庫云々、質乏質屋の庫にどうして、此牛を質に取る事が出来様ぞ。
- ⑧ 佛燈は佛鑑に嗣ぐ、鑑は五祖演に嗣ぐ。

開福の寧道者は歙州の人、五祖演に參す。演其の立作高上、識趣超卓なるを見て、毎に衆に當つて之を譽め、復た堂司に入らしむ。同學のもの之を妬んで、夜寧を引いて山行道話し、因つて之を毆つて其の面目を傷く。衆に赴くこと得ず。演之を聞いて、躬ら往いて省問して曰く、「聞く、汝那の一輩に無禮せらると、何ぞ方丈に至つて屈を雪がざる。老僧の汝が爲に趕逐するを聽せよ。」寧竟に顯すに忍びず、但だ云く、「某自ら喫撲傷損す、他の事に干るにあらず」と。演涙下つて曰く、「吾れ忍力汝に如かず、他日豈汝を奈何せん」と。後開福に出世し、五百衆を容る、將に示寂せんとし、預め日時を定めて坐化す。大法を以て月庵の果に授く、果衆底に陸沈し、人能く識るものなし、唯だ圓悟のみ之を知る。後其の出世を成観す。頌を以て之を送つて曰く、

① 歙山老人末後句。的々親傳四絕堂。

正令已行風凜々。斗間劍氣燭三天光。

應庵初め蔣山圓悟の會中に依り、此庵の元と友たり。元處の連雲に住するに及び、華虎丘の隆の會中より來る。初めて到るや、便ち首座た

- ① 開福寧の下に月庵果を出し、次で月林觀を出し、法嗣綿々たり。五祖法演禪師は、白雲に嗣ぐ、楊岐下。
- ② 撲は仆と同じ、倒るゝを云ふ。
- ③ 成護は成就なり。
- ④ 歙山老人は開福を指す、四絕堂は蓋し月庵の住所。
- ⑤ 應庵華嚴禪師は虎丘に嗣ぐ、丘は圓悟に嗣ぐ。
- ⑥ 此庵元は圓悟に嗣ぐ、護國に住す、相親甚だ布袋和尚に似たり、故に人呼んで元布袋と云ふ。
- ⑦ 虎丘の隆は、威儀頗る柔易なり、人或は圓悟に問ふ、隆首座、柔なること斯くの如し、能く大法を荷擔せんや否やと。圓悟曰く、憂ふる勿れ、睡虎のみ。
- ⑧ 立僧は大家を成立するの義なり、多く大方の尊宿を請して之に充つ。

らしむ。未だ久しからざるに立僧たらしむ。元の上堂に云く、

①「西河に獅子あり、連雲に虎兒を出す。親しく猛虎の窟中より來る、文彩爪牙悉く皆備る。未だ群を驚かすに及ばずと雖も、已に食牛の志あり。楊岐の宗之をして地を掃ふが如くならしむるを痛念し、鐵脊梁を豎起して先師の爲めに氣を出す。諸人還つて識るや、兩眼の大いなることは環の如し、當頭立底是なり。」

と。後妙嚴に出世し、虎丘の爲めに香を焼く。自後住すること十年、其道妙喜と相抗す。李浩侍郎、師と遊ぶこと久し、嘗て師の眞に贊して云く、

「平生波々、絜々。纔得箇院子、住便打脫。

而今又向幘子上出來。知他是死是活。」

②木庵永禪師は、福州童聖者の小師なり。儒を棄て、釋に従ひ、法弟安分なるものと友とし、同じく懶庵の需に洋嶼に參じ、皆大發明あり。因に水覓の頭を作つて云く、

「路繞懸崖萬仞頭。擔泉帶月幾時休。」

①西河の獅子は、慈明圓禪師なり、猛虎の窟中とは虎丘より出で來るを云ふ、此上堂應庵を推賞すること至れり、俊秀の後進、法幢を光輝ならしむるは、其人群を抜くによると雖も、又先聖の扶掖によらずんばならず。

②妙喜應庵の道、靖平嘉熙の間に盛なり、故に之を端嘉の道と云ふ。

③正信居士と號す、應安の法嗣。(宗派)

④波々絜々は奔波して休まざるなり、絜々又効々に作る。脫は禪脫、幘子は掛軸なり。

⑤木庵永安、福州鼓山に住す、懶庵の法嗣、小師は弟子なり。

⑥箇中撥轉す通天竅とは山の絶頂から覓て水を導くを言ふ、人々道の通天竅あり、能く撥轉するや否や。

⑦箇中撥轉通天竅。人自安閑水自流。」

妙喜之を見て曰く、「鼎需此の兒あり、楊岐の法道未だ寂寥に至らず」と。後鼓山に住す、江浙の兄弟盡く嶺に入る。松源無用息庵の諸老、皆座下に在り、後泉南に終ふ。

⑧直道者は安州の人、初め妙喜に回雁峰下に參す。喜問うて曰く、「上座何れの人。」直云く、「安州の人。」喜曰く、「我れ聞く、安州の人は、厮撲を會すと、是なりや否や。」直便ち相撲の勢を作す。喜曰く、「湖南の人魚を喫して、湖北の人、鯁を著く。」直、筋斗を打翻して出づ。喜曰く、「誰れか知らん冷灰に、粒豆の爆するあるを。」と、竟に喜を辭して江浙を過ぎ、嘗て三衢の陸式二人と同行をなす。後金陵の保寧に住し、妙喜に嗣ぎ、法道大いに振ふ。因に留守陳丞相俊卿、諸山の茶に會する次、陳、有句無句は藤の樹に倚るが如し」を擧して、諸山に批判せしむ。諸山皆尖言巧語、以て丞相の意を取る。惟師、最後に頌して曰く、

⑨「張打油。李打油。不_レ打_二渾身_一。只打頭。」

丞相大いに喜ぶ、未だ幾くならずして、遷つて 蔣山に住す。

⑩或庵體和尚は台州黃巖の人、賦性麤糙、事に遇ふて敢爲なり。受業上下、體亂擾と號す。此庵

- ①一庵善直、大惠に嗣ぐ。
- ②鯁は魚骨也、湖南の人がさしみを食ふたら、湖北の人に骨がたつとの意なり。
- ③機家の油しめ、李家の油しめ、渾身は全身なり。
- ④蔣山は南京にあり、又鼓山と書し、金陵山とも云ふ。
- ⑤或庵師照禪師は元布袋に嗣ぐ、那悟下。
- ⑥麤糙は麤略穢雜の意、敢爲は向ふみず、亂は亂暴の亂、擾は騷擾なり。

の元に護國に參ず。一日羅漢殿に在つて、庫下に行者を毆つて、大叫一聲するを聞いて、豁然として契悟し、走せて元に見ゆ。元曰く、「この十一郎、今日病に汗を得るが如し。」未だ幾くならず典客に充つ、後塗田を化せしむ。頰をもつて之を送つて曰く、

① 豎三亞頂門三隻眼。放開肘後驗人符。

杖頭殺活無多子。截海須還大丈夫。

爾後晴堂に依り、衆に虎丘に首とし、蘇の覺報に出世して、此庵に嗣ぐ、

法道大いに振ふ。後に焦山に遷る、郡守曾侍郎仲躬、嘗て道を問ふ。師

既に入滅、石硯を以て曾に寄す、曾尙を以て弔して云く、

「翻々隻履逐西風。一物渾無布袋中。」

留三下陶泓將底用。老來無筆判虚空。

體の辭世に云く、

「鐵樹開華。雄鷄生卵。七十二年。搖籃繩斷。」

謂つべし、眞に臨濟の種草なりと。

晴堂の遠、初め婺州の金鱗山に住し、復た建上禪寂の請に赴き、道三衢を過ぐ。時に雪堂の行、烏巨に住す、遠往いて法眷を講す。行與に語つて之を奇とし、且つ遠を留めて、句款す。亟かに

① 三隻眼は、摩訶首羅の三日なり。

② 蓋し天游の弟。

③ 陶泓は硯の異名。

④ 搖籃は小兒を棲ましめて、繩にて垂る籃なり、「ふ」ことども云ふ。

⑤ 遠晴堂は、闍悟に嗣法す、揚岐下。

⑥ 法眷、遠と行とは從兄弟なり。

⑦ 句款は懇ろに款待するなり。

郡中に往いて、超然居士に見えて曰く、「師伯闍悟和尚に晩子、川遠なるものあり、昨山中に至り、將

に建上の請に赴かんとす、惜むらくは、其の居處、山深く地僻なるを。居士能く爲めに郡主に稟し、

一院を以て之を留めば可ならんか。」超然即ち郡主に白し、其れをして子湖の定業禪寺に住せしむ。師

請を受けて、衆に示して云く、

① 甘分金鱗困守株。誤他禪寂遠招呼。

中途再領賢候命。定業難逃住子湖。

未だ幾くならずして報恩に遷る、時に妙喜、衡陽に居り、師の名を聞いて、

法衣并に偈を以て寄せて曰く、

「這川菘苴。無眞無假。一條白棒。佛來也打。」

更有二一般長所。解下向鉢盂裡走馬。

後諸山に歷住し、詔を奉じて靈隱に居る。

密庵傑禪師は閩の人、初め嶺を出で、婺州の智者に至り、偶々暄を負

ふの次、老宿あり、問うて曰く、「上座此の行何の處に去る。」曰く、「四明の育王に、佛智和尚に見え去

る。」老宿云く、「世衰へ道喪し、後生家の行脚、例して耳を帯びて眼を帯びず。」傑曰く、「何の謂ぞや。」

老宿云く、「今育王一千、來の衆、長老日に接陪を遂ふて暇あらず、豈工夫の著實に汝輩の爲めに機を

① 趙郡王令幹、字は表之、超然と號す、闍悟に參じて旨を得たり。(居士分燈)

② 豁道名は曠遠、四川の人、故に川遠と云ふ。

③ 金鱗定業用ひ得て巧なり。

④ 衡陽は大惠の遷謫地なり。

⑤ 密庵傑禪師、應庵に嗣法す。

⑥ 佛智和尚、闍悟の法嗣、名は端裕、育王住す。

⑦ 來は程と云ふが如し。

發するあらんや。傑派を下して曰く、「若し此くの如くならば、某今何の處に往かん。」宿云く、「此を去つて衢州の明果に。」華區頭あり、後生と雖も見識超卓なり、汝宜しく之を見るべし。傑、教に依つて明果に往いて華に依る。華の家風入り難し、傑辛苦を憚らず、一日室中に問ふ、「如何なるか是れ正法眼。」傑云く、「甚の破沙盆に直らん。」華再追して云く、「虚空消殞の時如何ん。」傑云く、「著々。」穎脫。「華云く、「罪は重きに科せず。」華即ち升堂して衆に告げて云く、「大徹堂前崖崩石裂の句あり」と。傑華に依ること四年にして、千聖の命脈を窮盡す。母老ゆるをもつて郷に歸る。華偈を以つて送つて曰く、

「大徹投機句。 當陽廓頂門。 相從經四歲。 微詰洞無痕。 雖未付鉢袋。 氣宇吞乾坤。 卻把正法眼。 喚作破沙盆。 此行將省覲。 切忌便跟蹤。 吾有二末後句。 待歸要汝遵。」
後衛の鳥巨に出世し、學者雲擁す。上堂に、
「從來不唱脫空歌。 把火烧山拾田螺。」

① 華區頭は「しこな」なり、當時體亂擾とか、鳥頭とか、宗日頭とか、一精とか、如十知とか、酒盞とか、多く「しこな」を用ふることを流行す、區頭は「しやく子あたま」なり。
② 破沙盆は、破れすりばちなり。
③ 穎脫、毛遂曰く、士の世に處する、錐の囊中に在るが如く、其末立るに露はると、是れ穎脫なり。
④ 罪は重きに科せず、既に死罪と定まりし上は、其餘の小罪は數に入れぬなり。
⑤ 跟蹤とは、尻を落ちつけるを云ふ、郷里に落付いて、飽暖に甘する勿れ。
⑥ 脱空は、虚空の底抜けなり、脱空歌は、法螺の歌と云ふが如し。
⑦ 田螺は、田にしなり、山上に田螺を拾ふと。

② 白鬮樹頭魚産子。 急水灘頭鳥作巢。①
皆謂ふ、「明果に在つて夜樵者の歌を聞き、因つて漆桶を打破す」と。蓋し師の密機測るなし、前後七たび大刹に住して、太白に終ふ。應庵の道藉つて若く大いに行る。之を信ず、行脚して人を見るには、固に宜しく眼を帯びて耳を帯ぶるなかるべし。籬脚下に箇の漢ありと雖も、須らく驗過して始めて得べし。院子の大小、衆の多寡を以て、趣慣して時を過すべからず。須らく知るべし、此の事若し志を負はずんば、釋迦老子の肚裡より過くと雖も、也た只是れ箇の屎橛、擇ばざるべけんや。

③ 且庵の仁和尙は越の上虞の人、少うして天台の教を習ふ。初め括蒼より雪堂に隨ひ、衢の鳥巨を過ぐ。因に雪堂の普説を見る、曰く、「今の兄弟工夫を做す、正に射を習ふが如し。先づ其の足を安じて従つて其の法を習ふ。後には無心と雖も久習を以ての故に、箭發すれば皆中る。」喝一喝して云く、「即今箭發するや。看よ看よ。」仁覺えず身倒れ、箭を避くるの勢を作し、豁然として大悟す。夏罷んで、母老ゆるを以て郷に歸り、雪堂を辭す。堂偈を以て之を送つて曰く、
「儼老昔年窮事相。 脱履南游扣宗匠。 石頭路滑不辭勤。」

① 白鬮樹は、骸骨の木なり。白骨の御樹枝に、魚が卵を産み付けたとなり。
② 團分面白き境界を括じたものじや。
③ 籬根の下に、草をむしつて居ても、直に見透す丈けの眼光なくては、役立たぬ。
④ 趣慣は「なれこ」になつて關熱を越ひまほすなり。
⑤ 佛眼下。
⑥ 藥山惟儼禪師、博く經論に通じ、嚴に戒律を持す、一日發誓南遊して石頭に參じ、又馬祖に參じ、宗旨を發明す。

腦後一槌曾兩當。仁禪勁志許誰儔。訪我蒼山白練州。
萬浪千波洶湧處。果然呼喚不回頭。西山積老期同住。
又說重尋越山路。歸時應是歲華深。趙州更有爐頭句。

仁、是れより梅山に歸つて、庵すること十六年、後天童の覺和尚、隰を出で、上虞に至り、夜其の庵に宿し、榻を連ねて與に語つて、大いに之を奇とす。既に歸つて、夏末に首座を請せず、主事覺に白す。覺云く、「我が首座早晚來らん」と。乃ち侍者をして越に往いて仁を邀へしむ。仁纔かに至る、即ち首座寮に請す、衆之を訝る。未だ幾くならず、秉拂掛牌せしむ、衆服膺す。後二年にして宏智入滅す、妙喜後事を主り、兩班皆布を衣る。唯仁肯て服を成さず、喜怪んで之を問ふ。仁乃ち密に其の事を啓す。妙喜曰く、「元來是れ雪堂に見え來るや」と。後長蘆に住し、法席大いに振ふ。嘗て臺山婆子の話を頌す、學者爭ふて之を誦す。曰く、

「開箇燈心阜角舖。日求升合一度朝昏。」
只因霖雨連綿久。本利一空愁倚門。」

顯謨呂公正己、嘗て道を師に問ふ、既に別れて偈を求む、師筆を授いて贈つて曰く、
「君今親切到長蘆。抖擻衣衫一物無。此去逢人如借問。」

① 藥山を以て且庵を呼び起す。
② 天童覺、宏智正覺禪師なり、丹霞の淳に嗣ぐ、曹洞下、宏智初め關州の長蘆に住し、後天童に住す。
③ 燈心阜角舖は、荒物屋なり、又一説に、「きぐすり」屋。
④ 顯謨蘭學士呂正己、佛法金湯卷十三に傳あり。

但言風急浪華轟

白楊順和尚は綿州の人、佛照によること數年、普説に傳大士心王の銘を擧して、「水中の鹽味、色裡の膠青、決定して是れ有なるも、其の形を見ず」と曰ふに因つて、豁然として省あり。次の日入室す。照問ふ、「眞佛住して甚麼にかある。」順曰く、「住して不定の處にあり。」照曰く、「既に是れ眞佛、甚によつて不定なる。」順曰く、「若し定ならば、即ち眞佛にあらず。」照之を肯ふ。後に臨川に居し、其の道大いに振ふ。上堂に曰く、「犬は黄昏の月に吠え、風は夜の燈を吹く。屋頭の猫は鼠を捕へ、世上の道は僧を嫌ふ。慕直は人の怪を招き、孤高は世を擧げて憎む。山林眞實の處、凡そ事百無能、任他霜雪の眉稜に上るを。」又曰く、「水は溪邊の石を洗ひ、風は古殿の簷を吹く。斯に於て落處を知らば、必ず靈山に在るべし」と。

月庵果和尚は信州鉛山の人、初め寧道者に見ゆ。寧問うて曰く、「上座の郷里。」曰く、「信州。」「受業は甚麼の處ぞ。」曰く、「鉛山の七寶。」寧曰く、「還つて寶を帶得し來るや。」果兩手を展ぶ。寧聲を震して一喝す。便ち下つて參堂す。後に死心に見ゆ、心、雲門話墮の話を擧して、深く法源に徹

① 抖擻は「ふるひたてる」と云ふ程なり、精神を抖擻するとか、身體を抖擻して、妖法を現出すなど用ふる場合もあり、大體抖擻は、「うん」と下腹に力を入れて、氣分を蕪蕪にするを云ふ。
② 白楊順は、佛眼清遠禪師に嗣法す、此の處にて佛照とせるは誤れり。佛照諱は德光、大惠の法嗣なり、綿州魏城文字の子、七八歳の時、暗夜に物を見ること白晝の如し、父母之を異とし、出家せしむ云々。(僧寶正續傳卷四)
③ 月庵諸方に遍參して、應庵に參じ、死心に參じ、各々發明あり、天下其師承を疑者す、出世に及び、遂に開福の遺寧

す。然れども開福を忘れず、後室中に此の話を舉し、頰を以て學者に示す。叢林盛に誦す。曰く、

① 萬仞龍門勢倚空。懸崖撒手辨魚龍。

② 時人只看絲綸上。不見蘆華對蓼紅。

③ 谷山の且、初め佛性泰和尚に參す。一日上堂に擧す、「趙州云く、臺山の婆子、已に諸人の爲めに勘破したんぬし、意作麼生。」良久して云く、「樹に就いて黄葉を撮み將ち去り、山に入つて白雲を推出し來る」と。且言下に釋然たり。次の日入室す、泰問ふ、「前百丈は不落因果、甚麼によつて野狐身に墮す。後百丈は不昧因果、甚によつて野狐身を脱す。」且曰く、「好し共に一坑に埋却せん。」泰之を徵するに語皆凡ならず、未だ幾くならずして立僧たらしめ、名一時を動かす。妙喜南行のとき、且、頰を呈して云く、

④ 異類中行世莫猜。故教佛日暫雲霏。

⑤ 度生悲願還無倦。方作南安再出來。

⑥ 懶庵の需和尚、佛心の才に依る。才の大乗に居るや、需已に首衆挂牌、常に學者に即心即佛の因

縁を問ふ。時に妙喜洋嶼に庵す。需の友光狀元と號するもの、需に與ふる書に云く、「庵主の手段は諸方と別なり、此に來つて少款すべし」と。需咲つて答へず、光計を以て師を邀へて飯す、需往いて之に赴く、門に及んで妙喜の開室に會ふ。需衆に隨ふ、喜問うて曰く、「僧馬祖に問ふ、如何なるか是れ佛、祖曰く、即心即佛と、作麼生。」需下語す、喜之を話つて曰く、「汝の見解此の如くにして、敢て妄に人の師となるや。」とて鼓を鳴して普請して、其の平生得力するところの處を掲げしめ、邪解を排擯す。需涙願に交はり、敢て仰ぎ見す。默して計つて曰へらく、「我の所得は既に排擯せらる、西來不傳の旨、豈止だ此くの如きのみならんや」と。遂に弟子の列に歸心す。一日喜問うて曰く、「内放出せず、外放入せず、正恁麼の時如何ん。」需答へんと擬す、喜竹篋を拈じて劈脊に連打すること數下、需豁然大悟して曰く、「和尚已に多了せり。」喜又打つこと一下す、需作禮す。喜咲つて曰く、「今日方に知らん、汝を欺かざるを」と。遂に偈を以て印して曰く、

「身心一如。身外無餘。咄這瞎驢。付與鼎需。」

是れより名、叢林に振ひ、出世して泉の延福に住し、西禪に遷る。嘗て衆に示して云く、「太虛に劍を挂

に嗣ぐ、此章以て其來由を知るべきなり。

① 萬仞龍門は、懸崖萬仞の龍門の瀑なり、蓋し靈堂一喝の處を頌す。

② 時人云々、時人は予が諸方に遍參するの跡を見て別に開福に於て、靈犀一點の通するあるを見すと。

③ 谷山清且禪師は佛性に嗣ぐ、佛性は圓悟に嗣ぐ。

④ 秋至れば葉自ら落ち、雲無心にして岫を出づ、そこを撮みもち去り、推し出すと頌してある。

⑤ 妙喜は且の法叔なり、南行は衡陽の厄なり。

⑥ 湖下の商景に異類陳あり、此偈は逸僞三首中の第三なり。

⑦ 懶庵は、大惠に嗣法す、名は鼎需。才は靈源の法嗣なり。

⑧ 晦庵彌光禪師は洋嶼發明十三人の一なり、見地超邁なるを以て、大惠之を禪狀元と號す。

⑨ 少款の款は款晤の款ならん。

⑩ 普請は、多く作務を云へど一概にあらず、此處は大眾を集むるを云ふ。

⑪ 排擯は、はらひのけ、ふるひおとすなり、擯は易に擯の文字あり。

⑫ 劈脊、劈面、劈耳、劈背等と用ふ、劈は「つんざく」の訓あれども、多くばげしき場合にのみ用ふ、手當り次第にぶんなぐるなり。

⑬ 勦敵、多く生死を勦敵とす、此等の處は勦敵の儘でよき様なり。

是れより名、叢林に振ひ、出世して泉の延福に住し、西禪に遷る。嘗て衆に示して云く、「太虛に劍を挂

けて用て吾が宗を顯す。據坐の禪威如何んが近傍せん。縦へ地回天轉、電卷星飛底の手段を具するも、要且つ、勅敵に堪へず。而今休咎を別つ底有るなきや、出で來つて相見せよ。稍遲回に涉らば、一鵝して直に粉砕せしめん。喝一喝して下座。又至節、衆に示して云く、「二十五日以前は羣陰消伏して泥龍戸を闔づ。二十五日以後は一陽來復して鐵樹花を開く。正當二十五日、塵中の醉客は驢に騎り馬に騎り、前街後巷、遞に相慶賀す。物外の閑人は衲被頭を蒙ふて爐を圍んで打坐す。風蕭々たり、雨蕭々たり、冷湫々たり。誰れか彌が張先生李道子胡達磨をか管せん。又衆に示して云く、「横さまに鐵錫を按ずるも虚しく意氣を張る、碧落を穿開するも徒に精神を費す。直饒神鋒を動かさずして、坐ながら太平を致すも、堯舜の君は猶ほ化の在るあり。」

紹興の間一仕官あり、^①焦山に至つて風月亭に題して曰く、

「風來三松頂、清難立。月到二波心、淡欲沈。會得松風元物外。」

始知江月似吾心。^②

前後觀るもの稱賞せざるなし。唯月庵果、行脚して此に到り、之れを觀て曰く、「詩の好きことは則ち好し、只是れ眼目なし。」同坐のもの曰く、「那裡か是れ眼目なき。」果曰く、「小僧、伊が爲に兩字を改め

① 化、天下を治むると五十年、天下治るが、治まざるがを知らず、億兆已を戴くを願ふが、己が戴くを願はざるがを知らず、此に於て無爲の化を得たり、然れどもまだ化と云ふものがあるが、宗旨を舉げる也。
② 焦山は鎮江にあり、後漢の焦先此に隱る故に焦山と呼ぶ、金山と相隣ること十五里、二山相並ぶ。

て則ち眼目を見さん。同坐曰く、「甚の字をか改めん。」果曰く、「何ぞ。」會得松風非物外始知江月則吾心」と道はざる。」と、坐者大いに服す。之を信す、工夫を做して眼開く底の人は、見所自ら別なるを。況や月庵は平昔會て詩を習はざるも、而も能く點化此くの如し。豈に龍王一滴水を得て、能く雲を興し霧を起すものにあらずや。兄弟家、行脚は當に衣單下本分の事を辨すべし、外字を攻むるにあらず、久々に眼開かば、自然に諸佛の眼睛を點出せん、況んや世間の文字をや。

③ 宏智禪師圓通に住する時、夜夢に一聯を作つて云ふ、

「松徑蕭森窈窕門。到時微月正黄昏。」

是れより數年、杳として此を省せず。建炎の間、虜を避けて一笠東浙を過ぎ、天童に抵る。適々主者席を退く、師舟中より曉を破つて山に入る、恰も是れ天明の時節、松逕蕭森として、月烟靄を蒙るを見て、忽ち向來夢中の句を省す。且過に歸するに及び、名字を言はずと雖も、而も兄弟已に

① 是は居士の作に、一轉語を下せし迄なり、月庵の轉語によつて、居士の作を廢せば便ち不可なり、譯者の見地を以てせば、會得とか始知とかの文字は改めたき文字と思惟す。
② 宏智前出、洞山良价、雲居道膺、同安不、同安志大陽警巡、投子義青、芙蓉道楷、丹霞子諱、宏智正覺、世五斯の如し。
③ 建炎は南宋高宗の年號、北宋末より南宋に亘りて、金虜の亂あり。

識るものあり、曰く、「此れ乃ち長蘆の長老なり、胡爲れぞ此に至れるや」と。密に主事に報す、主事則ち使府に申す。府喜んで自ら勝へず。蓋し夜夢に神人報し云ふ、「天童の主人は乃ち隴州の古佛なり」と。則ち帖を出し官を差し、且過に至つて之を請す、師堅く肯はず、乃ち且過の兄弟に硬舁せられて

方丈に歸す。一住三十年、洞上の宗茲によつて大いに振ふ。信に人の住院縁法は自ら定まり、初より苟くも求むべきに在らざるなり。

⑦ 圓極の岑和尚は台の仙居の人、抱節孤高なること、近世及ぶもの罕なり。久しく雲居の如和尚に依り、書司に在ること十七載なり。如遷寂せしかば、一錫浙に回り、⑧ 正堂の辨に道場に依る。未だ幾くならず、座元を董さしめ、雲の卞山に出世す。乃ち⑨ 石林先生易を講せし地なり。辨は此の一瓣香を具して、爲めに拈出せんと意へり。而も岑竟に雲居の如に嗣ぐ、叢林多く之を高しとす。後大刹を歴董す。然れども福縁⑩ 贈證、涉世多艱なり。岑終に意に介せず、平生施利未だ嘗て眼を経せず。後常の華藏道場に退いて終ふ。語録二十卷あり、世に行はる。侍郎曾公仲躬、爲に其の首に序す。岑、長蘆の且庵を賛するあり、一の贊に云く、

「夜半推日出日輪。天明把住桂枝。拈將四部洲。放在一粒粟。奏無絃而非履霜之樂。唱胡歌而非白雪之曲。大冶鍛絶鑛之金。痛鑿碎無瑕之珠。東湖赤梢鯉魚。生出金毛鐵犢。」

⑦ 圓極岑禪師は、雲居の法如禪師に嗣ぐ、如は佛眼遠禪師に嗣ぐ、續傳燈卷三十三に傳あり。

⑧ 正堂明辨禪師亦佛眼に嗣ぐ、安吉州の人、傳は續傳燈二十九に出づ。

⑨ 董夢得、石林と號す、官は尚書左丞に到る、今の葉德輝の先祖なり。

⑩ 爲は自分の爲めになり。贈證は、不仕合の意なり、處によつて失勢と訓じ、又失道と訓す、字義は、山路の險艱を贈證と云ふなり。

曾公仲躬は、曾天游の弟、曾文清公ならん。

桂枝は月なり、日輪に對して穀と云ふ。

① 混源の密和尚、紫籙に住す。上堂に云ふ、「雲山漠々たり、喬木森陰たり、古屋吹々たり、叢林閑寂たり。混源此に荆棘を栽ゑ、蒺藜を布き、硬塞を簡す。誰れか敢て正眼に覲者せん。忽ち筒の漢あつて、這裡に向つて身を轉じ得、氣を吐き得ば、醞茶三五椀、意は饅頭邊にあり。其れ或は未だ然らずんば、青尖路險にして空碧を瞰す。謂ふなかれ公々に道ひ來らず」と。又曰く、「春日暖にして黃鶯鳴く、更に聽く斷崖流水の聲、春山翠を疊んで款く歩みを作す。歸來烟島誰と與にか争はん。且く歸來の一句作廢生か舉せん。肱を曲げて拳を枕となし、臥して聽く夕陽の鐘」と。

② 富鄭公弼、投子の顯禪師に參じて弟子の禮を盡す。謹厚なること初學のもの、如し。後に③ 張比部隱之の勢位をもつて弟子を陵ぐに因つて、公乃ち之に書を與へて曰く、「禪家者流、凡そ事を説いて枝蔓徑捷ならざる者を見て、之を葛藤と謂つて往々に鄙誚す。遂に④ 葛藤の歌を著して集中に載す。弼因つて嘗て其の所以を思ふ。今試に隱之と商確せん、知らず如何ん、大抵俗士と僧人とは性識始めより纖毫の差別なければども、其の事蹟は甚だ用て同じからざる處あり。且つ僧人は幼より出家し、早より以て看經日久しく、聞見は皆是

① 混源密は、時庵光狀元に嗣ぐ、大惠下。

② 混源密は、時庵光狀元に嗣ぐ、大惠下。

③ 張比部隱之は、富弼と同郷の人、又投子の顯に參す、佛法金湯編卷十二、比部は六部の一にして、刑部と同じ。

④ 葛藤の歌云々、此處原書或は脫字あらん。

れ佛事のみ。剃髮の後、作を結んで行脚するに及び、到らんと要する處、便ち到り、參禪問道の外、衆に群して見聞。博約なり。又後耳目に限りなし、薰蒸既に熟し、忽ち一明眼の人の摘撮に遇ふて、立どころに便ち箇の見處あり。卻つて前後凡そ見聞する所を將つて自ら證據を行ふ、豈明白暢快なる者にあらずや。吾が輩俗士は、幼少より俗事の爲に浸漬せられ、長大に及んで又妻を娶り子を養ひ、衣食を經營し仕官に奔走す。黄卷赤軸は未だ嘗て手に入らず、間に乘じて翫閱すと雖も、只是れ談柄に資するのみ、何ぞ嘗て其の理を徹究せん。且つ上農工商は各々業資の爲めに纏縛せられ、禪林法席あることを知つて、假使去つて參問せんと欲すとも、何によつて去り得ん。何れの處に更に伴を結んで遊山し、參禪問道、及び衆中博約の多きとあらんや。萬一明眼の人あるも、事によつて遭際し、且つ一味の工夫なし。聞く所能く多少かある、得る所能く幾何かある。復た之を問うて見るところ聞ところ、自ら證據を作すなし。更に廣く探討を行ひ、深く鑽仰を加へず、才かに一言半句を得て殊に未だ明了ならざるに、便ち乃ち日は雲漢を視、鼻孔は天に遼り、自ら謂らく我れ超佛越祖、千聖齊しく下風に立つと。佛經禪冊都て一顧せず、以て葛藤の語を避くと。彌が愚見は深く未だ然らざるを恐るゝなり。彌學はずんば則ち已む、若し身心を辨するを

①博約とは要を得て廣博の意ならん、或は約字連類の字とするも可なり。

②摘撮は撈著なり、浸漬はひたしもの、つげものなり、黄卷赤軸は經文なり、談柄は法麈のたれなり。

③一味は專一なり、鑽仰は嚴練なり、日は雲漢を視は高天瀾歩なり、鼻孔天に遼るは鼻息荒きなり、此等の處解は用ひざるも分明なり、暫く蛇足を添へて、白み塞ぐのみ。

以て之を學ばば、須らく是れ周旋委曲、深鈎遠索、透頂透底、徹骨徹髓なるべし。一切現成、光明潔淨にして、一點塵計りの凝翳をも絶せば、方に敢て隱之に下らん。隱之此の一事は是れ小々にあらず、直に無始以來生死の根本を脱却して、生死を管する底の閻羅老子と抵敵をなして、始めて得んことを要す。人の閑言長語を取つて以て參學に當て、便ち自ら睡じ去るべからず、祝々、彌啓上す。比部執事。」

① 艸堂清禪師晦堂に見えて所得あり、後遍く江湖に遊び、歸りて廬山に居り、去つて眞淨に泐潭に見ゆ。淨問ふ、「甚麼の處より來る。」清曰く、「下江。」淨曰く、「什麼を將ち得來る。」清曰く、「和尚什麼をか要す。」淨曰く、「一切盡く要す。」清乃ち坐具を提起す。淨曰く、「閑家具。」清曰く、「急切底を要すること莫きや。」淨曰く、「試みに拈出せよ、見ん。」清曰く、「一坐具して便ち行る、淨大いに之を駭く。後黃龍に出世す、上堂に曰く、「昨日は林間に野客となり、今朝は堂上住持の人、放開捏聚は都て我による。萬象の中獨露身。」と。越えて明年即ち院事を退き、茆を寺の東隅に結ぶ、久しうして再住す。上堂に云く、「茅堂に掩息して六冬を過ぐ、心忘境寂にして萬緣空し、知らず定業は何れより起る、舊きに依つて祖宗を繼がしむ」と。後曹山疎山に居り、泐潭に居るに殆んで、已に八十三なり、諸方 鹿鴻絶物の士皆之に歸す。

① 艸堂清禪師、晦堂に嗣ぐ、堂は黃龍に嗣ぐ。
② 眞淨克文禪師亦黃龍に嗣ぐ。
③ 據は擧なり、拈なり。
④ 龍鴻は孝經授神經に出で、物の未だきざざる以前を云ふ、今は見地超絶の意に用ふ、絶物は孟子にも出で、拘束を受けざるの意。

慈航の朴禪師は閩の人なり、稟質脩黑、狀應眞の如し、無示の謀に嗣ぐ。初め明の廬山に住し、育王に遷る。未だ幾くならざるに、有力者に移されて海下の萬壽に居る。應庵天童に歸寂せし時、太守其の風を聞いて、朴に命じて席を繼がしむ。是の夜太白の耆宿皆夢む、鐵羅漢あり、舟中より方丈に歸すと。同衣の者あり、一啓を上つて曰く、「昔、鄭峯を去つて身は一葉よりも軽く、我れに視顔なし。今長庚に上つて道は三山よりも重く、人々喜色あり。快く佛髻を離れて、鯨波を渉るに利し、幽谷を出で、喬木に遷り、此の道を光にせよ。東山に登つて魯邦を小にす。允なるかな其の時、此より以還、未だ措くところを知らず」と。一住二十二年皇子魏王并に史魏公、皆其の道徳を重んず。淳熙の初め、孝宗皇帝親しく太白名山の四字を書して以て錫ふ。朴廬山に住せしとき、上堂あり、云く、「徳山門に入れば便ち棒す、臨濟門に入れば便ち喝す。徳山の棒頭に耳聾し、臨濟の喝下に眼瞎す。然く一搥一擡と雖も、中に就いて全生全殺す。」遂に喝一喝、卓拄杖一下、「敢て諸人に問ふ、是れ生か殺か。」良久して云く、「君子可八。」

深己庵は永和の人、妙癡禪に嗣ぐ。嘗て頰あり、之を送つて曰く、

「送君還憶深師叔。兩眼依然聽轉轡。」

後に温州の、報恩に住す。冬至の小參あり、云く、

「一二三四五。五四三二一。寒風劈面來。」

離頭吹三幣栗。」

と、下座、余時に且過の中に在つて、其の擧揚を聞いて、便ち其の雲門向上の旨を得ることを知る、惜むらくは人の之を嗣續するなきを。韶陽の道、遂に此の人に湮没す。

月堂昌和尚は妙湛に嗣ぐ、孤風嚴冷、學者其の門を得て入るもの罕なり。名利を歴董し、後南山の淨慈に終ふ。智門禪師の法衣、傳下して七世、昌既に没して則ち人の擔荷すべきなし。遂に擔頭を留めて交割す、今に現存す。故に瞎堂の遠、爲に起龍をなし、「三十載、龍を羅し鳳を打し、勞して功なし。佛祖の慧命は、塗足油の如く、雲門の正宗は折襪線の如し」の句あり、嗶呼悲しまざるべけんや。

龜山の光和尚、妙喜に、洋嶼に參する時、凡そ半年口を啓くの處なし。一日入室、喜問うて、「喫粥了也。洗鉢盂了也。藥忌を去却して一句を道

①慈航朴は無示介謀に嗣ぐ、謀は長靈卓に嗣ぐ、卓は靈源惟清に嗣ぐ、黃龍派。
②鄭峯は育王、長庚は太白即ち天童、佛髻は萬壽。
③擡は抑下なり、擡は托上なり。
④君子可八、君子は仁義禮智忠信孝悌の八徳を能くするの意、之に對して、烏龜忘八の語あり、馬鹿ものと云ふ心なり、此處、下手に繪ときすれば、生殺に墮す。
⑤深己庵は癡禪元妙に嗣ぐ、妙は寂室惠光に嗣ぐ、光は慈夢深に嗣ぐ、深は淨照信に嗣ぐ、信は圓照本に嗣ぐ、雲門宗。

①轡は、井戸のつさみの、深の字を踏む。
②月堂昌、佛行禪師と謚す、慧慧妙湛に嗣ぐ、湛は大通禪師善本に嗣ぐ、本は圓照に嗣ぐ、雲門宗。
③智門光禪師は、香林澄遠の法嗣、雲門の孫也。
④擔頭云々、法衣の傳授を止め、之を什器中に交割せしなり。
⑤塗足油は、四十二章經に、阿得池を見ることが塗足油の如しとあり、折襪線は、襪子の飾り糸にて能くされるもの。
⑥洋嶼は泉州にあり、山四もに圍んで、内に田疇數百頃あり、此嶼其内に突出す、山頂に螺殼あり(統志)、大惠衛陽に赴く時、暫く此に寓す。
⑦藥忌は此處、食ひあはせしと云ふが如し。

將し來れ。光曰く、「裂破。」喜色を壯にして曰く、「又者裡に來つて禪を説くや。」と、師言下に於て大悟し、遍體汗下り、遂に禮拜す。喜偈を以て印して曰く、

「龜毛拈得咲哈哈。一擊萬重關鎖開。慶快平生是今日。孰云千里賺吾來。」

光、投機の頭を作つて云く、

「當機一拶怒雷吼。驚起法身一藏北斗。」

洪波浩渺浪滔天。拈得鼻孔失卻口。」

喜、之を見て曰く、「此れ正に是れ禪中の狀元なり」と因つて號して光狀元となす。

自得暉和尚、長蘆祖照の席下（一）にあり、時に一窩蜂發す、衆皆散じ去る、唯だ師と宗白頭なるものと動かす、私かに謂つて曰く、「參禪は本生死に敵せんが爲なり、豈此の難によつて便ち逃避すべけんや。況んや我が色身又弱し、若し中路に至るも、也た則ち他の手に落ちん」と。賊既に至り、衆僧俱に散じ、唯だ暉のみ堂中に在つて坐禪するを見て、争ふて箭を以て之を射る。俱に中らず、暉寂然として動かす、最後の一箭袖より函櫃（二）を射透す。暉方に驚覺す、此に因つて頓病となる。宗白頭は庫司に坐す、賊見て遂に之を縛し、射殺せ

① 都から千里の遠方迄、おれをだまして、連れて来たとは誰れか言ふ。
② 自得暉は、天童覺に嗣ぐ、雲門宗。
③ 長蘆祖照は、法雲善本の嗣法なり、又雲門下。
④ 一窩は寇賊なり。
⑤ 宗白頭、名は嗣宗、亦天童覺に嗣ぐ。（續傳燈卷廿四）
⑥ 函櫃は單箱ならん。

んと欲す。傍に直歳の僧あり、再三近前して賊に白して代らんことを乞ふ。賊曰く、「汝は是れ他と何の眷屬ぞ。」僧曰く、「此の僧已に禪に參得し了れり。他時出で來つて大善知識となつて衆生を教化すべし、我れは未だ曾て參得せず、便ち死するも緊要なし、故に之に代らんと乞ふのみ。」賊其の言を奇とし、二人俱に許す。後に宗明の翠巖（三）に居り、其の道大いに振ふ。向に命に代るところの者亦座下に來る。宗常に謂つて曰く、「此れ乃ち再生の父母なり」と、之を信す。參禪若し正因を具せば、般若豈驗なからんや。

開善の謙和尚は建寧の人なり、初め京師に之き、圓悟に謁す、省發するところなし。後妙喜に泉南に隨ふ。喜徑山を領す、謙亦侍し行く。未だ幾くならざるに長沙に往いて紫巖居士張魏公の書を通せしむ。謙自ら惟ふて曰く、「我れ參禪すること二十年、迺として入處なし、更に此の行を作す、

① 宗、尊照、善權、翠岩、唯賢等に住す。（續燈）
② 張俊に與ふるの書を持參せしむるなり。
③ 竹原の傳は續傳燈卷卅一に載す、大惠の注嗣なり。

決定して荒廢せん、意行く無きを欲す。」と、友人竹原庵主宗元なるもの、乃ち責めて曰く、「不可なり、路に在つて參禪し得ざらんや、吾れ汝と與に往かん」と。謙已むを得ずして往く。路に在つて泣いて元（四）に謂つて曰く、「我れ一生參禪殊に得力の處なし、今又途路に奔走す、如何んぞ相應し去るを得んや。」元之に告げて曰く、「但だ諸方に參得する底、悟得する底、圓悟妙喜の汝が爲めに説得する底を將つて、都て理會するを要せざれ。途中にて替るべき底の事は、我れ盡く備に替り得ん、只五件の事あり、汝

に替り得ず、憫自家に祇當せよ。」謙曰く、「甚の五件の事ぞ、願くは其の説を聞かん。」元曰く、「著衣喫飯、屙屎送尿と、箇の死屍を拖いて路上に行くとなり。」謙言下に於て大悟す。覺えず手舞足蹈して曰く、「兄にあらすんば某甲如何して此の田地を得んや。」元乃ち曰く、「汝這回方に紫巖の書を通すべし、吾れは當に回るべし」と。元即ち建上に歸る。謙、長沙に到つて留まること半載、^①秦國夫人亦師に因つて大事を打發す、乃ち雙徑に還る。妙喜杖を策いて門に倚つて待ち、謙を一見して曰く、「建州子、這回別にし了れり、只管に老僧を怨むも、自らは是れ憫が時節未だ到らざるなり」と。是に於て日に玄奥を益す。後玄沙に出世す。示衆に云く、「竺土^②大仙の心、東西密に相付す、如何が是れ密付底の心。」良久して云く、「八月秋何れの處か熱せん。」又云く、「佛と説き法と説く、誰れか盲聾を感はず。性を論じ心を論ず、自ら寔陷に投ず。棒を行じ喝を行するは、勢に倚つて人を欺く。瞬目揚眉は、野狐の精魅なり。總に不與麼なるも、大いに聲を揚げて響を止むるに似たり。別に奇特あるも、也た是れ空を望んで啓告するなり。畢竟如何ん、白雲盡くる處是れ青山、行人更に青山の外に在り。」

① 秦國夫人姓は計氏、名は法眞、魏國公瓊の母なり、性嚴毅にして、子を教ふるに法あり、謙至るとき、魏公謂つて曰く、老母修行四十年、只此一着を欠く、且く留つて早晩に道話せよと、謙爲めに拘子佛性の話を以して、遂に省發す。(善女人傳卷上抄出)

② 竺土大仙は釋尊なり。

③ 正堂明辨禪師は、佛眼遠の法嗣。

辨正堂は佛照に嗣ぐ、初め道價振はず、蓋し初機渠れを識ること罕なり。家風聲令、衆皆之を畏懼

す。凡そ供に遇ふの日、但だ^①挂牌すること一次なり。主事之を白す、辨曰く、「我れ已に挂牌したるぬ、如何ぞ又虚しく常住を費さんや。」^②金剛圈、栗棘蓬すら、且又吞透するを會せず、恰も家常飯を要するや。」主事敢て進語せず。後因に達磨を贊して云く、

① 昇元殿前懷懼。洛陽峰畔乖張。

皮髓傳成二話霸。隻履無處埋藏。

嘆。

不是一番寒徹骨。爭得梅花撲鼻香。

雪堂、見て之を奇とす、曰く、「先師猶ほ此の人の在るあり、只此の贊を消して、以て天下の人の舌頭を坐斷すべし」と。是れによつて禪僧競うて奔湊す。後、雪の道場山に居り、衆五百に滿つ。

③ 竹原庵主は建寧の人なり、出でて妙喜に參す、旨を得るの後、竟に桑梓に歸り、苜を結んで韜晦す。諸方より累に請すれども出でず。嘗て垂語して云く、「諸方の爲人は、皆是れ釘を抜き、概を抜き、粘を解き、縛を去る。我が這裡の爲人は、一味に釘を添へ、概を添へ、粘を加へ、縛を加へ、深潭裡に送向して憫をして自ら理會せしむ。」と、又曰く、「參禪は這の一著子に透徹して始めて得べ

① 入室階上の牌を挂くるなり。

② 我已に挂牌し了れりは、已に百味の飲食を供養せり。

③ 金剛圈は鐵丸と見てよし、栗棘蓬は栗の「い」がなり。

④ 梁武の昇元殿前にて蓋聆し、洛陽嵩山にて威服。乖張は正反の文字なれども、此處に張の字を偏用せるが如し。

⑤ 竹原の傳は會元并に建州廣澤錄卷上に出づ。

⑥ 桑梓は詩經の語、故郷なり。

⑦ 脚跟下の紅線、男女の婚姻は、天仙赤繩の纏縛にて定まる、之を脚跟下の紅線と云ふ。

し。大法を悟り了つて明かならざるもの固に之れあり。大法明かなりと雖も、^①脚跟下の紅線不斷なるもの、比々皆是れなり。諸方恣麼に道ふを聞いて、盡く老僧を罵つて云ふ、「既に是れ大法明了す、又安んぞ脚跟紅線不斷なるを得んや」と。他を怪み得ず、渠が這の一解を欠くことあるが爲めなり。儘教他の疑着するを。」又曰く、「者の一些子、恰も人を殺すの漢に撞着するが如くに相似たり。爾若し他を殺さずんば、他便ち爾を殺さん。奇なるかな、大丈夫の見解、此くの如きなり。」し。

水庵一和尚は婺の東陽の人、外行、狎穢なり、叢林之を一槌と謂ふ。月庵の果に參す。果嘗て雲門の語墮を參せしむ。之を詰る、一日下語して云く、「靈山受記須是和尚始得。」し。又嘗て頌して曰く、

「二八佳人美態嬌。繡衣輕整暗香飄。
偷身華圃徐々立。引得黃鸝下柳條。」

月庵之を奇とす、後同列と和せず、人の暗計之を擠するに遭ふ。月庵其の言を信じ、院を指出す。行くに臨み、偈を書して之を譏つて曰く、

「稽首月庵藏裡佛。黃金妙相實堪觀。
白面夜叉七八箇。推轉如珠走玉盤。」

後、台の慈雲に出世し、佛智の嗣となる、蓋し參政錢公の請に従ふなり。錢公は佛智に於て俗門

① 物體は兼心粗雜なるを云ふ。
② 是非はさて置き、痛快の詩なり。
③ 佛智端裕師は、圓悟に嗣ぐ。
④ 錢端禮字は處和、松隱と號す、仕へて參政に至る、嘗て護國の元に參す(居士分燈卷下)

の弟昆たり。然れども叢林の中亦之を知るものあり。室中常に「西天の胡子甚によつて鬚髮無き。」の話を以て學者を驗す。

如無明は三衢の人、雲蓋の智に參じ、汾陽の十智同眞の話を悟る。凡そ禪を説けば、便ち十智同眞を説く、叢林號して如十智と爲す。後道場に住す、水庵圓極皆之に依る。故に圓極嘗て之を贊して曰く、

「生鐵面皮難三漆泊。等閑舉步動乾坤。
戲拈十智同眞話。不負黃龍嫡骨孫。」

後に思溪の圓覺に終ふ。其の塔存す。

西禪の淨此庵、妙喜に參じ、大發明あり、宗眼明白なり。嘗て衆に示して云く、「善く鬪ふ者は其の首を顧みず、善く戰ふ者は必ず其の功を得、其の功既に獲ば、坐ながら太平を致す、太平既に致さば、枕を高くして憂なし。三尺の劍を拈するを罷め、一帳の弓を弄するを休め、馬を華山の陽に歸し、牛を桃林の野に放つ。風時を以てし、雨時を以てす。漁人は歌ひ、樵人は舞ふ。然も與麼なりと雖も、堯舜の君は猶ほ化の在るあり。争でか似かん、乾坤收不得、堯舜名を知らず、渾家興亡の事に管せず。偏に雲に和して洞庭を占むることを解せんには。」と。又曰く、「口を閉却して時々説き、舌を截斷して間歇無し。最奇絶眼中の屑、既に是れ奇絶、

① 如無明、水庵、圓極、皆前出、雲蓋智は白雲端和尙に嗣ぐ。
② 周の武王、殷に克つて凱旋し、馬を華山の南に歸し、牛を桃林の野に放つ、天下既に太平復た之を用ひざるなり。(書經)

什麼として眼中の屑となる。屑々々の時了すべきなく、玄々々の處亦須らく阿すべし。」

顏中庵は川の人、久しく圓悟に參す。一日古今を商確す、師毎に仁に當つて譲らず、悟喝して曰く、「汝參禪して正悟を求めず、只管に口に信せて亂道す」と。顏覺えず汗

下り、堂に歸りて坐禪し、且に徹して寐ねず、忽然猛省し、走つて圓悟に見え、議論鋒發、略礙滯なし、悟即ち點頭す。顏曰く、「作日も亦是くの如く祇對す、和尚甚として肯はざる、今日も亦是くの如し、又卻つて點頭す。」

悟叱して曰く、「癡漢、汝昨日は難忘想の心なり。顏作禮して云く、「元來釋迦老子神通なきなり」と。悟蜀に歸つて後、妙喜に依つて向上の巴鼻を

徹證し、衆に徑山に首たり、名叢林に播く。後に十山に出世し、次に東林に居る。嘗て衆に示して云く、「祖師の巴鼻、列聖の鉤鉤、耕夫の牛を駈り、

飢人の食を奪ふ。眈々たる虎視、凛々たる全威、商君の法の如く、孫武の

令の如し。犯すあれば死あり、久しく沙場に戦ひ、七四の機を具し、風を望

んで勝を決し、進退存亡を知るもの、聊か一線を通ずるを徐非す。若し是れ己眼未だ開かず、蝦を

以て目となす者、只管に隊を逐ふて飯を喫せば、自在の分無けん。如今定奪底の衲僧あるなしや。山

僧が性命盡く諸人の手裡にあり。」又曰く、「法に定相なし、物に遇ふて斯に形る。事に固必なし、

功成つて宰せず。有時は風高うして寥廓、得て親疎すべからず。有時は己を退けて他を屈し、得て玩

狎すべからず。恁麼は則ち易く、不恁麼は則ち難し。世法佛法俱に戲論と

なる。須らく知るべし、老僧は者裡に在らざるを。且く道へ、甚麼の處にあ

る。箴を披して側立す千峰の外、水を引いて蔬に澆ぐ。五老の前。」

全無庵は姑蘇の人、治父。川金剛の小師なり、久しく育王の佛智に依

り、慈覺の眞と友たり、古今を商確して明かならざるなし。唯だ室中の機

縁發せず、晝夜哀泣睡らず、未だ嘗て人と世間の話を説かず。是くの如き

もの累年、智一日室にあつて擒住して問うて曰く、「有句無句は藤の樹に倚

るが如し、道へ道へ。」全口を開かんと擬す、智擘面に一拳す。豁然として

大悟し、連叫數聲、「屈々」と。智使ち放つ。頌あり、曰く、

「鼓笛轟々祖半肩、龍樓香噴益州船。

有時著脚弄明月、踏破五湖波底天。」

出世遍く大利を匡し、虎丘に終ふ。

尤延之侍郎、宗門に於て甚だ意を注ぐ。初め郎中より出で、台州に守

たり。朝覲の次、孝宗忽ち問うて曰く、「卿南台に去る地里圖中、何の勝槩がある。」尤奏して曰く、

國譯叢林盛事 卷上

三七

① 仁に當つて師に譲らずは論語の語なり、爲すべきに當つては願慮せぬなり、高山寺の三綱鐘にも蒙叟當仁の句あり、又此の意。
② 元來釋迦老子云々、お釋迦様は六通ありと云ふが、頓と他心通は零なりと、圓悟を謂りしなり。
③ 商君孫武云々、商君名は鞅、襄灰の令を立て、刑を論じて渭水盡く赤し。孫武は吳王に事へ、三令五伸の後、美人を斬つて、軍令を明かにす。

④ 廬山に五老峯あり。
⑤ 無庵法全禪師は蓬庵端裕に嗣ぐ、俗は圓悟に嗣ぐ。
⑥ 川金剛は躡庵成に嗣ぐ、成は普融平に嗣ぐ、平は慈普眞如に嗣ぐ、如は翠岩に嗣ぐ、岩は慈明楚圓禪師に嗣ぐ、川老金剛經を注し今尙世に行はる。
⑦ 天笠にては、問訊せんとする時、右の肩をかたむく。
⑧ 尤表字延之、自ら蓬初と號す、官は禮部尙書に終ふ、文簡と諡す。孝宗嘗て遂初老人の四字を書して之に賜ふ云々。(佛法金湯編卷十四)
⑨ 佛法金湯編には、太平洪福國清萬年とあり、寺觀を擧げて天子を祝福せるなり。

「國清萬年。」孝宗大いに喜ぶ。又戲に問うて曰く、「朕聞く、方廣に五百の應真大士あり、元來是れ強人、忽然として一時に出現せば、卿何の法を以て之を治めん。」尤覺えず拳頭を堅起して云く、「臣に金剛王寶劍あり。」孝宗喜んで天顔を動かす。尤既に台に至り、寛慈を以て民を御す、民甚だ之を愛す。但だ南台は旱澇得易し。尤嘗て詩を作つて曰く、

「來雨一朝成汗漫。 纔晴三日人憂乾。」

向來盡道天難作。 天到台州分外難。」

然れども黃堂の政暇、多く報恩を過ぎ、佛照と道を論ず。佛照、後に冷泉の請に赴く。繼いで伊庵の權を請じて住持せしむ、衆常に四五百。

無著道人妙德は、蘇太州の孤女なり、諸大老に徧參し、後妙喜に徑山に謁す。因に上堂、舉す、「石頭道ふ、恁麼も也た得ず、不恁麼も也た得ず、恁麼不恁麼は總に得ず」と。時に馮濟川侍郎、座下に在り、忽ち省あり、方丈に趨き告げて曰く、「和尚石頭の話を舉す、揖會せり。」喜曰く、「侍郎作麼生か會す。」馮云く、「恁麼も也た得ず、蘇嚕婆娑訶、不恁麼も也た得ず、悉唎婆娑訶、恁麼不恁麼總に得ず、蘇嚕悉利婆娑訶。」適々、總外より至る、喜、

① 強人は強盜なり。
② 旱澇得易しとは、詩中に歌へる如く、旱魃にも霖雨にも、逢ひ易きなり、汗漫は見渡す限り、水計りなり、古書に、「涯淡を知るなきを、汗漫と云ふ」とあり。

③ 佩文韻府に、黃堂見えず、蓋し公堂と同意ならん。
④ 伊庵權は全無庵に嗣ぐ、無庵は佛智裕に嗣ぐ、楊岐下。
⑤ 馮揖字は濟川、蜀の遂寧人、不動居士と號す、揖建炎の後、名山鉅刹、藏經の殘欠を憂ひ、私費を以て印施して之を補ふもの、五千餘卷、補足するもの四十八藏。(佛法金湯編卷十四)
⑥ 郭象、莊子を注し、本文と光を争ふ、今世に存する郭注は是れなり。

馮の話を舉して之に似す。總笑つて曰く、「向來郭象莊子を注す、然れども有識の者謂ふ、莊子郭象を注すと。」喜私かに之を識す。次の日入室す、喜問うて云く、「古徳門を出でず、甚によつて莊上に在つて秘を喫す。」總云く、「和尚某を放し過さば、即ち和尚に向つて道はん。」喜曰く、「我れ爾を放過す、試に道へ見ん。」總云く、「某甲、和尚を放し過す。」喜曰く、「油糍を争奈何せん。」總喝一喝して出づ。乃ち投機の頭を作つて曰く、

「驀然撞着鼻頭。 伎倆水消瓦解。 達磨何必西來。 二祖枉費三拜。」

更問如何若何。 隊艸賊大敗。」

喜、鼓を逆つて、印證して曰く、

「汝既悟得祖師意。 一刀兩段直下了。 臨機一々任天真。 世出世間無缺少。」

我作此偈爲證明。 四聖六凡盡驚擣。 休驚擣。」

碧眼胡僧猶未曉。」

瓊首座は四明の人、徧く諸老に見え、象骨に留まること四十年、山を出でず、冬夏一衲、人能く之を親疎するなし。鐵庵に侍す、闔の帥趙汝愚、其の風を仰ぎ、累りに大利を虚しうし、其の出でんことを請ふ、堅臥して應せず。然れども一見せんことを須欲し、鐵庵に托して、計を以つて其を誘つ

⑦ 驀然云々、眼から火の出る様に鼻柱をがつんと打付けた、天地晦冥、乾坤失却の場合なり、下の五句は此句より出づ。
⑧ 象骨は嚙峰なり。

て府に入れ、大いに供養を作し、面のあたり其の請を受けんことを囑す。瓊志を乗つて渝らす、趙公愈々敬し、乃ち詩を以て歸山を送つて云く、

萬仞峰頭雪作堆。一枝寒木倚巖隈。

青々不改四時操。任待春風吹不回。

府判以下の幕職皆賀す、其の法門を光明にすること少からず。夫の今の書を持し、院を覓めて住するものと、日を同じうして之を語るべからざるなり。

李侍郎德邁、南台に守たるの日、鴻福萬年薦善を以て、拙庵伊庵鐵庵の三大老を請じて出世せしむ。一時の龍象駢集す、後國清を以て、密庵を請す。密庵は當時衛の烏巨に住す、是れ皆専ら、應庵の爲めにするの故なり。開堂に及び、各々稟くる所あり、之を信す、此の事各々當人にあり、故に人情を以て悦を士大夫に取るべからざるなり。後に李公番陽に歸り、閑居の日、嘗て人に語つて曰く、浩、平生仕路に在りと雖も、家貧にして以て自ら給するに足らず、資の以て人を濟ふべきなし。唯丹丘に在つて、三員の善智識を請ひ得て出世せしめ、佛の慧命を續ぐ。其の功德思議すべからざるかなしと。

佛照光初め、仰山庭野庵の會中にあり、台州鴻福の命を受け、道に三衢に遊び、烏巨に抵る。密庵尙を以て之を送る、以謂らく、必ず應庵に承けんと。尙に曰く、

瞎驢生得瞎驢兒。齷齪聲名徹四維。

更把少林無孔笛。逢人應是逆風吹。

斐の寶林に抵るに及び、時に月庵の弟子遠和尚住す。復た雲門語墮の語を擧して、之を判せしむ。意は其の月庵に承嗣せんと謂ふなり。末に及び丹丘の開堂、恰も妙喜に嗣ぎしかば、叢林皆之を短つて以謂らく、妙喜の門戸高大にして然りと。初めより、冤に頭あり、債に主あるを知らざるなり。

塗毒和尚、常の華藏に住す。一日忽ち頭痛すること刀もて劈くが如し、三日に連つて已ます、門弟子以謂らく、「其れ腦癰を生せり」と。既にして痛み止み、乃ち伏犀骨聳起して挿むが如きを見る。旬日ならざるに、詔下つて雙徑を領す。蓋し人晩成、果して換骨の兆あり。將に行かんとす、

雪林慈光なるものあり、

⑦ 此詩合作なり、一枝寒木は、瓊首座に擬す。

⑧ 李侍郎名は浩、普燈、分燈、金湯、皆字は德邁に作る。按するに遠と邁と未だ何れか是なるを知らず。

⑨ 拙庵は大惠に嗣法す、伊庵は無庵全に嗣ぐ、鐵庵は月庵果に嗣ぐ。

⑩ 密庵或健禪師は應庵に嗣法す。

⑪ 李浩は應庵の指揮により此事を發明す、其恩に報する爲めに、拙庵、伊庵、鐵庵、密庵を名刺に請ぜしなり、蓋し浩は此四師、皆應庵に嗣法すべしと思ひしなり。

⑫ 各稟くる所ありは、三人各師承ありて應庵に嗣がざりしなり、應庵に嗣ぎしは密庵一人のみ。

⑬ 庭野庵は、月庵に嗣法す、正誤宗派には、旋塔に作る、何れか是なるを知らず。

⑭ 瞎驢云々、めくらの馬が、めくらの子を産んだ、そこで、ぢいむさき評判が四維に響いた、齷齪はぢいむさき也、普通にはこせこせするを齷齪と云へども、少しく別なり。

⑮ 冤驢には相手あり、借金には金主あり。

⑯ 原本には此の下に注あり。
⑰ 塗毒策は典午游に嗣ぐ、龍寶開山大燈國師も、亦此事あり、一夜にして伏犀聳起す、伏犀とは天頂骨の聳起する處、犀角の潜伏するが如きを云ふ、犀は頭の上一角あり。

⑱ 雪林慈光、宗流、佛智の下に此人を載せず。

久しく佛智に依り、歲晚雙誓して慧山に寓止し、三偈を以て五峰に送上す。其の二に曰く、
① 塗毒離微及盡。典午佛祖俱亡。 叢林千古耿光。

② 台嶺奇峰壁立。大湖雪浪華飛。 試問五湖禪衲。 如今天下有誰。」

③ 衰殘正賴餘潤。紫泥撥我賞音。 附驥觀光喝石。攀龍徒有此心。」

歸雲本和尚は台の人、晴堂の遠に嗣ぎ、金陵の長竿より疎山に遷り、道聲籍甚なり。狀元劉堯夫嘗て道を本に問ひ、氣義相得たり。上堂あり、云く、

「一棒下に痛く領じ將ち去り、樹頭驚起す雙々の魚、一句下に折合し得來つて、石上に進出す長々の筭、便ち乃ち用ひて用ふる所なく、常に無盡の法輪を轉す。爲して爲す所なく、普く無邊の心相を現す。古人力を著くる處なき、便ち了に箇の影子を劃して道ふ。一月普く一切の水に現じ、一切の水月一月に攝す」と。佛法若し此くの如くならば、又歸雲が出で來るを要して什麼をかせん。大衆良久卓拄杖して云く、「如今坐立儼然たり。千鈞錐を立せざる處に向つて立地に證得するや。大海若し足ることを知らば、百川應に倒流すべし」と。下座。叢林俊篇あり、當世の尾を

- ① 第一首は塗毒を歌ふ、典午は塗毒の師、游和尙なり。
- ② 第二首は勅住地の勝境を歌ふ。
- ③ 第三首に自己送別の感を歌ふ。

搖し、憐みを乞ふ者を論議す、詞意甚だ超卓なり。圓極の峯禪師親しく爲めに之に跋す、後輩の入衆知らざるべからず。其の文に曰く、「本朝の富鄭公弼、道を投子の顒禪師に問ふ、書尺偈頌凡そ一十四紙、台の鴻福兩廊の壁間に碑す。灼として前輩主法の嚴と、王公貴人信道の篤きとを見るなり。鄭國公は社稷の重臣、晩歲に、向ふことを知ること此くの如し。而して顒も必ず大いに人に過ぐる者あらん。自ら謂ふ、顒に於て警發するところありと。士大夫の中此の道を誦信して、能く齒を忘れ、勢を屈し、奮發猛利、徹證を期して後已むこと、楊大年侍郎、李文都尉の、廣慧の璉、石門の聰并に慈明の諸大老に見ゆるが如き、激揚酬唱、班々として諸禪書に見ゆ。楊無爲の白雲端に於ける、張無盡の兜率の悦に於ける、皆 扣關擊節、源底を徹證す、苟も然るものに非ざるなり。近世 張無垢侍郎、李漢老參政、呂居仁學士、皆妙喜老人に見えて堂に上り室に入る、之を方外の道友と謂ふ。愛憎逆順、雷揮電拂、世俗を脱略す。拘忌をもて觀る者は枉を斂めて辟易し、滌痰を窺ふなし。然れども士君子空閑寂寞の濱に相求むるは、心を禪寂に棲ましめ、本有を發揮せんと擬するのみ。後世は 先徳の

① 向ふことを知るとは、自己の進むべき方向を知るなり、本來の面目を尋覓するを云ふ。
② 楊億、字は大年、建州蒲城の人、景德傳燈録の序を製す。李文都尉は李遵局なり、前出。
③ 楊傑前出、張無盡は、天覺なり、護法論を著す。
④ 扣關擊節は、宗旨を穿察するを云ふ、關節は至要の處なり。
⑤ 張橫浦、無垢と號す、後に話あり。李邴字は漢老、官は參政に至る。呂本中字は居仁、江西詩派圖を作り、山谷を推して詩祖となす。(佛法金湯、居士分燈、普燈等に詳かなり)
⑥ 世俗を脱略す、習俗に泥まざるを云ふ、毫も挟む處なきなり。
⑦ 先徳の楷模とは先徳の人を接するの模式、道に當つては一步も假借容赦せざるを云ふ。

楷模を見ず、専ら諛媚を事とし、曲げて進顯を求む。凡そ住持を以て、名を薦めて長老と爲すもの、往々に刺に書して以て門僧と稱す。前人を奉じて恩府と爲す、招提の物を取つて苞苴し、佞を獻す。識者憫笑すれども、恬として恥を知らず。嗚呼吾が沙門釋子、一餅一盞、雲の如くに行き、鳥の如くに飛ぶ。凍餒の迫り、子女玉帛の戀あるにあらず。而も腰を折り、箠を擁し、酸寒跼踖、自ら賤辱を取ること此くの如きを欲するや。恩府と稱する者は一己の私に出で、依據する所なし。一妄庸之を其の前に唱へ、百妄庸之を其の後に和し、争ふて之を奉じ、自ら之を卑小にせんと擬するのみ。風教を削弱するは、佞人より甚だしきはなし。佞敏は實に姦邪欺偽の漸なり。端人正士と雖も、巧に其れが爲に入れらるれば、則ち身を不義に陥れ、徳を救ふなきに失ふ、哀まざるべけんや。破法の比丘は魔氣の鍾るところにして、誑誕自若たり。詐つて知識の身相を現じ、禪林の大老を指して之を師承となし、當路の貴人に媚びて之が宗屬となり、不請の敬を申ねて、壞法の端を啓き、白衣床に登つて其の下に膜拜し、曲げて聖制に違ふて、大いに宗風を辱しむ。吾が道の衰極此に至る。嗚呼天誅鬼録、萬死も奚ぞ其の佞者を贖はんや。嵩禪師の原教に言へるあり、「古の高僧は天子に見えて名いはす、制書に預るときは、則ち公と云ひ、師と曰ふ。鐘山の僧遠は

② 箠を擁して前驅するは、敬を表するなり、道路を清むるの意、支那戰國時代でありし故事。
 ③ 不請の敬は、頼みもせぬ敬禮なり。
 ④ 俗漢床に据して、紫衣の長老、其下に膜拜す。
 ⑤ 明教嵩禪師、輔教篇を著す、内に原教あり廣原教あり、此語は廣原教第十七篇に出づ。
 ⑥ 鐘山の僧遠は、齊の高祖其寺を臨訪せしも敢て禮迎せず。

變輿、門に及ぶも牀坐して迎へず。虎溪の慧遠は天子潯陽に臨んで詔すれども出でず。當世其の人を待ち、其の徳を尊ぶ、是の故に聖人の道振ふ。後世の其の高僧を慕ふ者は、卿大夫に交つてすら、尚ほ下士の禮に預るを得ず、其の出其の處、庸人の自得にだも若かざるなり。況や僧遠の天子を見るが如きをや、況や慧遠の自若の如きをや。吾が道の興り、吾人の脩を望むも其れ得べけんや。其の教を存するも、其の人を須たすんば、諸を存するも何を以て益せんや。此を惟ふて未だ嘗て涕下らすんばあらず」と。禪師は熙寧十五年に没す。其の書大法衰替して、人の荷負するなきを憂と爲す。頗る波旬の今日我が法中に入るが如く、詐妄自ら欺き、諛佞を以て計を得たりと爲す。師子身中の蟲の、自ら師子身中の肉を食ふが如し。此の書作らすんば可ならんや。首楞嚴に曰く、我が滅度の後、末法の中、此の妖邪多く世間に熾盛に、潛匿姦欺、善知識と稱す云々」又曰く、「云何ぞ賊人我が衣服を假り、如來を稗販し、種々の業を造り、皆佛法と言ふ。卻つて出家具戒の比丘を非つて、小乘道となし、是に由つて無量の衆生を疑誤し、無間の獄に墮す」と。淳熙丁酉、余事を顯恩に謝し、平田西山の小塙に寓居す。以みるに日近の見聞、事に矯僞多く、古風彫落す。吾が言之れが輕重を爲すに足らず、聊か書して以て自ら警むと云ふ。歸雲如本書す。圓極の岑の跋に云く、「佛世の遠き、正宗淡薄にして、

① 慧遠は、晉の安帝、鄂渚より都に還るに當つて、法駕潯陽を過ぎ、詔して頓所に見えしむれども、敢て山を下らず。
 ② 稗販は安賣するなり。
 ③ 日近は近日と同じ。
 ④ 蠻子は、あばれものなり(俗語解)、今の外道と云が如きなり。

澆漓の風行はれて至らざる所なし。前輩は彫謝し、後世は聞ゆるなし、叢林の典刑幾んど地を掃ふに至る。縦ひ扶救の者あるも、返つて以て蟹子と爲すなり。余疎山の本禪師の伎を辨するを觀るに、詞遠くして意廣く、深切著明、極めて能く其の病を箴す。第だ妄庸の輩は、知識暗短にして、心を邪佞の域に醉しむるが爲めに、必ず醜翻を以て毒藥とせん。淳熙壬寅上巳、圓極の彦岑、江左の五峯に書す。

懶庵樞和尚は、黃龍下の尊宿にして、道場の慧に承嗣す。初の孝宗皇帝佛乘に向ふと雖も、未だ宗門下に奇特の事あるを知らず、皆是れ此の老の引進なり。故に瞎堂拙庵然も後に之を印可す、其の來歴を知らんと要するに、皆樞の力なり。樞、事を靈隱に謝し、後に明教の永安蘭若に居り、逍遙自適す。絶句あり、壁に題して曰く、

雪裡梅花春信息。池中月色夜精神。

年來不三無嘉趣。莫把家風舉示人上。

其の胸次を見るべきなり。

疎空谷は餘杭の人なり、象田の演の座下に在つて、維那に充てらる。人となり清苦貧甚だし、冬は則ち蘆華絮に當つ。本色の叢林に非ざるよりは、斷じて複を放たす。故に演爲に其の道號を頌して

曰く、

谷空空谷谷空々。空谷全超萬象中。流水落華渾不見。

清風明月却相容。

後に天童に在つて、流に沿ふて屋を縛し、號けて弔古と云ふ。多く兄弟あつて、其の勝遊に陪す。余時に玉几の拙庵老人の會中にあり、頌を以て寄せて曰く、

聞君縛屋傍山阿。遠弔龍湫諾詎羅。

未三必將身潛碧嶂。且圖繞足向清波。

韻傳三空谷一人難到。門掩三山華雪不經過。

我待三秋風洗巖壑。杖藜相與傲烟蘿。

疎清の氣骨に入るを以て、烟霞の痼疾を成し、遂に太白に終ふ。

五臺草衣の文殊の像は、本朝元豐の間、大尉呂慧卿、邊を成るに因つ

て臺山に遊び、其の貌を見しより始まる。嚴たる童子、體黒うして髪を被り、蒲を以て足より纏ふて肩に至り、右膊を袒ぎ、手に梵筴を執り、呂と華嚴の主旨を論ず。而して呂は其の大士なるを知らず、呂を呵して凡情を以て聖意を測ると云ふに及び、呂方に寤つて下拜す。而して童子乃ち文殊の形と云ふ。

① 龍、晦堂、靈源清、長靈守卓、無傳居士、懶庵道樞（正源宗派）。
② 印可とは瞎堂の遺、拙庵の光等の孝宗を印可せるなり。
③ 雪裡の梅は、春の消息を漏し、池中に落つる月は、夜の精神を輝かす、よい氣味ではないか、然し人には言ふなと。
④ 複を放たすは、挂搭せざるを云ふ。

① 雁蕩山の龍湫に、諸詎羅漢住す。
② 呂慧卿居士、字は吉甫、法界觀に於て研磨年あり、後李長者の合論を見て、心地豁然たり、投機の偈に曰く、文殊を見んと欲する久し、心を馳せて五臺に向ふ、誰か知らん黃卷の上、妙光を指出し來る。（普燈錄卷二十二）

し、金毛に跨り、隠々として雲中に入る。呂是れより悔恨、家に歸り月を逾えて、鬱々として樂ます。後家人告ぐるに至誠懇惻なれば、聖容必ず現せんと云ふを以つてす。呂其の言の如く、乃ち誠を竭して過を悔い、必現を期して後已む。一日早起す、乃ち是れ大士香几の間に現じ、呵して云く、「胡爲ぞ住相貪著の甚だしきや。」呂曰く、「正に世人の咸く大士示化の眞容を見んことを欲するのみ」と。急に畫工に命じて之を圖せしむ。頃刻に見えず、其の像遂に京洛の間に傳はり、今は在處に或は之を見る。余一本を畜ふ、乃ち吳の僧梵隆の筆、終身以て之を奉せんと期す。嘗て記す、典午和尚の一贊最も佳なり。其の詞に曰く、^①「潦倒たる南泉道理を識らず、大小の曼殊師利鐵圍山底に貶向す。今に至るまで頭又梳らず、面も又洗はず。一箇の渾身艸裡に坐在す。鈍根の呂公猶は暫地ならず、金毛を指出して當下に己に迷ふ。靠倒了や。蘇盧噫喇。」

①今は在所に之を見る云々、日本に傳はれる草衣の文殊には、雪嶺和尚の贊あるもの多し、曾我蛇足、狩野元信等も亦贊て之を描く。
②潦倒又郎當に造る、三郎郎當の語あり、落ちぶれたるを云ふ。
③貶向、南泉云く、文殊贊賢、昨夜佛見法見を起す、各三十棒を與へて、二鐵圍山に貶向す。
④日本に傳はれる水墨觀音に、宋畫多し、然れども多くは畫者の名を識さず、大抵之を徽宗皇帝の筆と傳ふ、何ぞ知らん、當時此種の畫風流行して、世の尙好に投ぜしを。

「水波不動。火光不與。梵隆妙絕。授之德明。」

水墨觀音の像、唐の吳道子・李伯時より後、唯だ吳の僧梵隆茂宗なるもの尤も妙絶となす。故に孝宗嘗て之に贊して曰く、
「出意作觀音。筆間造玄妙。會得眞面目。慧光應徧耀。」
若以二相貌一求。觀相生善念。念々既純全。
眞相繼斯現。」
蓋し中官黃德明に賜ふなり。^①隆に小師至叶あり、亦善く之を作る。近々圓の僧德源あり、筆猶は妙に臻る、故に當時の巨公謝丞相・趙大師彦逾の如き、皆其の像に贊せしあり。謝して曰く、
「收視返聽。結跏趺坐。逸出筆端。以色見我。千百億身。」
無不可。不可。重說偈言。依然話墮。」
趙曰く、

①懶庵需は天惠に嗣ぐ。
②罪人は、早く決斷せぬと、其内に色也思案して、吟味が長びく。

柏堂雅禪師は圓の人、懶庵の需に嗣ぎ、初め紫箚に住す。佛照の冷泉に居るを以て、叔姪の故に、特に往いて之を輔佐す。座元に居るに二年、兄弟多く之に歸す。然れども雅、剛正にして佛照之を憚る、後に龍翔の靈巖に住し、其の道大いに振ふ。衆に示して云く、「瑞峯頂上棲鳳亭邊、一杯の淡粥相依り、百衲頭を蒙ふて打坐す。二祖禮三拜、位に依つて立つ。已に是れ周遮、達磨老臊胡、髓皮を分盡す。一場の狼藉、自餘の輩、何ぞ道ふに足らんや。柏堂與麼に道ふ、還つて諸方の檢責を免れんや。也無きや、具眼のものは辨取せよ。泊んと合に、^③四に停めて智を長すべし。」又曰く、「紫巖拳を伸べ、筍梢を破る。楊花飛び盡して綠陰

交る。分明なり西祖單傳の句、黃鳥は留鳴し、燕巢に語る。箇の裡に見得徹し信得及して、若し諸方に到らば、決定して明窓下に安排せん。龍翔門下は直に是れ一槌に槌殺せん。何が故ぞ、是れ人と共に住し難きにあらず。大都縑素分明ならんことを要す」と。

廣教會 和尚は川の人、石頭の回に嗣ぐ。初め此庵に護國に依る、行者の鐵板を幹するに因つて、皆頌あり、送行す。會曰く、

「空奮雙拳一與麼去。打成一片早回頭。」

歸來挂在三峯頂。惱亂春風卒未休。

兄弟皆之を愛す。後に雲居の薦福に住し、常に三二百の衆を安す。蓋し根本端正なれば、下梢決定して殊勝なり。

三峯の 印禪師は婺州の人、見地超絶なり。嘗て百丈野狐の話に頌して曰く、

「不落不昧評人之罪。不落無繩自縛。」

可憐柳絮逐春風。到處自西還自東。」

叢林多く之を傳ふ。淳熙の初め、余山陰の能仁にあり、今の瑞巖葦堂潤公と同じく往いて渠が之を擧するを見る、恨むらくは其の人を見ざることを。

① 五祖法演一南堂靜一石頭回一廣教會。
② 石頭回禪師は石工なり、南堂靜問うて曰く、今日破磧、明日破磧、死生到來せば、作麼んが折合せん、回愕然として措くことなし、後に趙州勸婆の因縁を見、石を打つて火を發するによつて、忽然省徹す。(錦江禪燈卷七)
③ 此偈轉結妙、讀者若し此間の消息を知らんと欲せば、又是れ春風に惱亂して卒に未だ休せざるなり。○起承の二句は其意自ら明かなり。打成一片は、募緣の功成るを云ふ。
④ 佛眼一高庵一大林一三峰印。後因に塗毒老人の語を見

る、曰く、

「乘大火炬。燒太虛空。達磨不會。眼睛耳聾。」

尤も印の頂額上にあつて、筋斗を打するのみ。

自得陣、長蘆祖照の會中にありし頃、衆寮に竹を栽う。陣忽ち一頰を成して云く、

「高節深雲藏不を得。幽人移向矮窓前。」

靈根瑞葉驚群目。將著清風動碧天。」

一時の作、偶然より出づ、人已に争ふて之を誦す。晩年に及んで乳竇に居る。已に八十餘、忽ち旨を奉じて淨慈に住す、人皆以て語識となす。衆を辭するに及び、上堂に云く、「一たび山中に住してより四十年、老來日として閑を思はざるなし。今朝誤つて君王に詔せられ、珍重す禪流故關を出づ。雲無心にして岫を出で、鳥飛ぶに倦んで還るを知る。他年意を得て歸來せば、賓主相忘れん松石の間」と。南屏に來るに及び、大いに曹洞の道を興し、後雪竇の雙塔に歸つて終焉の計を作す、果して去時の語に應ず。謂ゆる心に在るを志となすものなり。

① 筋斗を打すは、さか立ちする。
② 語識とは、清風を將著して碧天を動かすの語を指す、其元は竹梢の清風、拂々として搖動するを歌ひし迄なれども、其れが偶然にも天聽を動かすと云ふ風に識をなせしなり。
③ 衆を辭すとは雪竇の退院上堂なり。
④ 心聞曇眞禪師は、青王謀に嗣ぐ、謀は長靈卓に嗣ぐ、卓は黃龍清に嗣ぐ。

鑑岐庵と賢在庵と俱に心聞の賁に嗣ぐ。鑑嘗て「劇寶國王師子尊者を斬る」の公案を頌して云く、

①尊者何嘗得二蘊空^一 罽賓^一及下^一斬^一春風^一

②桃花雨後^一態零落^一 染^一得^一一^一溪流^一水^一紅^一

叢林爭^一て之^一を誦^一す。乃^一ち賢^一も勘婆^一の話を頌^一して曰^一く、

③氷雪^一佳人^一貌最^一奇^一 常將^一玉笛^一向^一人^一吹^一

④曲中^一無^一限^一華心^一動^一 獨許^一東君^一第^一一枝^一

妙喜^一一見^一して、大^一いに稱賞^一して曰^一く、「貴老^一に此^一の兒^一あり、黃龍^一の法道^一未^一

だ地に委^一するに至^一らず」と。夫^一の前輩^一の後進^一を汲引^一するを見るに、唯^一是^一れ

⑤公論^一、初^一めより宗黨^一の分^一なきのみ。

⑥佛性^一の泰^一、龍牙^一の翠微^一と臨濟^一に參^一する公案^一を頌^一して曰^一く、

⑦子卿^一不^一下^一單^一于^一拜^一上^一 始^一末^一常^一道^一漢帝^一儀^一

雪後^一始^一知^一松柏^一操^一 事難^一方^一見^一丈夫^一兒^一

謂^一つべし親切^一明白^一なりと。余^一、頃^一玉^一凡^一に在^一つて、嘗^一て佛照^一の此^一れを擧^一するを

見るに、必^一す再三^一稱賞^一して曰^一く、「此^一れ乃^一ち^⑧頤古^一の様子^一なり」と、後^一其^一の語^一

録^一を観^一るに、又^一其^一の「婆^一子^一 趙州^一の筈^一を偷^一む。」の語^一を頌^一するを愛^一す、云^一く、

⑧「櫻桃^一初^一熟^一筈^一穿^一籬^一 林^一下^一相^一逢^一老^一古^一錘^一

①何嘗得二蘊空、とは五蘊皆空と云ふ様なちまむさきものあれば、師子尊者ではないとの意。

②斬春風、此句は電光影裡斬青風と意同じ、當時多く使用せしなり。

③桃花雨後云云、眞紅の血が、瀧の如くに流れた、左はさりながら、紅血と白乳と相去ること多少ぞ。

④氷雪云々二句、白髪頭のお婆さん、齒くそだらけの大口あいて、驚直に去れ。

⑤公論とは黃龍派、楊岐派の朋黨なきを云ふ。

⑥佛性は闍悟に嗣ぐ。

⑦頤古は作意を顯さざるを本意とす、此頤宛も蘇武を誅するが如し、是れ佛照の嘉賞する所以なり。

⑧趙州和尚、一婆に遇ふ、州曰く、何の處に去る、婆曰く、趙州の筈を偷む、州曰く、忽

⑨忍俊^一不^一禁^一行^一正^一令^一 得^一便^一宜^一是^一落^一便^一宜^一

開善^一の謙^一、心^一不^一是^一佛^一、智^一不^一是^一道^一を頌^一して云^一く、

⑩太平^一時^一節^一歲^一豐^一登^一 旅^一不^一費^一糧^一戶^一不^一局^一

官路^一無^一人^一夜^一無^一月^一 唱^一歌^一歸^一去^一恰^一三^一更^一

妙喜^一最^一も之^一を喜^一ぶ。金山^一の奇道^一者は別峯^一印^一の嗣^一なり、亦^一嘗^一て、

⑪「遲^一日^一江^一山^一麗^一 春^一風^一華^一艸^一香^一 泥^一融^一飛^一燕^一子^一

沙^一暖^一睡^一鴛^一鴦^一」

を以^一て之^一を頌^一す。亦^一得^一易^一からず、時^一に以^一て超師^一の作^一となすなり。

⑫圓通^一の晏和^一尚^一は、興化^一仙遊^一の人^一なり、泐潭^一の乾^一に見^一ゆ。

⑬左丞^一相^一范^一公^一致^一靈^一、初^一め内^一翰^一より出^一で、豫章^一に帥^一たり。

候^一溪^一を過^一ぎ、因^一に語^一する次^一で、范^一嘆^一じて曰^一く、「行^一々^一將^一に老^一いんとす、金^一紫^一行^一中^一に墮^一在^一して此^一の事^一を知^一ること稍^一遲^一し。」

晏^一即^一ち、「内^一翰^一」と呼^一ぶ、内^一翰^一應^一諾^一す。晏^一曰^一く、「也^一た遠^一からず。」

翰^一曰^一く、「好^一し好^一し、更^一に指^一示^一を望^一む。」晏^一曰^一く、「此^一を去^一つて洪^一都^一四^一程^一あり。」

翰^一行^一思^一す、晏^一曰^一く、「見^一ば使^一ち見^一よ、擬^一思^一せば即^一ち差^一ふ。」

翰^一大^一いに喜^一ぶ、此^一れより所^一入^一あり。

樞密^一吳^一公^一居^一厚^一、節^一を擁^一して鍾^一陵^一に歸^一る。晏^一を見^一て曰^一く、「省^一試^一に赴^一く頃^一、圓^一通^一の趙^一州^一關^一を過^一ぎ、因^一に前^一住^一訥^一老^一に「透^一關^一底^一の事^一如^一何^一ん」と問^一ふ、訥^一曰^一く、「且^一つ去^一つて官^一と做^一れ」と、今^一覺^一えず五十^一餘^一年^一な

り。晏曰く、「曾て透關底の事を明得するや。吳曰く、「八次經過して、常に念を存す、然れども未だ脱灑ならざることあり。」晏ために之を擧して曰く、「請ふ扇を使へ。」吳、扇を揮ふ。晏曰く、「甚の脱灑ならざる處あらんや。」吳大いに喜んで曰く、「便ち最後の句を請ふ。」晏乃ち、扇を搖すこと兩下す、吳曰く、「親切親切。」晏曰く、「^① 喏舌頭三千里、^②」と。

諫議彭公汝霖、手づから觀音經を寫して晏に施す。晏拈起して曰く、「這箇は是れ觀音經、那箇は是れ諫議底。」彭曰く、「此れは是れ某の親書。」晏曰く、「寫す底は是れ字、那箇は是れ經。」彭笑つて曰く、「卻つて了に不得なり。」晏曰く、「即ち宰官身を現して爲めに說法す。」彭曰く、「人々分あり。」晏曰く、「經を謗すること無くんば好し。」彭曰く、「如何して即ち是なる。」晏經を擧して之に示す。彭撫掌大咲して曰く、「噀。」晏曰く、「又不得と道了す。」彭乃ち頂禮す。

安相國南遷のとき、經過して晏を見て嘆じて曰く、「一生官となつて今日謫せられ、従前は但だ一夢なるを覺り見るのみ。」晏曰く、「相公覺るや。」安曰く、「此れ皆本有、但だ未だ甚だ明了ならず。」晏乃ち「相公」と召ぶ。公首を擧す、晏曰く、「了せり。」安曰く、「奈んせん、事に使ひ得らるゝを。」晏曰く、「京を離れて幾程にして此に至れる。」安曰く、「四十二日。」晏曰く、「甚の處に得來る。」安咲つて曰く、「得力得力。」晏曰く、「直下に受用し去れ。」安曰く、「如何んが受用せん。」晏曰く、「朝夕相似、日々一般。」

① 喏は秦吉喏にして九官鳥のこと。
② 此の如しとは、上の三條を合せて應用の自在を評せしなり。

安乃ち合掌す。晏曰く、「但だ諸有を空せよ、所無を實とするなかれ」と。^① 大率此くの如し、眞に大自在を得たり。

② 二靈庵主は蘇人なり、初め眞淨に見え、後泐潭の乾に參じ、所證あり。東浙に回つて雪竇の中峰庵に居る。常に虎あり、座下に蹲伏す。初め天童の交和尚と同行なり、二人稟誓して、斷して出世せず、後に交其の誓に爽ひ、出で、太白を戸る、和遂に其れと絶交す。中峰に居ること歳久し、其の山秀絶なり。凡そ居ること久しからざるに、即ち他山の命あり、和乃ち鉏をもつて山骨を斷つ、竟りに待制陳公の爲めに詩を以て誘はれ、出で、二靈庵に住す。一二年ならざるに禪衲麈至し、遂に小々の法社を成し、名九天に開ゆ。屢々詔すれども起たず、今に至るまで遺蹟尙ほ存す。多く偈語あり、世に行はる。二靈は乃ち鄧江月波の中に居る。淳熙中、別峯印乳資より徑山に赴き、徑其の所よりす。偶に云く、

一 萬頃湖光激澗中。二 靈山色翠重々。片帆我欲三天遠去。
回二首和公一有媿容。^③
其の高風を想見すべきなり。

仁宗皇帝、因に大覺禪師、内に入つて心法を論ず、御製あり、之に賜ふて曰く、

③ 龍下。
④ 天童普文亦泐潭の乾に嗣ぐ。
⑤ 山骨を斷つは、蓋し風水の説。

「初祖安禪在少林。不傳二經教。但傳一心。後人若悟真如性。」

密印由來抄理深。」

孝宗皇帝、因に徑山の潛禪師に詔して内に入らしむ。又頌あり、之に賜ふ、曰く、

「信手拈來說。宗乘數百句。僧歸寺寂寥。一字無著處。」

國譯叢林盛事卷上終

國譯叢林盛事卷下

① 寶峰の祥又手、童子たりし時、二老宿の夜話に、古徳の頌を擧するを聞く、云く、

「征輪軋々過江南。暫把遺骸寄泐潭。」

秦嶺烟沙猶未息。月明空鎖定僧庵。」

祥覺えず感悟して泣下る。老宿其の故を問ふ、祥云く、「某近ろ夢中に此の句を得たり、當に是れ前身の爲るところの者なるべし。」宿曰く、「審に爾

他日必ず泐潭の主人に居らん」と。祥後に僧となり、衆に入つて年あり、果

して泐潭に出世し、屢々名利に住し、續いで靖康の亂を以て地を天台に避

け、高庵の悟と相繼いで蓮華に示寂す。此の地は乃ち詔國師入定の

ころ、前後皆前頌に言ふところの如し。教中に云ふ、「凡そ報土皆夙昔願力

の現するところ、擧定分あり、豈偶然ならんや。世流の庸妄、院を求めて區

區として聲利の域に苟合し、老い且つ死すと雖も、而も分に安んずるを知

るなきもの多し。」と、余昔し太白密庵の會中に在り、夜夢に一聯を作り、壁

① 寶峰景祥禪師は大鴻節に嗣ぐ

節は眞點胸に嗣ぐ、祥は南豐

の人、紹興二年十月七日没す、

年七十一。(僧寶正續傳卷四)

② 軋々は車のきしる音。

③ 祥高庵の悟と厚善なり、悟、

鳴鶴住持の命を受け、未だ入

寺に及ばずして化す、仍つて

祥其後に補す、相距ること一

月ならずして祥又寂す。

④ 天台詔國師は法眼に嗣ぐ、智

者大師の後身と稱す、名は德

詔、處州龍泉の人、姓は陳氏、

宋の開寶四年六月廿八日寂

す。(僧寶傳卷七)

間に書して云ふ、

「雪點欄干。寺在翠瑠璃之下。雲橫香漢。人歸紅菌菖之中。」

已に年を彌つて、猶ほ世中に轉圜す。抑々知らず、報土果して何の方に現するや、喟、切に忌む、夢を説くことを。

普慈の開禪師は、豫章の人にして、相貌凡ならず、初め雪堂の行に烏巨に見え、次に湖湘に入つて妙喜に回雁峯前に見え、備に烟瘴を歴たり。狀元汪聖錫と厚善なり。汪は上饒の人、擧げて以て懷玉に住せしむ、乃ち南禪師授業の處なり。汪後に閩に帥たり、即ち象骨を以て之を招く。乾道の間、詔を奉じて雙徑を尸る、累に詔して入内し、大いに龍顏を悦ばしむ。特に佛日禪師を賜ふ。暮年再び旨を奉じて雪峰に歸る、彭山の昇老・次山、疏を作つて曰く、

「璇璣不動。期須回天上風雲。大用現前。縱橫注域中日月。」

喜百世一時之遇。冀千齡再會之享。

德又日新。人惟求舊。

某人。道在閩浙。緣符雪嶠五峰。

前兄後弟而自得嘉聲。昔去今歸而皆奉詔旨。

普慈は、七惠に嗣法す。

璇璣は雲の作れる天文器。

雪嶠は雪峰なり、五峰は徑山。

中興佛法。四海九州悉見天心。獨受主知。名公鉅卿咸尊師譽。

方逐丹墀鳳翥。俄驚合浦珠還。好看白馬來東。何待青彩拂地。

一千餘龍象弟子。於觀象賦言旋。三百年祖師道場。

又見木毬再輓。

請提密印。同副芹誠。

聞、福緣甚だ勝れ、近世及ぶもの罕なり。但だ向上の一著、叢林全く信を取らず、抑々身滅びて名殞するのみ。

鐵庵一大禪師は建昌の人、佛照曇道者と俱に同行なり。初め月庵の果に見え、次に應庵の華に見ゆ。歸宗に住する時、嘗て侍者となり、華頗る之を喜ぶ。其の孤耿世と與に交らず、嘗て其の頂相に題して曰く、

「掛拂懸拂。全機出沒。一喝耳聾。三日屈々。」

且道是馬祖屈百丈屈。宗一侍者但恁麼拈出。」

乾道の間、出世して台の慶善に住し、衢の祥符に遷る。竟に月庵に嗣ぐ。蓋し所得を忘せざるなり。其の像に贊するあり、曰く、

「揭翻四大五蘊。徹證向上一竅。傾心吐膽爲人。暗裡返遭二怪笑。」

丹墀は朝廷なり、鳳翥は鳳鳥の飛翔なり、鳳鳥飛べば、百羽之に従ふとあり、雙徑に住する時を云ふ。

白馬來東、青彩拂地は蓋し芝井の故事を引用せるなり。

眼裡瞳人吹鐵叫。持蠶酌海設勢神。熨斗煎茶不同銚。其の後嘉禾より疎山・仰山に遷り、兩び雪峰に住して終ふ。

雪堂の行、法語あり、行者元友に示して曰く、「雲居の高庵老人、龍門にあつて、首座となる。時に凡そ衆に臨むに、必ず曰く、『須らく識者の在るあるを知るべし』と。他日誨に侍する次で、嘗て其の説を聞かんと請ふ。語けて曰く、『廣衆の中、鄙者は常に多くして識者は常に寡し、鄙者は習ひ易く、識者は親み難し。自ら志を其の間に奮ふ、一人と萬人と戦ふが如し、庸鄙の習力盡くるときは、眞の挺特没量の漢なり。』と、余是より終身其の言を誦す。

氣志に勝つときは則ち小人たり、志氣に勝つときは則ち端人正士たり。惟だ志と氣と齊しうして得道の賢聖となす。人あり、剛狠諫曉を受けざる者は、氣之を然らしむるなり。者婆の將に死なんとするや、百草皆泣いて曰く、『者婆世にあれば我等用あり、者婆死して後、世間我れを識る者有るなし』と。此れは世間の諸法に喩ふ。未だ出家せざるとき、將に冠せんとするの年、見獨居士、嘗て余に謂つて曰く、『中に主無ければ則ち正しからず、外に主無ければ則ち行はれず』と。余是より終身其の言を踐む。家に在つて身を立て、家を出で、道を學するより、以て終年に至るまで、此に倚つて衡石の輕重を定め、規矩の方圓を成すが如し。此れを舍つれば、則ち事々準を失ふ。元友其れ之を勉めよや。」と。

穎濱先生蘇子由、嘗て筠陽に謁せられ、眞淨と道契す。嘗て頌あり、香城の順和尚に寄せて曰く、

「融却無窮事。都成一片心。此心仍不有。從古至如今。」
又曰く、
「如見復如亡。相逢咲一場。此間無首尾。尺寸不須量。」
欲識東坡老。堂々一丈夫。近來知此事。

東坡も亦貶所にあつて、公の深く此の道に向ひ、其の所居に榜して東軒と曰ふと聞いて、詩を以て之に戯れ、「盛取東軒長老來」の句あり、子由之に答へて曰く、

「縱使盛來無用處。雪堂自有老師兄。」
と、又嘗て淵明の一詩に和して云く、
「佛法行中原。儒者恥論茲。功施冥々中。而何負當時。」
此方舊染雜。渾々無名緇。治生守家室。坐使斯人疑。」
未知酒肉非。寧與三生死一辭。熾然吾閩中。佛事不可思。

① 蘇轍字は子由、老泉の子、軾の弟なり、蘇轍、軾を救ふて上書し、筠陽の權亮に駁せらる。② 順は黃龍に嗣ぐ、順と子由の父老泉と友たり、故に子由の誦せらるるや、順往いて訪ひ、播鼻の因縁を舉示し、子由をして發明せしむ。

生レ子多ニ類悟。得レ報不ニ汝欺。時有正法眼。一出照曜之。

誰謂邑中豪。請誦我此詩。

晁光祿迥、精しく内外の教典を窮め、晩年に自ら法藏碎金を著し、儒釋の中に流行す。其の語甚だ教化に敦し、儒に曰く、「士の志あるものは學無かるべからず。」と、故に佛書に云く、「無學の者は其の理別つことなく、若し其の語を會して因循自棄せば、猶ほ惜しむべきがごときなり。」と、余、三教の書を觀て、粗粗必學の意を見る。儒の周易に曰く、「君子德に進み業を修む」と。道教に老聃曰く、「上士は道を聞いて勤めて之を行ふ」と。釋の寶積經に曰く、「猶ほ大龍の如く、所作已に辨じて、重擔を捨て、殆んど己利を得」と。余、因つて會同參究して、其の文句の類せざるを知ると雖も、而も必ず德は學に従ふこと疑なし。加ふるに耆年の志深を以てし、至窮に流さんとす。」と、最後の一説は、萬劫と雖も易ふべからざるなり。

大圓禪師は四明の人、道林の一に嗣ぐ。一は祐山の窟に見え、窟は黃龍の南に見ゆ。故に其の親しく黃龍の宗旨を得るや、三關の頌并に拈古あり、盛に叢林に行はる。初め妙喜其の坦率にして事を事とせざるを聞いて、甚だ樂ます、其の拈古を觀るに及んで、乃ち几を撫して善しと稱賞す。曰く、「眞の黃龍の正傳なり」と。筆を擡つて四句を、後に大書して曰く、

「七佛命脈。諸祖眼睛。但看此錄。一切現成。」

⑤ 後は語録の後なり。

是に由つて、學者方に二師の用處、初より二致無きことを知る。然れども智、嘗て人に謂つて曰く、
「呆妙喜の作用は巖頭死心に滅せず、謂つべし百世の師なりと。但だ未だ老僧と、那事を商確せざることを。若し老僧を見ること一回せば、定めて他をして光前絶後ならしめん」と。然も二師竟に相見す、智は石霜に終ふ。預め旬日に弟子の生祭を受け、法座上に就いて端然として化し去る。方に知る、妙喜の輕々しく人を肯はざるを。

⑥ 妙喜道人は延平黃氏の女なり、徧く尊宿に見え、後に妙喜に徑山に謁す。因に妙喜室中に僧に問ふ、「不是心、不是佛、不是物、是れ什麼ぞ。」僧措くことなし。道門外に立つて之を聞いて、豁然として明契し、乃ち喜に告ぐ。喜曰く、「桑樹箭を著け、楮樹汁を出す」と、因つて其の所解を印す。後に洪福に開堂す。衆に示して曰く、「禪は意想にあらず、意を立つれば宗に乘く。道は功助を絶す、功を建つれば聞を失す。聲外の句意中に向つて求めず、照用の機關を持し、佛祖の鉗鎚を握り、有佛の處互に賓主となり、無佛の處風颯々地なり。心寧意泰、響順聲和、恁麼の人に似ば、且く道へ、什麼の處に安著せん。」良久して曰く、「箆を披して側立す千峰の外、水を引きて蔬に

⑥ 呆妙喜の作用云云、此評語は大惠文遠禮佛の則を拈じて、「趙州挂杖雖三然短、臨後圓光又一重」の頌を見て、評せしものなり。

⑦ 那事を商確云云、是は大圓が後句を改めて「割破華山千萬重」とすべし、然し老僧と此事、商確せざるを惜むと云ひしなり。但し此處著者回融して省略の跡を認めず、委明は枯崖漫錄の上卷に載す。

⑧ 妙喜は温州淨居に住す、尙書黃裳の女、大惠に嗣法。(續傳燈卷卅二)

⑨ 桑樹云云、桑の木に箭があたりと楮樹から、たらたら汁を出すとなり。

澆く五老の前。」又曰く、「眉毛を貶上すれば蹉過す、大いに眼を開いて尿床するに似たり。現成の公案、放行せば正に是れ、黠兒落節、恁麼不恁麼、搥に得ざるも、尾を曳くの靈龜、不是心、不是佛、不是物なるも、虚空に釘櫛す。許多の閑門破戸を離得するも、猶ほ是れ死水裡に龍を藏す。傾瀉倒嶽の一句、作麼生か道はん。巨靈手を擡ぐるに多子なし。分破す華山の千萬重」と。後に水庵、僧の舉似するを見て、手を以て額に加へて曰く、「箇の事謂つべし男女等の相にあらず、多少丈夫の漢、十年五年衆中に在れども、討頭不著なり。他は是れ箇の女人なりと雖も、宛も丈夫の作あり、却つて多少杜撰の長老に勝れり」と。

機簡堂初め饒の筈山に住すること十七年、火種刀耕、備に艱苦を嘗む。其の住まる所の者、皆四方の本有なり、故に能く同じく寂寥を受く。世間の榮耀を以て事となさずして、布素一節なり、故に世之を機道者と謂ふ。後に九江の圓通に居り、大いに此庵の道を行す。示衆に云へるあり、「圓通生藥舗を開かず、單々に只死猫頭を賣る。知らず那箇の無思算か、喫着して通身に冷汗流るや」と、是れより太平の隠靜に遷る、衆多くして堂厨淡薄なりと雖も、兄弟敢て

① 黠兒落節は、欲深の身代限り、又は水練の達者が水におぼれると同じ。
 ② 尾を曳くの靈龜は、龜が「うろ」の中へ隠れるに、美事足跡をぬり消しても、尾の跡は残りて居る。
 ③ 閑門は夜逃げ、破戸は身代限りなり。
 ④ 手を以て額に加ふは、遠く望む貌。
 ⑤ 討頭不著は、脱洒自在ならざるなり。
 ⑥ 簡堂行機禪師は元布袋に嗣ぐ、元は圓悟に嗣ぐ。
 ⑦ 火種刀耕は、草を焼いて植付け、刈りて耕すなり。
 ⑧ 生藥舗は、さぐすり屋なり、無思算は、馬鹿物なり。

之を言ふ者なし。凡そ執事を請ふには、必ず老黃龍の法に遵ひ、粥罷んで鉢を掛け、堂に向つて侍者をして白槌せしめて曰く、「某人を請じて其の職を執らしむ」と。兄弟之に従はざる者なし。尙し違ふ者あらば、即ち之を叱して曰く、「簡堂が這裡、做さずんば爾甚の處に向つて做さん。噫、前輩道重うして、人を用ふること此くの如く容易なり、豈今時の七跪八拜、下情無任、猶ほ渠に跨跳して三十三天に上り去らるゝが如くならんや、苦なるかな、佛陀や」と。

證西林は老衲と號す、長沙の人、月庵の嗣なり。月庵、道林に居りしとき、證察元となり、已に兄弟の爲めに挂牌入室す。其の人となり至誠鄭重、暗室に處ると雖も大賓に臨むが如し。兄弟之を見れば、其の容必ず莊なり。後に西林に居り、道行はる。話墮の公案を頌するあり、曰く、

「石火光中立問端、不能透脱幾多難。
 頂門若具三金剛眼、肯被三傍人把三鈞竿。」
 蓋し其れ親しく月庵の説話より得たり、又且つ甚だ窠臼を脱するのみ。始め保安の封、亦月庵に見ゆ、見地尤も別なり。亦嘗て頌して曰く、
 「歲暮抱琴何處去、洛陽三十六峰西。
 生平未知先生面、不得三聽二鳥夜啼。」

① 下情無任とは謙遜の語なり、尺牘に往往、下情并營に任ふるなしとの語を用ふ。
 ② 證西林、月庵の法嗣、祖師禪師は老衲と號し、行業頗る綿密なり。
 ③ 封、復庵可封禪師、月庵に嗣ぐ。
 ④ 鳥夜啼は李白の詩なり。

善く柳下惠を學ぶと謂ふべし。終に其の迹を師とせず、頂門に^①槃迦羅眼を具するもの、分明に辨取せよ。

詢罵天、見地明白なり、嘗て佛鑑に侍す、鑑、其の形容醜黒にして、談天の者も亦其の福寡しと曰ふを以て、一日偶々詢に謂つて云く、「惜しむべし、一顆の明珠、懶く者の乞兒に拾得せらるゝを。」詢云く、「和尚且つ牢く收取せよ。」と、又一日謂つて曰く、「一切衆生、何ぞ嘗て悟り來らんや。」詢曰く、「一切衆生何ぞ嘗て迷ひ來らんや。」忽ち一行者あり、面前に過ぐ、鑑曰く、「如何なるか是れ祖師西來意。」行者措くことなし。鑑曰く、「何ぞ嘗て悟り來らん。」詢亟かに行者を呼んで曰く、「放參するや、也た未だしや。」者曰く、「放參し了んぬ。」詢曰く、「何ぞ嘗て迷ひ來らんや。」鑑叱して曰く、「業種出で去れ。」詢曰く、「和尚且つ低聲せよ、恐らくは外人聞き得て、我父子二人、此に在つて迷と説き悟と説くとせん。」鑑大いに咲ふ。

劔門の分庵主は閩の人、早歲道に於て自ら發明あり、竟に剃髮して郷里を走る、時の人之を狂僧と謂ふ。分、恤へず、初め懶庵の需に見え、後妙喜に雙徑に謁す。其の風顛を聞いて、決して參堂せしめず。分乃ち憤に乗じて山を下り、將に歸計を求む。因つて錢塘江上に抵つて舟を買ひて、浙江亭畔に佇立す。泣下つて曰く、「我れ波々吒々、嶺を出で來つて妙喜に見ゆ、又衆に預ることを得ず、是れ

① 善く柳下惠を學ぶものは、其心を取つて其跡を師とせず、魯の男子、是れなり。
② 槃迦羅は金剛となす、即ち金剛の眼睛なり。
③ 談天とは人相を見るものなり、談天の文字は史記に出づ。
④ ばけものの業、畜生出で去れとの意也。
⑤ 波波吒吒は奔波して休息せざるなり。

夙に般若の縁無きなり」と。忽ち喝道の者の「侍郎來」と云ふを聞いて、分、豁然として大悟す。乃ち頭あり、云ふ、

「幾年簡事挂胸懷、
問盡諸方眼不開。
今日肝腸忽然破、
一聲江上侍郎來。」

徑ちに洋嶼に歸り、懶庵に依る、懶庵其の所得を印す。未だ幾くならずして、忽ち辭し去る。懶庵尙を以て之を送つて曰く、

「江頭風急浪華飛、
南北相逢不展眉。
獨有二分禪英俊、
手等閑奪三得錦標歸。」

① 酒肆魚行は、市上にあつて酒を呑み肉を食ふなり。
② 本店賣買云云、己の店は、懸値なしとて、宗旨は藝直に如是なる底を擧げる也。

後七閩に徉狂す。或は酒肆に入り、或は魚行に在り、人能く測るなし。唯だ同參の木庵永、見る毎に必ず師を以て之に事ふ。嘗て衆に示して云く、「這の一片の田地、汝等諸人且く道へ、天地未分已前、什麼の處に在る。直下に徹し去らば、已に是れ分上座を鈍置し了んぬ。更に若し擬議思量せば、何ぞ當に白雲千里萬里のみならんや。」と、幕に拄杖を拈じて大衆を打散す。又曰く、「十五日以前は天上に星あり、皆北に拱ふ。十五日已後は人間水として東に朝せざるなし。已前已後、摠に拈卻するも、到る處郷談各々同じからず。乃ち手指を以て屈して云く、「一二三四五六七、八九十十一十二三十四。」復た云く、「諸兄弟且く道へ、今日是れ幾くぞ。」良久して云く、「本

店賣買分文不賒。」と。

伊庵の權は臨安昌化の人、無庵の ②余に嗣ぎ、萬年に出世す。一坐九年、法席大いに振ふ。然れども權の身を律し、衆に奉ずる、言行俱に準繩あり、大率佛智の裕、 ③誰庵の粹の人となり効ふ、座下常に五百衆を安ず。自贊あり、云く、

「鼻如鷹背。對面千里。要識萬年。只這便是。」

叢林俱に之を愛す、後常の華藏に遷る。結夏の示衆に云ふ、「今朝布袋口を結卻す。明眼の衲僧、亂走を休めよ。心行滅する處驪身を解す。噴嚏も也た獅子吼を成す。梅檀林馳驟に任す。眉毛を剔起すれば頂上に生ず、肉を剜つて瘡を成して家醜を露す。」

高宗・孝宗、皆彌勒大士の贊あり、叢林有道の士、之に和せざるなし、二帝の意に慚ふ者ある少し。贊に曰く、

「碧落片雲。長天孤月。能棲物外。妙兮幽絕。」

「慣隱市塵。奇哉英傑。隨行兮惟有拄杖布袋。」

「充飢兮何妨酒肉腥血。別々。玉殿瓊樓更加雪。」

又云く、

②余の字誤りなり、全とすべし、蓋し字形似たるを以て誤れるなり、全無庵は佛智裕に嗣ぐ、裕は闍悟に嗣ぐ。
③誰庵の粹。

④噴は吹き出すこと、嚏はくつしやみしなり。

⑤梅檀林は、叢林と同じ、東福寺に禪堂の額あり、梅檀林と書す、張即之の書にして名筆なり、但し梅檀林は蒨枝林と對する語なり。

⑥玉殿瓊樓の文字は、彌勒の樓閣より來る。更に雪を加ふとは、雪上に霜を加ふると同じ、但し誠に見えずきたる別語なり。英賢はおいらの屋敷へ、藪をまきくさつたと、云ひはせぬ。

「袋貯乾坤。杖挑日月。磊々蓋々。聖中絶。慈々癡々。僧中傑。」

「令行兮一棒一條痕。逗機兮一擲一掌血。別々。恰似紅爐一點雪。」

乾道の間、直道者保寧に住す、嘗て之に和して曰く、

「量包太虛。眼懸日月。住天宮兮天中之絶。」

「居人間兮人中之傑。放下布袋兮坐斷四大部州。」

「拈起拄杖兮直得大地流血。」

「別々。明々有理難二分雪。」

范使李公爲めに奏上す、孝宗大いに之を喜び、錢五百萬、米五百斛を賜ひ、以て衆供を助く。

別峯の ①印、金山より乳峯に遷る、醫生陸安なる者あり、夜夢に神人報じて云ふ、「師は即ち達觀穎の後身なり」と。師、天資閑暇、華藏の珉に嗣ぐ。自ら蜀を出で、即ち双徑に抵り、妙喜に見ゆ。喜問うて云く、「甚の處より來る。」印云く、「西川。」喜云く、「未だ劍關を離れざるに、爾に三十棒を與ふ。」印云く、「合に和尚を起動すべし。」喜、楞伽室に館し、之を待つこと甚だ厚し、大刹に歴居するを得。晩に詔を奉じて徑山に居る、一住九年、

①蓋々蓋々は、ふしだら千萬と云ふが如し。

②慈慈癡癡は、横著な馬鹿づらと云ふが如し。

③直道者は大惠の法嗣、一庵蓋直禪師なり。

④明明有理云云、罪人が充分明しを立てる理窟を持つて居ながら、其れを云ふことが出来ぬ、誠にありがたない別語で、布袋のほてつばらじや。

⑤印別峰は華藏安巖に嗣ぐ、巖は闍悟に嗣ぐ、正説正語に珉民に作る、是なるが如し。
⑥達觀曇穎は、石門曉に嗣ぐ、神情秀特、書に於て讀まざるなし、嘉祐四年除夕没す、年七十二。(僧寶傳廿七)

毎に華嚴を以て佛事を作す。紹興庚辰、苕蒲田に示寂す。徑山の塗毒を辭するとき、毒曰く、「和尚幾時か行止するや。」印曰く、「水到つて渠成る」と、即ち端坐して逝く、其の年臘月八日なり。行に臨んで門人偈を覓む、即ち大書して曰く、

「千偈萬偈。總是熱荒。我有二句。死後舉揚。」

塗毒亟かに龍を捧げて返り、法堂の正寢に歸し、七日當代を以て禮送す。

時に之を感ず、後二年塗毒歸寂を示す、人々報徳の心を懐く、印に山中の書懷あり。

「一味林間飽。黑甜。儘教氣骸日炎々。」

「不將無病自求病。多是解粘添得粘。」

「粗有芋煨如懶瓚。更無錐卓似香嚴。」

「枕邊留得青山在。雨後層々翠滴簷。」

又嘗て農夫醉打の圖に題する一絶に、

「農夫何事損天和。醉後依前擊壤歌。」

「不似當年劉項飲。胸中各自有干戈。」

塗毒老人鑑湖に居るの日、放翁と最も厚し、紹興壬子七月二十七日

④熱荒は熱闍荒唐の意ならん。

⑤黑甜は「ひるね」なり。

⑥明瓚禪師は唐の徳宗の時の人、衡岳に隱る、性懶にして瘦を食ふ、故に懶瓚と號す、曾て馬糞を集めて芋魁を煨く、徳宗の使偶を到り、徴して京に上らしむ、瓚應ぜず。

⑦香嚴智閑禪師の頌に曰く、去年貧猶有卓錫之地、今年貧錫也無。仰山之を聽いて曰く、如來禪は師弟の會するを許す、云云。

⑧劉項鴻門に會して飲酒酣醉す、而も内に殺機を藏す。

⑨塗毒智策禪師は黃龍派、前出。

⑩陳游字は務觀、放翁と號す、南宋屈指の詩人なり。

示寂す。放翁、詩を以て之を哭して曰く、

「岌々龍門萬衲傾。翻々隻履又西行。塵侵白拂繩床冷。」

「露滴青松一卵塔成。遙想再來非四八。應當相見是三生。」

放翁大いに修行力を欠いで、未だ人間情別の情を免れず。又其の眞に賛して云く、

「骨格瓊奇。精神瀟灑。貌肅而和。語盡而簡。畫得者英氣逼人。」

「畫不得者頂門上一隻眼。」

石憲恭禪師、徧く諸方に參じ、久しく黃龍の忠道者に依り、後、宏

智に依る。靖康中、湖湘より東越に歸る、忠、頌を以て之を送つて曰く、

「閑思昔日戲沙洲。屈指于今四十秋。」

「君到石窓一閑借問。許多風月付誰收。」

恭越の報恩に出世す、後に瑞巖に居り、其の道大いに振ふ。然れども克苦

爲人、布素以て寒暑を禦ぐ、事細大となく必ず親ら之に臨む。叢林整齊にして、衲子風を望んで服す。

嘗て佛生日の頌あり、曰く、

「五天一隻蓬蒿箭。攪動支那百萬兵。不待三雲門行正令。」

「幾乎錯認定盤星。」

叢林之沸傳す。徹白頭なるものあり、三衢の人、恭と同じく宏智の門より出づ、操履孤潔、世と接せず。嘗て賓を太白に典る。妙喜、大俊敏なるを見て、私かに之を喜び、計を以て其を誘ふて、玉几を過ぎしめんとす。徹、志を秉つて渝らず、竟に老天童に依る。乾道の初め、恭羅籠して以て嗣と爲さんと欲し、明の報恩を退いて、與めに出世せしめ、住すること二年、四方の龍象毎に之に歸す。然れども徹、竟に宏智に嗣ぐ、恭以て樂ます、徹、也た卹へず。後婺の華藏に遷り、將に發せんとし、て示寂す。行に臨んで遺偈を書して云く、

「當陽一句。更無回互。月落寒潭。烟迷古渡。」

①了堂思徹禪師は光孝に住す。
②玉几は徑山なり。
③好遺偈なる哉。
④大惠の法子、佛照德光禪師。

是れ眞に洞上の宗を得たり、惜むらくは、其の久しく世間に住せざるを。
孝宗皇帝在位二十七年、毎に諸山の長老に宣して道を論ず、唯だ佛照禪師最も知遇と爲す。淳熙の初め、冷泉に住す。宣して選德殿に入れ、宗門の事を論じ、五たび禁圍に宿す、古より未だ有らざるなり。故に佛照嘗て奏して曰く、「陛下、前後諸山の長老に宣して道を論ず、如何ん。」孝宗曰く、「長老の直捷に似るを得難し」と。佛照又奏して曰く、「臣山林に生長す、語言麤疎、伏して乞ふ陛下寛貸せよ。」孝宗曰く、「妨げず、這裡長老と忘懐して道を論ずるを」と。前後諸山に賜ふの偈語、多からずとせず、佛照に賜ふもの最も尊敬をなす。聖語に曰く、
「大暑流金石。寒風結凍雲。梅華香度遠。自有一枝春。」

佛照嘗て之に和す。一日又佛照に批問して曰く、「世尊雪山に修道六年、成する所の者は何事ぞ、請ふ師明かに説け。」時に佛照施主家の齋に坐す、天使忽ち到り、便ち回奏を請ふ。照、著語して云く、「將に謂へり陛下忘却すと謂つべし、無師自然の智也。」と。
誰庵の演は閩の人、初め妙喜に回雁峰下に參じ、宗旨を洞明す。喜曰く、「這の猢猻子、以後須らく人を括擻し去ることあるべし」と。後に妙喜を辭す、偈に曰く、

「倒騎鐵馬一度瀟湘。 礪草巖華不覆藏。」
回雁峰高親到頂。 更無佛法可商量。

後に江上の龍翔に住す、兄弟多く之に依る。水庵、偈あり、曰く、
「江上如今得白眉。 爲人徧用截流機。」
と。然して演善く偈語を作り、宗眼端正なり。新昌の石佛に題して曰く、
「積念有年瞻石佛。 今朝一見絕疑猜。」
都盧面目只如此。 却謂三生鑿出來。」

又龍湫に題して曰く、
「詎羅坐斷大龍湫。 伎倆却無錯路頭。」
只見高巖傾瀑布。 那知碧嶂外清幽。」

①龍湫、夢溪筆談に、温州の雁蕩山、祥符中始めて人の之を見あり、西域の書に、阿羅漢、諸矩羅は震旦の東南大海のほとり、雁蕩芙蓉峰の龍湫に居る、唐の貫休の詩に諸矩羅の發あり、曰く、雁蕩經行雲漢漢、龍湫宴坐雨濛濛。(佩文韻府)
②少溪の此庵守淨禪師は大惠に嗣法す。

別峰の雲は、少溪の淨に嗣ぐ、淳熙の間、福の支提に住す、江浙の道に志す者之に依らざるなし。

善財南詢の頌あり、曰く、

鬢角分明者小兒。肚皮好待二爾聞知。

敗關都盧納二向伊。賺他五十三知識。

叢材競傳す、後に莆陽の華嚴に遷つて終ふ。

洪首座は臨川の人、佛照に嗣ぎ、洪の光孝に出世す、蓋し漕使尤延之

の命に應ずるなり。次任の太守、且望の公參に、諸山の公廳の下に就いて

長揖して退かんことを須要す。洪之を聞いて樂まず、以謂らく「天下此の

道理なし」と、即ち鼓を撃つて升堂し、院を退いて去る。頌に曰く、

「祖翁活計元來大。誰敢區々謾折腰。」

太守之を聞いて慚づること甚だし、使を遣はして再請す。洪竟に回らず、江西の諸山此れより氣を増

す。後、吉の祥符に住す、開福に遷つて終ふ。尤延之侍郎親しく爲めに傳を作る。

一和尚自ら村僧と號す。草堂の清に嗣ぐ、久しく平田に住す。後に長蘆力命すれども赴かず、皎

如晦の一疏を以てして往く。其の詞に曰く、

①善財南詢、善財童子は、南方に五十三の善智識を尋ねて、遂に無始劫以前の事を分明に了得し、一時に、千萬劫、無量の諸善徳に會ふことを得たり。南方は北に對して、分明の地に喩えし也。今は、是を頌す。
②芝岩慧洪禪師、佛照に嗣ぎ、佛照は大惠の法嗣。
③陶淵明日く、吾豈五斗米の爲めに折腰して、鄉里の小兒に拜せんやと、即日官を辭す。
④村僧法一禪師は草堂に嗣ぐ、草堂は晦堂に嗣ぐ、黃龍派なり。

「這般梵刹固非些小叢林。箇樣村僧豈是尋常種草。」

要得二門當戶對。還他境勝人奇。

某人。生鐵面皮。潑天聲價。

盡大地。捏成二院子。未稱二全提。將二河沙。都做二衲僧。不消一喝。

且看光火菩薩面。掉卻蹉跎羅漢家。

來撐二沒底船。激二起蘆華千尺浪。宜二舉二向上句。祝二延二玉葉萬年人。

と。巢、既に一輩に住し、次年に復た萬年に歸る、未だ幾くならず、觀音

院に示寂す。先づ自ら龕に入り、鏢を落して、偈を説いて曰く、

「今年七十五。歸作二庵中主。珍重觀世音。」

泥蛇含二石虎。

平田に居りしとき、衆常に五百、時に江西泐潭に化士あり、大寂の塔を

修す、兄弟皆頌を作る。時に一座主あり、初めて更衣入衆す、因つて一頌を成して曰く、

「寄語江西老古錐。從他日炙與二風吹。兒孫不三是無二料理。」

要見氷消瓦解時。

又冬日の即事を作つて云く、

①潑天は大を形容するの語。
②光火菩薩、驟距羅漢。
③玉葉萬年、今上皇帝と云ふが如し。
④大寂は江西の馬祖道一禪師を指す。

「朔風也解知人意。吹落巖前古樹枝。惠我一爐深夜火。」
轉教心性懶趁時。

雪巢之を見て大いに稱賞して曰く、「禪和子、三十年衆に在つて啗餅すれども、未だ必ず此の作あらず、他日必ず大器と成らん」と、後果して言の如し。東掖に住して大いに南台の教を興す、是を神照師と謂ふなり。

①松源、東湖に在りし日、佛殿を幹するもの頰を乞ふ、源大書して云く、

「黃面瞿曇眼瞠瞠。千方百計討便宜。」

于今無著渾身處。却要三兒孫蓋覆伊。」

官人に示して云ふ、

「説禪説道説文章。林下相逢咲幾場。」

踏著吾家關。白衣拜相也尋常。」

湖海争ふて之を誦す。

曇廣南は久しく密庵に依る。後に佛照の會中に在つて寮元となる。化鹽の頰あり、云ふ、

「合水和泥一處烹。水泥盡處雪華生。便能索起遼天價。」

公驗分明誰敢爭。」

①松源崇岳禪師は密庵傑に嗣ぐ、傑は應庵華に嗣ぐ。
の瞠瞠は、瞠は「さかりめ」、瞠は「ぼつとする」なり、蓋し老年になりて、眼がぼつとしたと云ふ意ならん。
②頰、頰即菩提、生死即涅槃、一超直入如來地、故に白衣相に拜するも也た尋常なり。
③遼天價は、滅法界の直段、公驗云云は、支那にては鹽の私鬻を許さざるより來る。

佛照喜んで曰く、「這の 廣南蠻、也た菲廣」と。後に雲の道場に住し、其の道將に振はんとして、有力者の爲めに攘はる、未だ幾くならざるに冷泉に終ふ。

①雷庵受首座は平江の人、道貌脩偉なり、久しく月堂・拗堂の諸老に依る。曾て 普燈三十卷を集め、又楞伽を註す、雲の曹氏庵に庵す。杼山居士劉季高の姪、平氏なる者と、最も善し、慶元の初め復た西湖に庵す。劉公丹丘に任ずるとき、巾子峰の報恩を以て之を招く、頰を以て謝して云く、

「結菲方喜倚二長。松一枕清風睡正濃。」

禪道尙無二心理會。肯將身入二關藍中。」

劉見て大いに喜び、再び使を遣はして之に迫り、亦前頰を和して云く、

「昂藏骨相倚二喬。松一晩歲清陰只自濃。」

好向二紅塵一姑著脚。何妨都有二咲談中。」

竟に赴かず、時皆之を高しとす。當今、尾を搖し憐を乞ふの時、寧ろ復た此の人あらんや。

大惠、雙徑に在りし時、一千七百の龍象あり、行者祖慶なるものあり、母の爲めに忌を設け、頰を乞ふ。惠其の骨相凡ならざるを見て、之に一頰を與へて曰く、

②南蠻は孟子に南蠻缺舌の人とあり、菲廣は反切舞、手荒きを云ふと。(諸錄俗語)
③雷庵の虚中の受禪師は、月堂昌に嗣法す、昌は思慧妙湛に嗣ぐ、湛は法雲善本に嗣ぐ、本は月照宋本に嗣ぐ、雲門宗。
④普燈錄は五燈の一なり。
⑤祖慶、後に雲庵禪師と稱し、大惠に嗣ぐ。

「透過那一著」佛亦不能容。

猛虎當路坐。狐兔自潛蹤。

慶、抄年にして南源に出世し、道林に移る。一夕、寶公二十隻の筋を以て之に與ふ、既に覺めて測ることなし。時に劉樞密洪父、金陵に帥たり、鐘山を以て之を招く、一住二十年、中間、回祿に因つて復た之を新たにす、豈に偶然たるものならんや。慶元の初め、佛照、五峰より育王に歸る、慶遂に踵を繼ぎ、二年にして没す、信に妙喜の言謬らざるなり。

晦庵光和尚は、雪堂行に嗣ぐ、龜峰に住し、泉の法石に遷る、蓋し參政周公葵の命に赴くなり。臨終に頰を以て小師、元聰に授けて曰く、「叢林の毒種元聰侍者、耐へ耐し吾が宗汝が邊に滅せんことを。吾れ今枕を高うして百無憂、聰汝時に塗毒鼓を擲て」と。聰は久しく密庵に依り、衆に徑山に首たり。洪の報恩に出世し、雲居・隱靜・雪峰に遷る。晩に旨を被り徑山に居る。時に謂ふ、「晦庵は安に許可せず」と。抑々亦雪堂、慈悲行の遺蔭するところか。

圓悟初め成都の講肆にあり、范丞相伯才、其の器質の凡ならざるを見て、因つて長篇を作つて其の南方に往いて行脚せんとを激す。其の詞に曰く、「水を觀ば汚池の水を觀ることなけれ、汚池の水

⑥回祿は火の神の名、回祿の災に罹れるなり。

⑦雪堂は佛眼に嗣ぐ、眼は五祖演に嗣ぐ。

⑧蒙庵元聰年廿七にして得度し、特達の發明を得たり、投機の偈に曰く、「了了徹底了、無端赤脚東西走、踏破青空月一輪、八萬四年門洞曉」と。

⑨范丞相、錦江神燈には范蜀公に作る、范蜀公は仲淹にして、慶曆の名臣なり、圓悟と少しく時代合はざるが如し、仲淹、字は希文にして、伯才にあらす、未だ何人なるを知らず、此詩流暢誦すべし、佳作なり。

は魚鱉卑しむ。山に登らば、透遞の山に登ることなけれ、透遞の山は艸木稀なり。水を觀ば直に滄浪の廣きを觀よ、山に登らば直に泰山の上へ上れ。所得少からざれば所見高し、工夫用ひ盡して徒勞にあらず。南方幸に選佛の地あり、好し其の中に向つて妙旨を窮めよ。他年器を成して頹綱を整へば、男兒出家の志に負かざらん。大丈夫今擬議するを休めよ、豈虚名の爲めに身計を滅せんや。歡諧の時節苦た多きなし、却つて光陰に暗に歳を添へらる。成都況や是れ繁華の國なるをや。打住只だ華酒に因つて惑ふ。吾が師は本是れ出塵の人、肯て醒醒に隨つて同じく埋没せんや。吾が師幸に虹蜺の志あり、切に蹉過して泥水に向ふなけれ。君見すや吞舟の魚は小流に隠れず、合抱の木は豈丹丘に生せんや。大鵬一たび展ぶれば九萬里、肯て飛燕の沙鷗に著くに同じからんや。如何ん急流千里の驥、鶴鷄の一枝を戀ふを學ぶなけれ。直饒千の經論を講得するも、也た落つ禪家第二の機に。白雲本自ら高臺を戀ふ。暮に單め朝に籠めて暫くも聞かず。蒼生霖雨の望に赴くが爲めに、等閑に猶ほ自ら山を出で來る。又見すや荆山に、玉石瓊瑤あり、良工に未だ逢はずんば蓬蒿に居るを。當年若し荆楚を離れずんば、争でか連城の價の倍高を得ん」と。

①透遞の山は「のつべり」としたる山なり、此處は山の小なるに就いて云ふが如し。
②玉石瓊瑤は、卞和の獲たる玉璞を云ふ。
③黄魯直山谷、無爲居士揚次公、無盡居士報商英。

本朝の士大夫、當代の尊宿の爲めに語録の序を撰し、語句斬絶なるものは、山谷・無爲・無盡の三